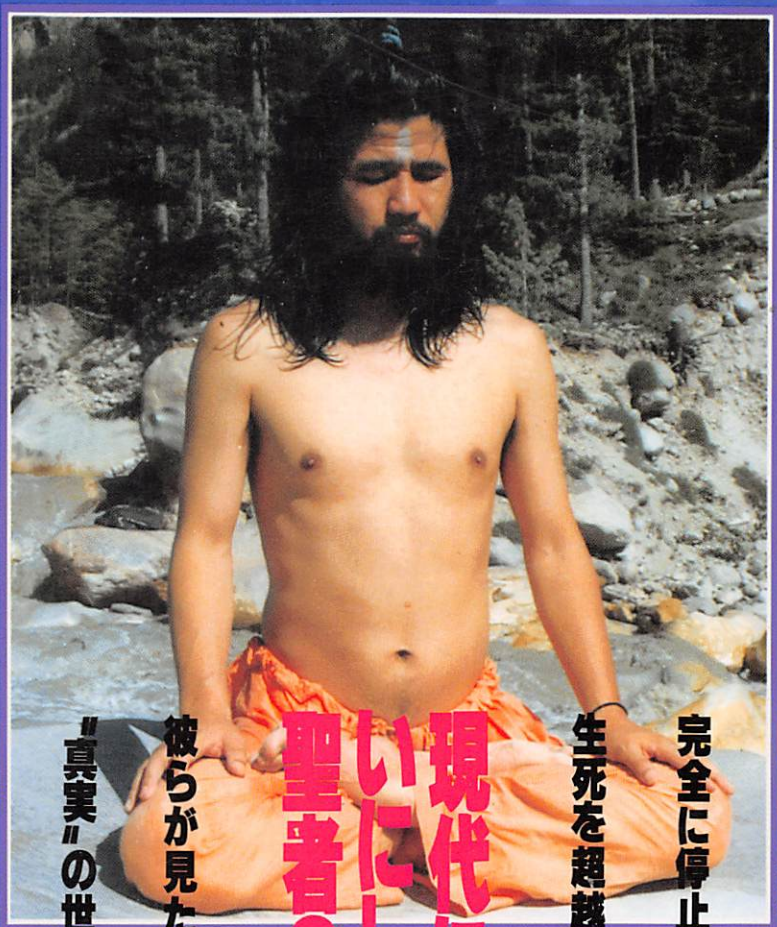
SHOKO ASAHARA

麻原彰晃のザ・サマディ

THE SAMADHI



現代に甦ったいにしえの聖者の奇跡！

それは、真の解脱者だけがなし得る奇跡。

彼らが深い瞑想に入るとき、呼吸は止まり、心臓さえも完全に停止してしまう……。

生死を超越した瞬間、彼らが見た〝真実〟の世界〟とは？

ただ一人の最終解脱者、麻原彰晃尊師がいにしえの聖者の奇跡、サマディのすべてを明かす！

日本には瞑想の本が散乱している。しかし、これらの本は、どれもわたしたちを本当の意味において幸福にしてくれるものではない。なぜならば、それは五蘊からの超越を意味しないからなのである。

では、五蘊からの超越とはなんであろうか？　それは肉体、感覚、心、そしてすべてのデータの止滅に他ならない。

そして、ここに到達する道がサマディであり、このサマディを超えることによって、六つの神の力がわたしたちに宿るのである。これ以上の絶対的真理は存在せず、これ以外の絶対的真理も存在しないのである。

ところで、宗教には二つのタイプがある。一つは思い込みの宗教であり、思い込みの宗教は思い込みの体験をもたらす。わたしたちがこの人間世界に生まれてきていることからもわかるように、もともと迷妄の中に没入しているわけだから、思い込みの体験はよりいっそう思い込みの強い性格形成へと導くことになる。その結果は、下向の世界へとつながり、三悪趣へと至るのである。

反対に、検証的宗教が存在する。これに属する宗教は、サキャ神賢の教えや原始ヨーガに見ることができる。ここではステージを呼吸の停止の状態、あるいは神通力によって測るのである。そして、呼吸停止以降の状態の一つ一つをこと細かく記載して、その後にくる神通力についても同様に細かく記載することによって、その修行者が正しい道を進んでいるかどうかを検証させるのである。

この検証主義における宗教は、人々の魂を絶対的な境地へと誘うこととなる。なぜならば、既に仏教の開祖サキャ神賢や偉大なるヨーガの成就者たちが既にその世界のすべてを知り、表わしているからなのである。

ここにサマディという名の一冊の本を著わした理由は、そろそろ日本の宗教も、この第二番目の検証主義的宗教に移行する時期がやってきたのだと思ったからである。

この本を熟読することによってまやかしの瞑想に読者が惑わされることはなくなるだろう。また、瞑想の真の意味、サマディの真の意味を理解していただくことにより、絶対的世界観や確信を得ていただきたいと思う。

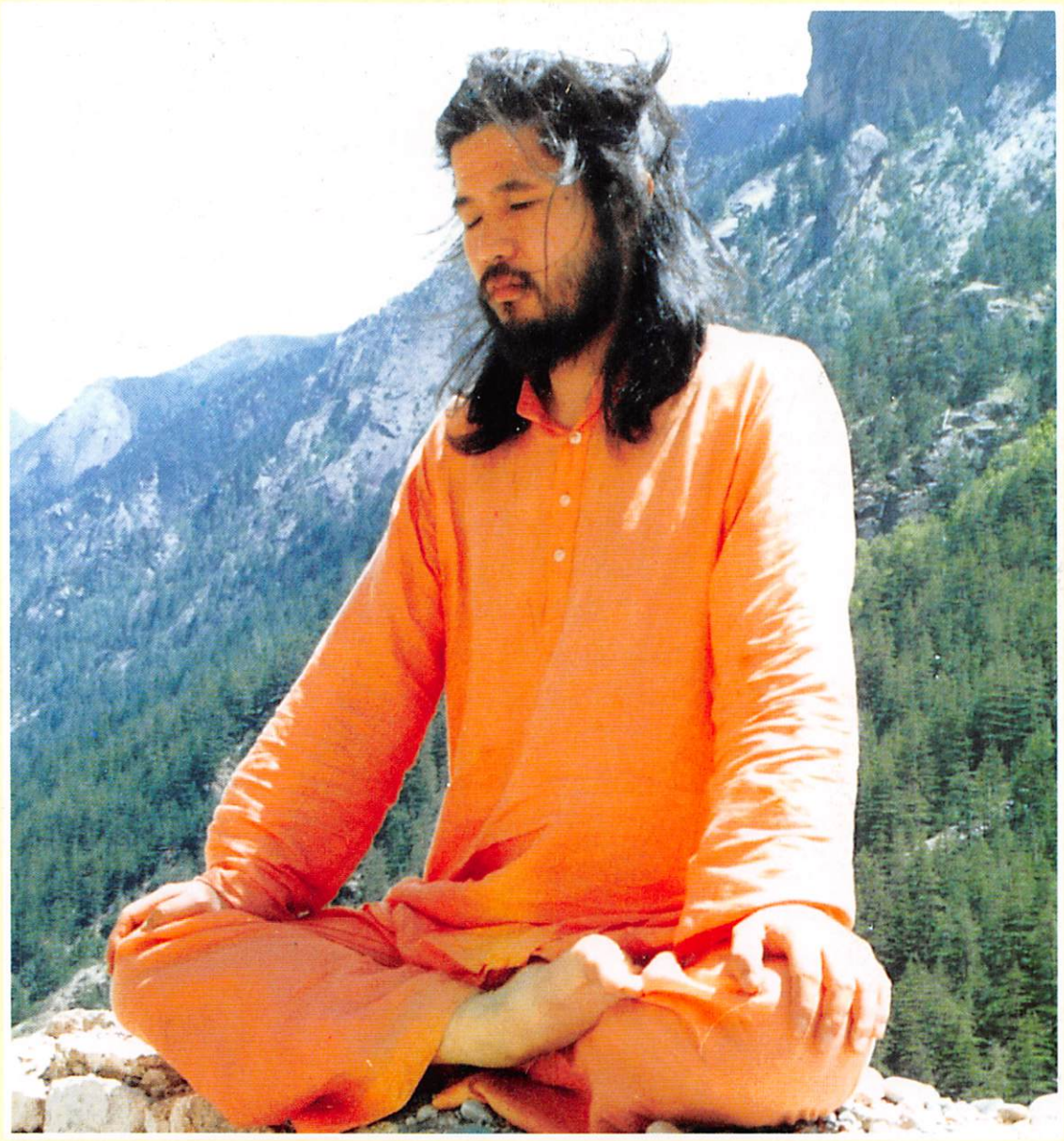
この本によってすべての魂が利益を得、迷妄の闇を払い覚醒へと至りますように。また、シヴァ大神およびすべての十の徳力者に対してのわたしの帰依が証明されますように。

この内容の中で過ちが存在するならば、シヴァ大神およびすべての十の徳力者の知るところとなり、過ちがすみやかに訂正されますように。

１９９１年９月２８日　仙台にて　　麻原彰晃

The Samadhi

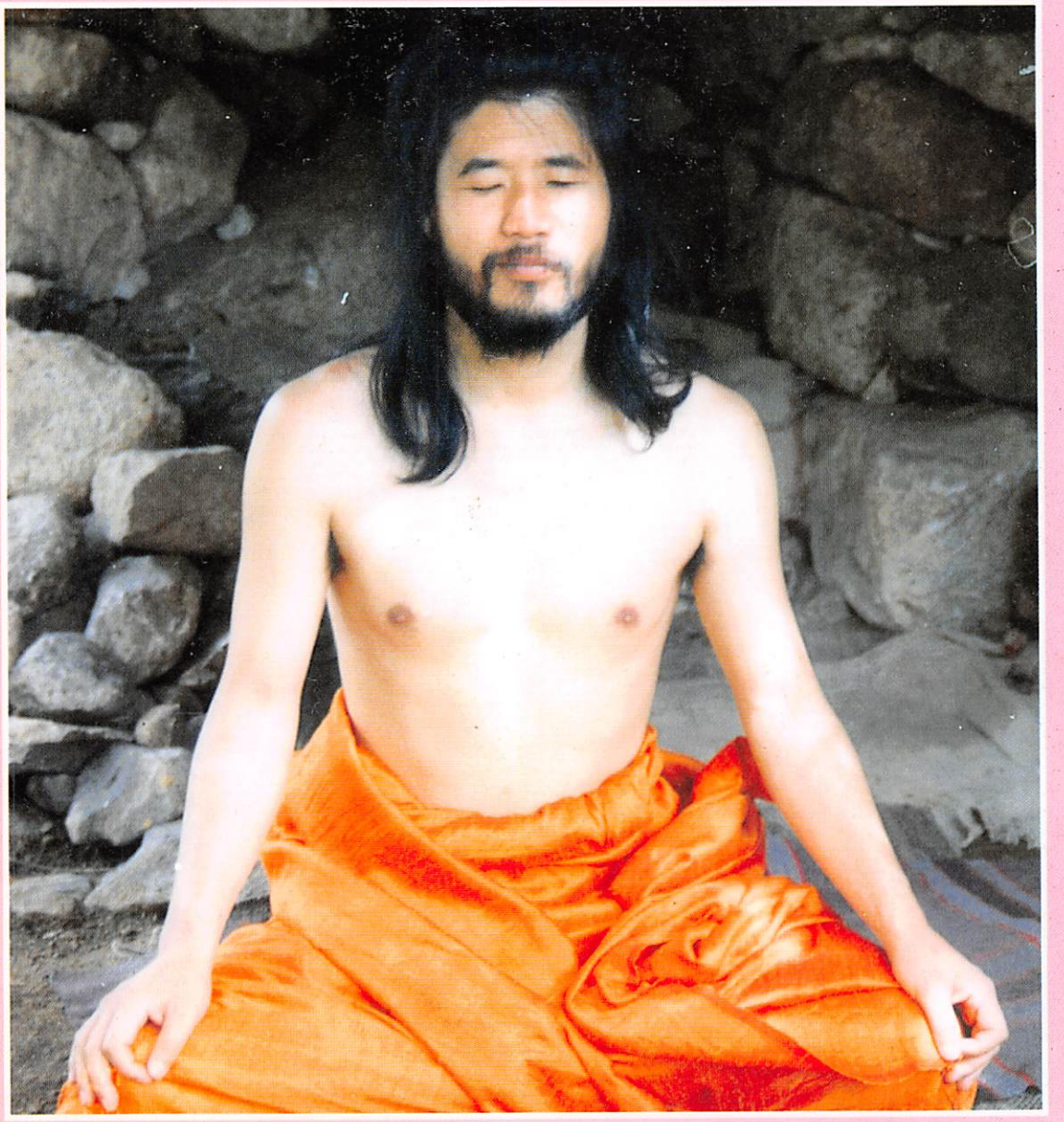
解脱者の証明



真の解脱者が深い瞑想に入った瞬間、
呼吸は止まり、心臓さえも完全に停止してしまう……
生死を超越したその瞬間、彼らは何を見るのか？
最終解脱者、麻原彰晃尊師が
二十世紀最後の奇跡、サマディのすべてを明らかにする。

The Samadhi

サマディがもたらした最終解脱



一九八六年夏、ヒマラヤ山中——
一つの魂のもとに光が降り立った。
崇高なる覚醒が生じたのである。
その瞬間、すべての苦悩は滅し、生と死の壁は破られ、
絶対の自由・幸福、そして、壊れることのない至福の状態が訪れた。
最終解脱——
いかなる日本人もなし得なかった偉業は、
聖なる場所での最高のサマディによってもたらされた。

The Samadhi

水中エアータイト・サマディ

ここに証明されたサマディの奇跡

外界と完璧に遮断された水槽内に設けられた瞑想ルーム。
押しつぶされそうな水圧の恐怖と、
酸素量を限られた過酷な条件の中で行なわれサマディの実験で、
信じ難いデータが記録された。
十二時間連続無呼吸状態——。
一九八八年五月十七日、
いにしえの聖者の奇跡として語り継がれた伝説はここに復活した。

The Samadhi

水中クンバカ

世界記録達成の瞬間！
ジャーナリストも目撃した水中クンバカの奇跡

「十四分二十七秒三十二です。」
タイム・キーパーから記録が発表されると、
富士の空に拍手と歓声がこだました。
この日の主役は背後にそびえ立つ日本一の富士山ではなく、
世界一の記録を達成した彼だった。
一九五九年、アメリカ人のロバート・フォスター氏が
樹立した記録を四十五秒も上回る三十年ぶりの快挙。
一九八九年十月二十二日、
ここにまた一つ、解脱者の〝力〟が証明された。

The Samadhi

特別ドキュメンタリー

サマディで結ばれた二つの聖なる魂の約束
「再会のための訣れ」

――トージェ・チェ（ありがとう）――
どこからともなく響いてきたこの声は、
まぎれもなくカール・リンポチエ師のものであった。
その声を聞いた瞬間、わたしは、
（カール・リンポチェが別れのあいさつをしにやってきた）
と感じ取ったのである。
それは五月七日の朝方、瞑想中の出来事であった。

サマディによって麻原尊師を呼び寄せた聖なる魂は、
サマディによって訣れを告げた……
言葉も国籍も違う何の接点もないはずの二つの魂を巡る
サマディにまつわる壮大なドキュメンタリー。
時空を超えたサマディの真実がここにあった。

（上）チベット仏教の最高指導者、ダライ・ラマ法王とダルマ（法）について語る麻原尊師。法王との交流の中で麻原尊師はカール・リンポチェ師の存在を知った
（下）サマディによって呼び寄せられるようにしてカール・リンポチェ師との対面は実現した

解脱者7人が語るサマディ体験

生死を超えたその瞬間、わたしは真実を知った！ 70

●自己の発する光に包まれて——
幸福に包まれた〝究竟の空の境地〟 72
◆ヤソーダラー正大師

●煩悩が瞬間的に止滅する——
求め続けていた〝解脱〟の瞬間 78
◆マイトレーヤ正悟師

●サマディで知る異世界
阿修羅の世界の発明家 84
◆マンジュシュリー・ミトラ正悟師

●見えない世界の不思議な神秘体験
もう一人の自分、もう一人の世界 90
◆ミラレパ正悟師

●サマディへの道程……
修行が教えてくれた前生のわたし 94
◆サクラー正悟師

●地獄・餓鬼・天界・神聖天を超えて……
サマディで見た真実の世界 98
◆ウッパラヴァンナー正悟師

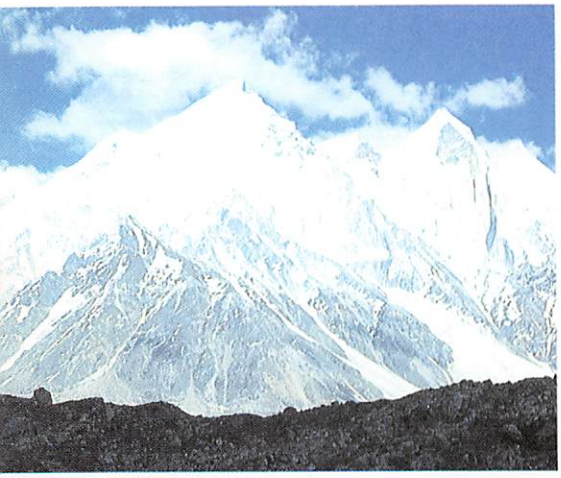
●サマディがもたらした不動の心
オール イズ ストップ 104
◆プンナ・マンターニプッタ正悟師

■巻末特別付録
麻原彰晃尊師説法
「サマディへの道——実践的八正道と四無量心」 108

最高のチャンスがここにある
——あとがきに代えて 120

SHOKO ASAHARA
THE SAMADHI

麻原彰晃のザ・サマディ



実録＝水中エアータイト・サマディ
衝撃！完全密室で
12時間連続無呼吸状態
ここに証明されたサマディの奇跡 12

いま明かされるいにしえの聖者の奇跡！
初公開！
これが"サマディ"のすべてだ 21

■検証サマディ
記録が語る解脱者の力の証明
奇跡を実証した二大実験データ、一挙公開！ 30

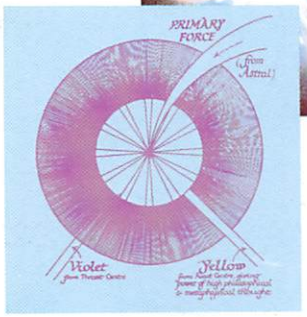
●第一部　水中エアータイト・サマディ
「データに見るサマディの奇跡」 32

●第二部　水中クンバカ
世界記録達成の瞬間！ 36
「ジャーナリストも目撃した水中クンバカの奇跡」

■解明！サマディ
呼吸停止も心臓停止も肉体に全く影響なし！
"サマディの奇跡"の謎を科学する 41

史実に見るサマディの軌跡
「サマディは偉大なる聖者の証だ！」 46

特別ドキュメンタリー　故カール・リンポチェ師に捧ぐ
生死を超えた二つの聖なる魂の約束
「再会のための訣れ」 58



タイト・サマディ》

12時間連続無呼吸状態
サマディの奇跡

ここに一つの記録が残されている。

今からおよそ二年半前の一九八八年五月十七日のことである。

静岡県富士宮市のオウム真理教総本部道場敷地内――。

富士山を背後に仰ぐように並べられた二つの水槽の上に、

奇跡の証明に挑もうとする二人の解脱者の姿があった。

外界と完全に遮断された水槽内に設けられた瞑想ルームで

それぞれ深い瞑想状態に入った二人の解脱者を

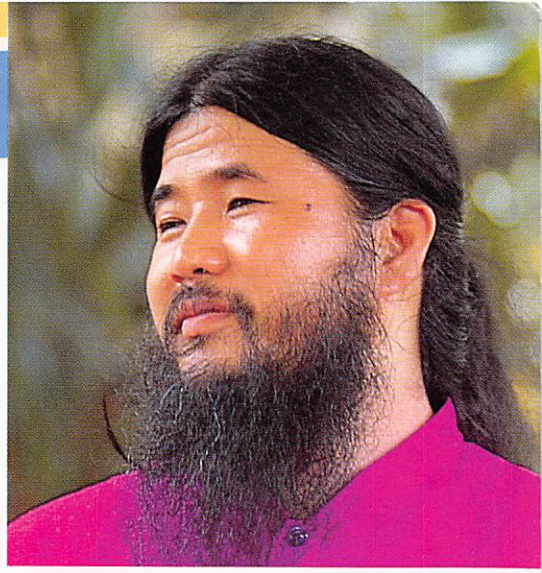
Scientific
Samadhi

《実録＝水中エアー

衝撃！完全密閉室内で
ここに証明された

押しつぶされそうな水圧と、酸素量を限られた過酷な条件が襲う。
常人にはとても耐えられそうもない
死と隣り合わせのこの悪環境から彼らが解放されたのは、
それから約二十時間後のことだった。
この間、なんと十二時間連続無呼吸状態を記録――。
いにしえの聖者の英断として語り継がれた伝説は
ここに復活したのである。

柔らかな朝日に包まれたシルエットが浮かび上がった



麻原彰晃尊師

国内のみならず、広く海外に支部を持つオウム真理教の開祖。1986年、ヒマラヤで最終解脱を果たす。その比類なきステージの高さには、チベット仏教の政治的・宗教的指導者であられるダライ・ラマ法をはじめとして、チベット仏教の高僧やインドで〝聖者〟と呼ばれるヨーガの成就者たちも絶賛している。また、執筆活動や音楽活動、さらにはオペレッタの総指揮などその才能は多岐にわたっている。

高原の澄んだ空気を胸いっぱいにして迎えるさわやかな一日の始まり……。しかし、この日ばかりはいつものさわやかな朝とは全く違う、辺りにはむしろ緊張感さえ漂っていた。

今からおよそ三年半前の一九八八年五月十七日、静岡県富士宮市のオウム真理教総本部道場敷地内——。

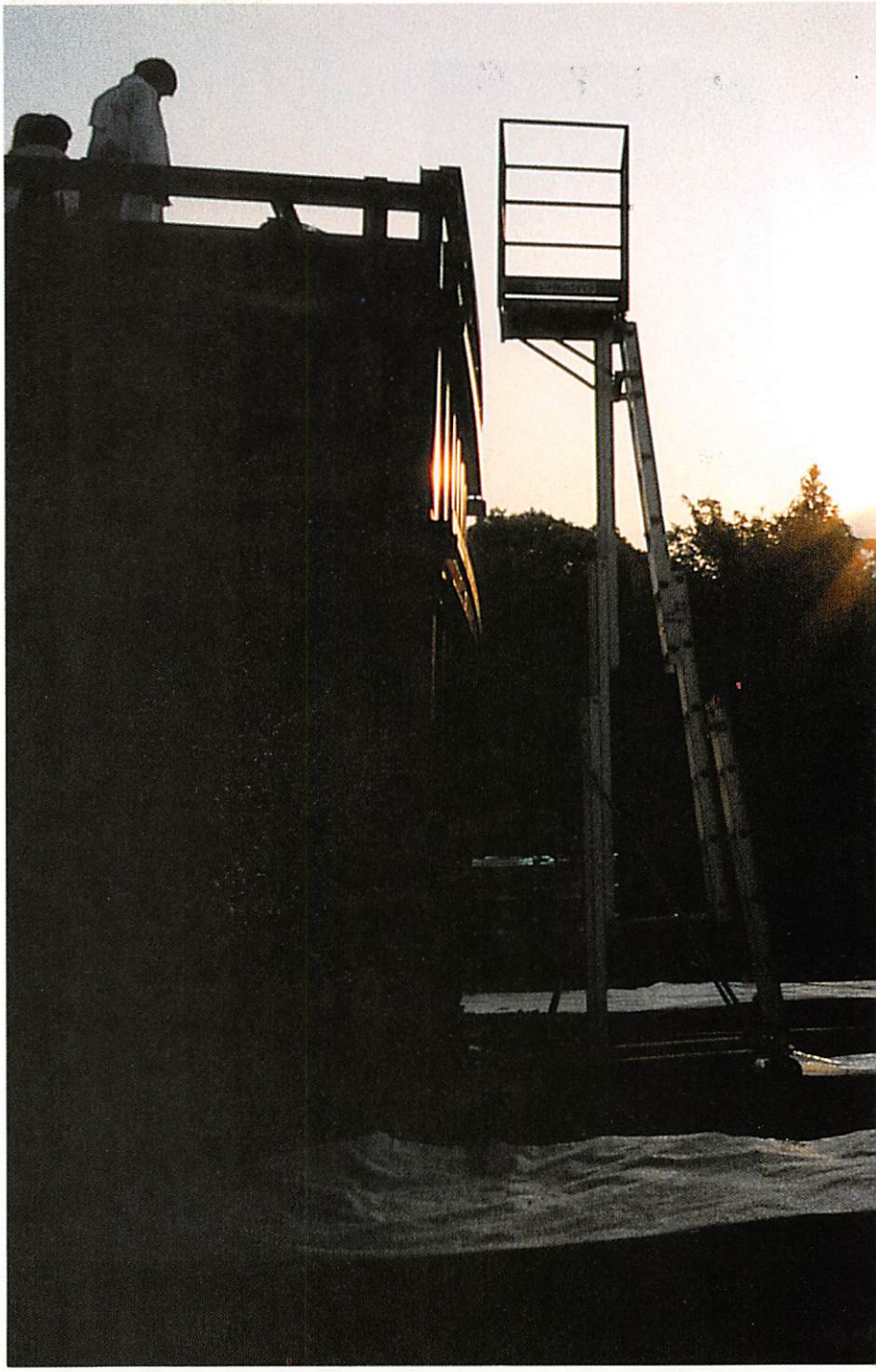
霊峰・富士を背に仰ぐようにきちんと並べられた二つの巨大水槽の上に、柔らかな朝日に照らされた二つのシルエットが浮かび上がった。影の主は、その比類なきステージの高さは世界の聖者も認めるところであるオウム真理教開祖、麻原彰晃尊師。そして、もう一人はこの数日前にジュニアーナ・ヨーガを成就して個の完成を果たしたばかりの愛弟子、マハー・ケイマ正大師である。

この日、二人の解脱者により、サマディの奇跡の実証がなされようとしていた。

午前五時四十分、二人の解脱者が、二つの水槽内に設けられたそれぞれの瞑想ルームに入る。山際

マハー・ケイマ正大師
麻原尊師の一番弟子。1984年修行の道に入り、87年クンダリニー・ヨーガ、88年マハー・ムドラーを成就。個の完成を果たし、仏典でいうところの供養値魂（阿羅漢＝あらはん）のステージに至る。なお、「水中エアータイト・サマディ」の以後、「※シャクティーパット」など他を利する修行に励まれ、89年には大乗のヨーガを成就。

（MEMO）
※シャクティーパットとは？
霊的指導者であるグルが弟子に対して奥儀を教え、さらに、霊的エネルギーの移入、霊的経験を授けるイニシエーション（秘儀伝授）の中でも最高の部類に入るもの。解脱者が相手の身体に直接触れ、高次元のエネルギーを移入するのだが、反面、解脱者にとっては相手のけがれたカルマを背負うことになり、肉体的にも精神的にも激しいダメージを受ける。



霊峰・富士を背に仰ぐように並べられた二つの巨大水槽の上に、

から注がれる朝日に富士山の稜線がくっきりと浮かび上がり、大自然がつくり出した美しい光景がまるで二人の解脱者を祝福していたようである。

大観衆の見守る中で、ケイマ正大師の水槽のハッチが閉じられたのは午前六時四十八分。続いて午前七時には麻原尊師の水槽のハッチも閉じられた。水槽は完全に密封され、瞑想ルームへの外気の流入は一切遮断されたのである。いにしえの聖者の奇跡、サマディの証明は、もやがまだ残る高原の早朝から始められたのであった。

観衆たちも緊張した面もちで見つめる

◉水中エアータイト・サマディは解脱者の奇跡の証明

記録をひもとく前に、まずはこでサマディ、並びに当時行なわれた水中エアータイト・サマディの目的について説明しておこう。

詳しい説明は後に譲るとして、サマディとは一言でいえば「究極の瞑想状態」のこと。肉体的には心臓、呼吸、代謝などすべての生理機能が停止し、一見すると「死の状態」のそれと同じである。わかりやすい換えれば、サマディに入っている状態では、その人は飲まず、食わず、排泄もせず、そして一切の酸素も消費しないという。

ちなみに古代インドの文典家、パタンジャリが著わしたとされる最古にして最高のヨーガ教典、『ヨーガ・スートラ』では、この状態をもって解脱の証明としている。

水中エアータイト・サマディは、まさにこの解脱者の奇跡の実証なのである。文字どおり外界と遮断された限られた酸素量しかない悪条件下で、飲まず、食わず、排泄せずの状態で続ける長時間の瞑想。また、このサマディの成功は同時に、麻原尊師とケイマ正大師の二人が真の解脱者であることを表わすのはいうまでもない。

ところで、インドなどで聖者が時折行なうサマディは、密閉したボックスを土の中に埋めるアンダー・グラウンドの形態がほとんど。そのため麻原尊師らの場合も、当初は「地中サマディ」が予定されていた。しかし、これまでにないより苛酷な条件下での挑戦を希望し、急きょ計画を変更して水中で行なわれることになった経緯がある。

具体的には、二重水槽を用意して三立方メートルの内側水槽内でサマディを行ない、外側水槽には水を入れて前後左右上下とも三〇センチ程度の厚さで水が覆い、四日半の間、完全に外気を遮断する。また、内・外水槽にアクリル板の窓をつくり、瞑想ルーム内で不正が行なわれていないことが外側からでも確認できるようにしたわけである。もちろん、これは世界でも類のない画期的な方法であることはいうまでもない。

過酷な条件下で実験は行なわれた

●なぜ四日半のサマディなのか?

水中エアータイト・サマディが四日半という期限で設定されたのは、酸素濃度の変化とそれによって引き起こされる肉体の症状の変化に基づいている。すなわち別表のような医学的データからまずはデッド・ラインを酸素濃度一四パーセントに設定。実験から麻原尊師とほぼ同じ体格の人間（被験者は一般人より酸素消費の少ない修行者）の一時間あたりの酸素消費量を測定し、ここから計算された限界時間のほぼ倍の時間、四日半という数字がサマディの時間として算出されたわけである。

空気中の酸素濃度（%）	症状
21	平常
18	安全限界
16	頭痛、不安、呼吸、脈拍増
14	視力障害、意識混濁、吐き気
12	筋痙攣、墜落、呼吸困難
10	顔面蒼白、意識不明、痙攣 嘔吐（吐いたものが気管をふさぐ）
8	昏睡、8分で死亡
6	呼吸停止、即死

酸素濃度と症状

二重水槽の内水槽は水で覆われ、外気の流入は完全に遮断するという、

◉有毒ガスが発生している!?

ところで、過去二度のトラブルによる中止（詳しくは別項の記事を参照）から、この日ようやく実現した水中エアータイト・サマディは、当初から不安の残るスタートとなったようである。

「有毒ガスが出ている。」

麻原尊師の方からこんな指摘があったのは、サマディ当日からさかのぼること二日前の五月十五日のことである。しかし、実際にハッチを開けた状態では計測器の針はゼロを指していた。結局、何のなす術もなくそのままの状態でオープニングを迎えることになるのだが、これが当初四日半を予定していた水中エアータイト・サマディの日程を大きく狂わす原因となろうとは、スタッフのだれ一人として想像できなかった。

それはともかく、麻原尊師の予想はサマディ開始直後、間もなく

●二度のトラブルを教訓に

三月十六日（第一回）の水もれの発生、そして同二十一日（第二回）の有毒ガスの発生と、二度にわたるトラブルによって延期を余儀なくされた水中エアータイト・サマディ（このときは麻原尊師のみが挑戦）。しかし、二度のトラブルによる中止の経験は、むしろ水中エアータイト・サマディを成功させるために必要不可欠なステップとなった。

まずは第一回目のときのトラブル——。内側水槽密閉後、八時間を過ぎたところで内側水槽の後ろ側で室内への水漏れが始まり、中止を余儀なくされたのだが、スタッフの一人からショッキングな情報がもたらされたのはその二日後だった。

実は、建築強度計算を行なったところ、当時の水槽の構造状態で水漏れがなく内側水槽を水によって密閉したのならば、二七トンの水圧に耐えられず「天井部分が破れ、内側水槽の人間は危険にさらされていた」というのである。

まさにトラブルは神々の祝福か。スタッフが様々な方法を駆使して防止に努力したにもかかわらず水漏れが発生したのもうなずける。

第二回目のトラブルも同様のものだった。麻原尊師が内側水槽内に入ってから四時間後、スタッフの一人からこんな指摘がなされたのである。

「サマディ室内に使われている鉄骨が錆びるとき、室内の酸素を消費している。このままではもし麻原尊師がサマディに入って酸素消費がなされなくなったとしても、正しいデータが残らない。」

これは室内の三十本の鉄骨の表面が〇・〇一六ミリメートル錆びただけで酸素が二一パーセントから一四パーセントまで消費されるというから大変なものだった。

さらに、麻原尊師の指摘によりゴムシートに使われたボンドから発生する室内の有毒ガスを調べてみたところ、ダクト・ファンを回しているにもかかわらず、一一ppmという有毒ガスがモニターされるという恐るべきデータが報告されたのである。

もし二度のトラブルがなく、そのまま進行していたら……、

①室内に入る
②密閉されて水中に内側水槽が沈む
③サマディに入る
④この間に室内は有毒ガスが充満する
⑤サマディから醒め、再びサマディに入ろうとするとき有毒ガスを吸い、意識が混沌となる（この状態で天井が破れるかもしれない）
⑥死

おそらくこんなプロセスをたどっていたに違いない。

水中エアータイト・サマディはまさに神々から祝福された奇跡の証明だったようである。

的中した。ハッチを密閉後、ケイマ正大師の室内の有毒ガスの数値が、既に六ppmを記録していたのである（ちなみに麻原尊師の室内は0ppm）。この時点で有毒ガスの原因は一切不明。外部から入り込んだものならもちろん全く問題ないが、内部から発生しているとなると話は違う。時間が経つにつれて瞑想ルーム内に有毒ガスが充満する危険があるからである。まさに不安の残るスタートであった……。

それからほどなくして、内側水槽の瞑想ルームの完全防水処理が完了し、次いで、外水槽に水を注ぎ始められた。注水が完全に完了したのは、麻原尊師の水槽が午前九時十一分、ケイマ正大師の方は時計の針は十時二十分を指していた。一仕事終えたスタッフの間に、安堵の空気が流れる……。当時の記録を振り返ってみても、スタッフたちの間に束の間のリラックス・ムードが流れたのは後にも先にもこの一瞬だけだったかもしれなかった。

◉十二時間連続酸素消費ゼロ 驚異の長時間サマディ

水槽内の瞑想ルームと連絡が取れるようにあらかじめ設けられたインターホンを通じて、麻原尊師から連絡が入る。午前九時五十五分、十一時三十分、十二時五十六分……、いずれも酸素濃度等のチェックのための連絡である。そして、四度目の連絡となった十五時十二分、麻原尊師とスタッフの間にこんなやりとりが記録されている。

「ケイマ大師の酸素濃度は二一パーセントのままか？」

「全く変化ありません。」

「そうか、初めてだから一生懸命やってるんだろう。余計な情報を入れると影響するから、向こうから連絡が来たときにだけ教えるようにしてくれ。」

どんな窮地に追い込まれながらも愛弟子を気遣う麻原尊師。しかし、それ以上に我々を驚かせたのは、ハッチの密閉から八時間を経過したこの時点に至っても、ケイマ正大師の室内の酸素濃度計が当初の二一パーセントを示したままという驚くべき事実であった。〇・一パーセントの微量ながらもようやく酸素消費が確認されたのは、結局、サマディ開始からおよそ十二時間を経た十八時八分。開始直後に早くも驚異の長時間サマディは実現し、解脱者の奇跡の証明がなされたのである。

◉水槽が呼吸している！

一方、麻原尊師の方はどうだったのだろうか？

酸素濃度は、九時五十五分には二〇・八パーセント、十一時三〇分には二〇・七パーセント、十二時五十六分には二〇・六パーセントと、ゆるやかな減少を示している。データだけを見れば、徐々に深いサマディに入っているようで、すべてが順調に進行していることを示すものと思われていた。

しかし、後になって明らかになったことだが、データそのものが正確ではなかったのである。十五時十二分、求められるままにスタッフがデータを報告する。

「酸素濃度二〇・五パーセント。〇・五パーセント減です。最終予想一四・三パーセント。ギリギリOKです。」

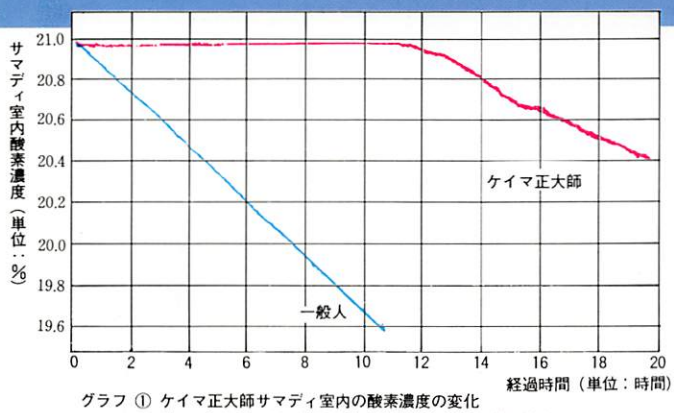
様々なテクニックを駆使してサマディに入っている麻原尊師。しかし、それに反して水槽内の酸素はなぜか減り続けていたのだ。

この理由はサマディ終了後に行なわれた実験で明らかになった。密閉状態のまま無人の水槽で酸素濃度の測定を行なった結果、ケイマ正大師の水槽の酸素濃度に変化がないのに対し、麻原尊師の水槽の酸素濃度は減少し続けるのである。無人の水槽で減り続ける酸素……、信じられないことだが、水槽自体が呼吸をしていたわけである。

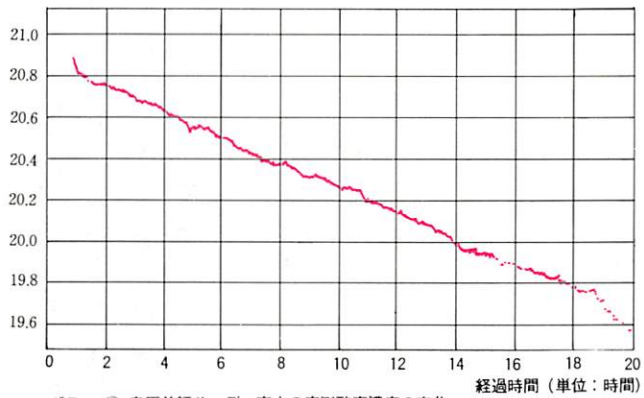
詳しい原因はわからなかったが、どうやらサマディの直前にストーブで内部を乾かしたため、酸欠状

態になった木材が酸素を消費していたらしい。いずれにしても、水槽そのものが酸素を消費しているのだから、これでは正確なデータが得られないわけだ。

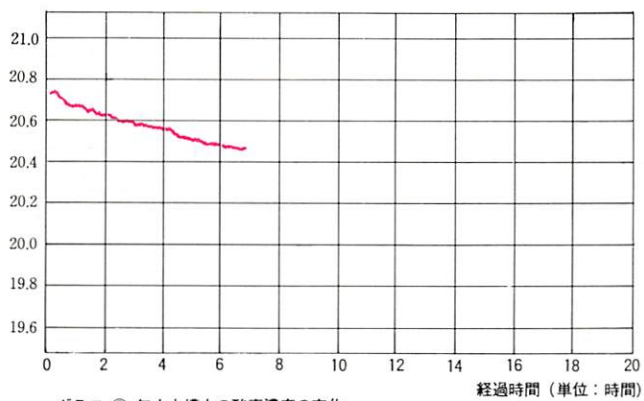
もっとも、別表のように酸素濃度の自然減の部分を差し引いて記録を振り返ってみると、麻原尊師の場合も順調にサマディに入っていたことがわかるだろう。



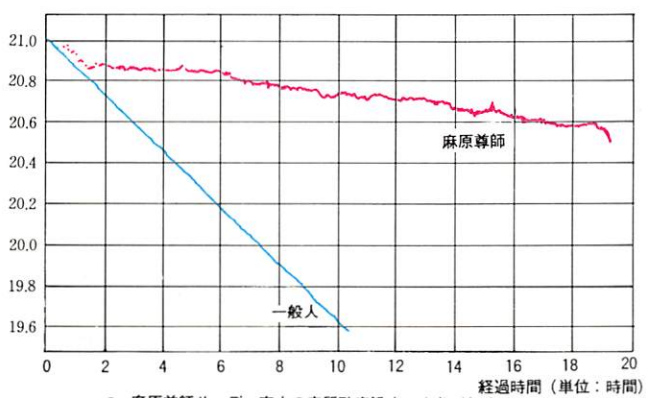
グラフ ① ケイマ正大師サマディ室内の酸素濃度の変化
（1988年５月17日、静岡県富士宮市オウム真理教総本部道場）
装置の構成…サマディ室３×３×2.4ｍ、実質内容積20.0㎥



グラフ ② 麻原尊師サマディ室内の実測酸素濃度の変化



グラフ ③ 無人水槽内の酸素濃度の変化



グラフ ④ 麻原尊師サマディ室内の実質酸素濃度の変化（仮定）

二重水槽の外観（上）とアクリル板の窓からのぞいた内水槽の様子。
これなら室内で不正が行なわれていないのは一目瞭然である

◉予想を上回る解脱者の力

ところで、当初、四日半という長期にわたって行なわれる予定だったこの水中エアータイト・サマディは、一つのトラブルをきっかけに意外な結末を迎えている。オープニングのときから不安視された有毒ガスがやはり水槽内から発生していたため、あえなく終了を余儀なくされたのである。

サマディ開始直後、六ppmだったケイマ正大師の室内の有毒ガスの値は、十二時五十六分一〇ppm、十六時二十三分一三ppmと徐々に増加。翌十八日の〇時二分にはなんと二〇ppmにまで達していた。この有毒ガスの影響でケイマ正大師は十二時間の長期サマディ以後、サマディに入れなくなっていたのである。

一方の麻原尊師とて条件は同じであった。有毒ガスの増え方はケイマ大師の室内ほど急ではなかったが、これは麻原尊師がトゥモという技法を使って体内で有毒ガスを燃やし続けて毒性をなくしていたからに他ならない。事実、サマディ後無人の水槽で計測したところ、有毒ガスは急激に増え始めているのである。

麻原尊師から、「ケイマ大師のサマディを終わらすように」との指示があったのは五月十八日の〇時二分。一向に止まる気配のない有毒ガスが原因であることはいうまでもない。このときサマディ執行部では臨時会議を開き、同時に麻原尊師のサマディの終了をもお願いすることになった。トゥモで消費しているとはいえ、麻原尊師自身の肉体への有毒ガスの影響が心配されたからである。そして、執行部の説得の結果、麻原尊師も四日半のサマディをやむなく断念したのである。

五月十八日二時二十四分、麻原尊師が水槽から出られ、次いで二時三十五分にケイマ大師も水槽から出られた。残念ながら四日半のサマディ期間に水槽は耐えられなかったが、十二時間酸素消費ゼロ、有毒ガスの体内消費など解脱者が演じた多くの奇跡のデータを残しながら、水中エアータイト・サマディの幕は静かに降りたのである。

●水中エアータイト・サマディのもう一つの目的

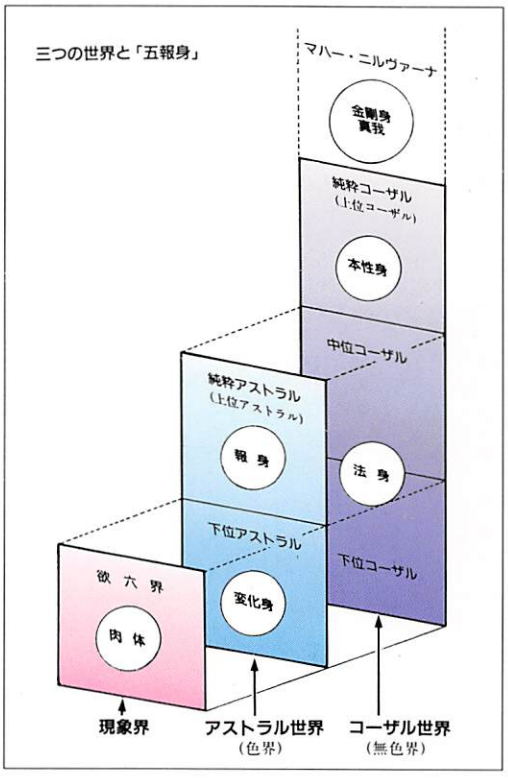
八八年五月の水中エアータイト・サマディには、サマディの科学的証明はさることながら、他にも複数の目的があった。その一つが、道場建立予定地を神聖な空間に変える、というものである。

というのも、修行者がサマディに入ると、その空間は現象界といわれるこの世界の裏にあるアストラル世界、コーザル世界、そしてマハー・ニルヴァーナとつながるのだが（下記のイラスト参照）、このときそばで瞑想する弟子たちも、自然とグルの空間へと誘われるからなのである。

つまり、解脱したグルが弟子と一緒に瞑想したときと、弟子が一人で瞑想したときでは、弟子の瞑想体験がまるで違うということである。

ちなみに、これがインドでは、「グルなしには解脱できない」とされるゆえんであり、インドの修行者たちが、瞑想により高い世界を経験できるグル探しに一生をかける、といわれる理由でもある。

ところで、水中エアータイト・サマディの効果のほどだが、以後、麻原尊師の指導のもとに、このオウム真理教総本部道場から多くの解脱者が誕生していることからも、当初の目的は十分に達成されたように思われる。



MIRACLE OF THE SAINTS

真の解脱者が深い瞑想に入った瞬間、
呼吸は止まり、心臓さえも完全に停止してしまう……
通常ならこの状態が〝死〟を意味していることはいうまでもない。
しかし、深い瞑想から目覚めたとき、
何事もなかったかのように生命活動が再開されるから、
サマディが〝奇跡〟と呼ばれるゆえんである。
彼らが深い瞑想状態に入るとき、
なぜ肉体の機能が停止してしまうのか?
そして、その瞬間、彼らが見たものは?
生死を超越した二人の解脱者によって実証された
二十世紀最後の奇跡、
サマディのすべてを明らかにする。

いま明かされるいにしえの聖者の奇跡!
初公開! これが〝サマディ〟のすべてだ

◆サマディとは？

サマディとはいったいどのようなものだろうか？　わかりやすくするために、段階を踏んで話を進めることにしよう。

まずは耳慣れないサマディという言葉の明確な定義からである。サマディという言葉はサンスクリット語で、この字義は死の状態を意味している。ついでに科学的な定義も明らかにしておくならおよそ二説に大別され、第一は「完全なる呼吸停止と完全なる心臓の拍動停止の状態」、そして、第二は完全なる呼吸停止の方は同じだが、「心臓は微拍動している状態」を指すとされる。現代のインド・ヨーガの研究では、後者が正統とされているようである。

初心者向けにもう少しやさしく説明しておこう。仮に、ここに一人の修行者がいて瞑想修行を行なっていたとしよう。彼が単なる瞑想状態かサマディに入っているのかは、端から見ただけではもちろんわからないだろう。しかし、外見はともかく、肉体そして意識においては、単なる瞑想状態とサマディに入っている状態では明らかな違いが見られるのである。

例えば、肉体レベルの相違点であるが、瞑想とサマディでは次のような違いがある。

①呼吸状態……瞑想状態では静かな呼吸を繰り返すが、サマディにおいては呼吸停止が訪れる。

②心拍数……心臓停止ないし微拍動によってサマディでは心拍数が測定不能ないし激減するのに対して、瞑想状態では平常時と比べて著しい変化は見られない。

③新陳代謝……瞑想では大きな変化は見られないが、サマディでは代謝が著しく低下する。

ついでに、意識における相違点も挙げておこう。これについては経験的にしか述べられないため「恣意的見解」というそしりは免れないが、瞑想時は自己の煩悩、カルマのエネルギーに押し流された状態、もっとわかりやすくいうなら雑念に流された状態であるのに対して、サマディではこうしたものに左右されない絶対的な自由・幸福・歓喜の状態をともなうということだけは述べておこう。

意識の点はともかく、端から見れば全く同じに思える瞑想とサマディも、肉体レベルではかなりの違いが見られるのである。

●四静慮＝仏典に記されているサマディの状態

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの静慮がある。

それでは、四つとは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここで向煩悩滅尽多学男は、諸々の愛欲を遠離し、不善の法則を遠離して、有熟考有吟味にして、遠離から生じる喜と楽とがある、第一静慮を具足してとどまる。

熟考と吟味を静止し、心の中を落ち着かせ、心が一点に集中し、無熟考無吟味にして、サマディから生じる喜と楽とがある、第二静慮を具足してとどまる。

喜から離愛著し、無頓着となってとどまり、記憶修習し正智して、身によって楽を覚え、諸々の貴人が『無頓着にして記憶修習がある楽の時を過ごす』と明かす、第三静慮を具足してとどまる。

楽を捨断し苦しみを捨断して、以前の幸福と激痛とを全滅したことから、不苦不楽にして、無頓着と記憶修習による純粋とがある、第四静慮を具足してとどまる。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが四つの静慮なのである。

（『南伝大蔵経』「静慮相応」より）

◆サマディの段階

サマディの段階による違いを踏まえながら、もう少し詳しく検討してみることにする。

最古にして最高のヨーガ教典、前出の『ヨーガ・スートラ』によれば、ヨーガ修行のステージには三つの段階があるとされている。精神集中（ダラーナ）、瞑想（ディアーナ）、超覚醒（サマディ）がそれで、この三つをもって広義の意味で「サマディ」という言葉が用いられている。

三つのサマディに入れる条件は、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、ジュニアーナ・ヨーガの各ヨーガの修習である（それぞれのヨーガについては別項参照）。具体的には、ラージャ・ヨーガを修習すると、ダラーナに入れるようになり、同様に、クンダリニー・ヨーガでディアーナ、ジュニアーナ・ヨーガで超覚醒のサマディに至るわけである。

さらに細かく見ていくと、この超覚醒もまた、大まかに二つのサマディに分類できる。これがサヴィカルパ・サマディとニルヴィカルパ・サマディの二種類である。

サヴィカルパ・サマディというのは、自分がこの世に生きているという意識が存在したままで我々の住むこの現象界の裏側にある世界、つまり、アストラル世界、コーザル世界へと意識が飛んでいる状態である。このとき呼吸や心臓は完全に停止し、肉体は仮死状態となる。これは、いわゆる「死後涅槃」に達するものである。

●最終解脱に至る六つのヨーガ

◎ステップ1——ラージャ・ヨーガ
意志のヨーガともいう。煩悩の否定によって生じる集中のエネルギーにより、外界からの刺激や影響を一切受けないプラティヤハラという制感の状態にある解脱の一ステップ。

◎ステップ2——クンダリニー・ヨーガ
エネルギーのヨーガ。尾てい骨に眠るクンダリニー・エネルギーの覚醒・上昇により煩悩を昇華し、安定した心の状態を保っている解脱の一種。エネルギー・ロスがない限り、煩悩に左右されない状態にある。

◎ステップ3——ジュニアーナ・ヨーガ
分析のヨーガ。物事をありのままに見つめる純粋観照智により、自らの煩悩を原因レベルにまでさかのぼって分解する、煩悩に全く左右されない解脱の状態。仏典でいうところの「供養値魂」（阿羅漢）を指すマハー・ムドラーと同様のステージである。

◎ステップ4——大乗のヨーガ
三つのヨーガの成就をベースに、四無量心（慈愛・聖哀れみ・称賛・聖無頓着）の実践により自他の区別さえ滅している解脱者。この大乗のヨーガが完成すると、この現象界に再生するカルマは消える。

◎ステップ5——アストラル・ヨーガ
報身のヨーガともいう。現象界の裏にある純粋アストラル世界で活動する「報身」といわれる身体に自由に意識を移し変えることができる。アストラル・レベルでカルマを消滅させることができるので、この段階まで来ると「魂の救済意欲」以外には全く執着がなくなる。

◎ステップ6——コーザル・ヨーガ
いわゆる真解脱の状態。純粋コーザルの世界で活動する意識だけでできた身体、「本性身」に到達し、コーザル・レベルでデータの入れ替えが行なわれる。すなわち、このヨーガの完成が再生される因を全く持たない最終解脱の状態である。ちなみに、コーザル世界まで到達するには最低三時間以上のサマディが必要とされている。

（MEMO）
※真我
コーザル世界、アストラル世界、そしてこの現象界の三界ができる以前から存在していた、我々の魂にとっての本当の自己。永遠、不滅、歓喜の三つを属性とする。この真我に「三グナ」と呼ばれるラジャス（熱・動性）、タマス（音・暗性）、サットヴァ（光・善性）のエネルギーが干渉し、三界が創造された。

これに対し、ニルヴィカルパ・サマディの場合、その違いは意識そのものが既に涅槃の状態にある。涅槃にあって、この現象界、その裏側にあるアストラル世界、コーザル世界のすべてが経験できるのが、このニルヴィカルパ・サマディというわけだ。このサマディに入れるステージでは、呼吸停止のまま、肉体を動かしたり話したりすることが可能となる。すなわち、このステージに達すると、魂の本質である※真我のオーダーによって自由にイメージや肉体を操ることができるわけである。これがいわゆる「現世サマディ」または「現世涅槃」といわれる状態で、力のある聖者はおよそこのステージに達していた。

ちなみに、『ヨーガ・スートラ』には有想三昧、無想三昧、有種子三昧、無種子三昧というサマディのステージも記載されているが、これら一つ一つはすべてサヴィカルパ・サマディに対応するものである。そして、これら四つのサマディをすべてを終えて、初めてニルヴィカルパ・サマディに入れるのである。ニルヴィカルパ・サマディというのはそれほど高いステージなのである。

ところで、前出の水中エアータイト・サマディの際、麻原尊師はサマディの最中に頻繁にインターホンで酸素消費等のデータ確認のために外部と連絡を取っていた。「なぜサマディに入っているのに?」と疑問に思われた方もさぞかし多かろうが、これは麻原尊師がニルヴィカルパ・サマディに入れるステージに到達していたからで、サマディの最中にスタッフとインターホンで連絡を取る余裕があるのもなんら不思議なことではない。

◆なぜ呼吸が止まる?

ところで、その麻原尊師が最近、仏教経典の研究と自らの経験から、サマディを明確に分類した記事を発表しているのでここに引用させてもらおう。

《サマディとは、風エレメントが空エレメントに還元された状態を指す。これは呼吸の停止と同義である。なぜなら、風エレメントが呼吸を司っているので、それが空エレメントに還元されると呼吸が停止するからである。》(オウム真理教刊『えんじょい・はぴねす』十月号、「宗教は一つの道」から)

とりあえず、耳慣れない「風エレメント」「空エレメント」について説明しておこう。これはヨーガ理論でいうところの肉体を構成する五つの要素のことである。五つの内容は次のとおりである。

①地エレメント……筋肉組織・骨・嗅覚
②水エレメント……血液・体液・味覚
③火エレメント……体温・消化の炎・視覚
④風エレメント……人体エネルギー・呼吸・触覚
⑤空エレメント……宇宙エネルギー・体腔・聴覚

つまり、呼吸を司っている風エレメントがサマディによって空エレメントに還元され、呼吸の停止が起こるわけである。

さらに、冒頭でも述べたとおり心臓の動きには二説あるが、ここではその理由までもが明確に述べられている。引き続き該当部分を引用してみよう。

《心臓の拍動とは意識の働きを表わしている。よって、この欲界を完全に越えるサマディに入った場合のみ、つまり粗雑な元素でできている心臓から意識が超越したとき心臓が停止するのである。

『神聖網経』(編集部注=『南伝大蔵経』長部経典)において、欲界を経験するサマディは、大別して四つに分かれると説かれている。これは正しい。

下から順に説明しよう。

人間の意識レベルをそのままに温存し、その意識の深い状態に入り、現象の整理と検討、熟考によって得るサマディが一番下のサマディであるが、このときの呼吸はほとんど停止し

サマディで有名なインドの超能力者、パイロット・ババと瞑想する麻原尊師

●サマディがもたらした最終解脱

インドの超能力者、パイロット・ババ。彼のサマディは日本のテレビ局でも取り上げられて話題になったほど有名だが、麻原尊師のステージの高さはこのパイロット・ババも手放しで絶賛していた。

一九八六年五月、ヒマラヤ山中で修行を行なっていた麻原尊師に向かって、かつてパイロット・ババはこう語ったことがある。

「大変素晴らしいことだ。あなたはもはやブッダのような人になった。そして、このあとのサマディで、あなたは完全にブッダとなるだろう。」

この言葉どおり、この年の夏、麻原尊師は聖なるヒマラヤの地において、魂の究極の境地である最終解脱を果たすのである。もちろん、これまでいかなる日本人もなし得なかった偉業は、サマディによってもたらされたのはいうまでもない。

すべての苦悩が滅して生死を超越した瞬間、麻原尊師は何を見たのか？　最終ステップの一歩手前である「光のヨーガ」の完成の瞬間の様子が著書『生死を超える』（オウム出版刊）に記されているので、その部分をここに引用させてもらおう。

《私はアージュニァー・チァクラ（編集部注＝霊体にある霊的センター。アージュニァー・チァクラは眉間の位置にある）に精神集中をしてみた。しばらくの間、私はアストラル体で劇を演じていた。それが終わると、私の周りで四人の小人がうるさく騒ぎ始めた。

「うるさいなあ。集中できないじゃないか。」

アストラル体にある私の意識がそう思っている。

「自分はここにいるんだ。」

瞑想のときいつも出てくる意識が、肉体にくっ付くいたままこう思っている。このとき私は二つの意識を同時に持っていたわけである。ここで少し触れておくと、人間は四つの意識を持っているのだ。私がこのとき使っていた意識の他に、日常的な活動をしているときの意識と熟睡時の意識がある。

さて、次の瞬間、ものすごい圧力がアージュニァー・チァクラにかかった。

「目をやられるのではないか。脳をやられるのではないか。」

そういう恐怖を感じるほど、強い圧力だった。しかし、それと同時に、

「私はこれを――、眉間に穴を開けられるのを、数百年の間待っていたんだ。耐えてみよう。」

という思いも沸き上がってきた。私はさらに精神集中を続けた。すると、ボーンという大きな爆発音と共に、私のアージュニァー・チァクラが崩壊したのである。このとき、私の〈光のヨーガ〉が完成した。

私はいつも光の世界にいるようになった。自分のアージュニァー・チァクラが光り輝き、炎のように見えた。》

そして、この後、ほどなくして最終解脱の偉業が達成された。最終解脱……、それは生活そのものがすべて瞑想で、コーザル、アストラル、現象界を常に同時に見ている状態だという。

ているか、完全に停止している。しかし、心臓は早鐘のように打っているか、ややゆっくりめに打っているかのどちらかである。

また、このとき行なわれた検討・熟考の結果は、呼吸の停止が完全になされている場合のみ、正しいものであるといえる。ただし、それは、大変短い時の流れにおいてである。

それは、人間の意識レベルを抜け出していないからである。考えてみてほしい。例えば、人間の心の変化というものは、とても早い。性欲など低レベルのものなど、その最たるものであろう。その意識の枠組みの中での検討・熟考なのであるから、大変短い時の流れにおいての正しい結果しか得られないのである。そして、精神の集中の長さが人間のレベルを超えたとき、次の段階のサマディへと移行するのである。

次の段階のサマディは下から二番目である。これは、完全なる呼吸停止と、大変静かな心臓の働きを呈するのである。また、このサマディによって得られる体験は、意識が肉体から離れ、※意識堕落天へと至るものである。

（中略）

下から三番目のサマディは、※戯れ堕落天へ至るサマディである。このとき、呼吸は完全に停止し、心臓は遅弱の働きを呈するのである。

（中略）

また、この二つの天界は両方とも前述のとおり煩悩を有しているから、心臓の働きは停止しないのである。

第四番目の、すなわち欲界の最高のサマディは、神聖天界へと至るサマディである。

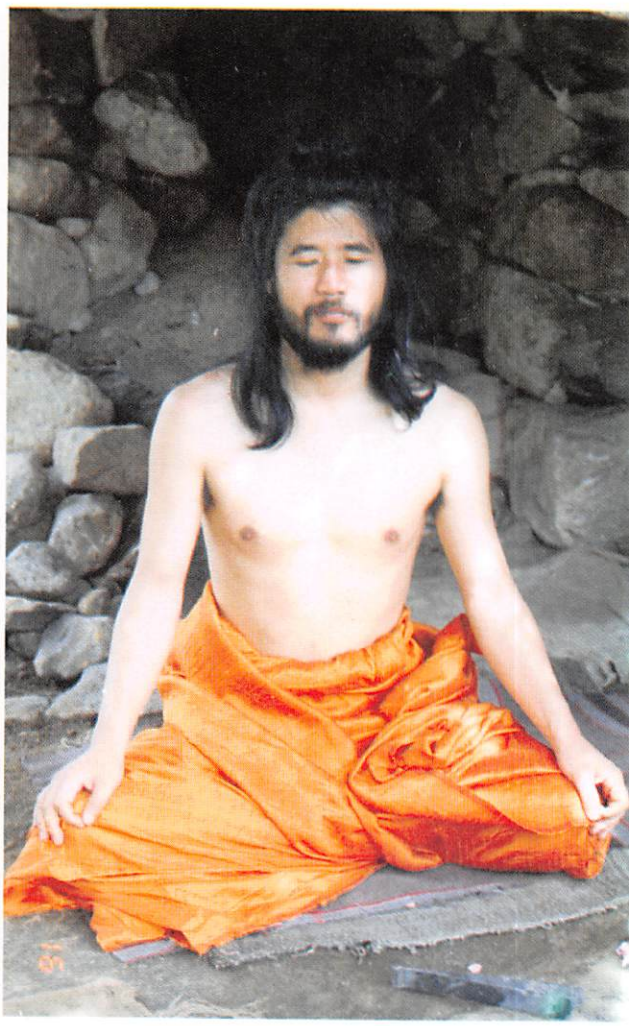
この世界は、性欲、食欲をほとんど止滅しているか、あるいは、完全に止滅している魂の行く世界であるから、心臓は微弱拍動なのである。

そして、現代のインド・ヨーガの最終地点への到達がアートマン（真我＝自己の本質）とブラフマン（神聖天界）の合一であるから、残っている煩悩もわずかとなり、完全な呼吸の停止と、微弱な拍動というサマディの定義が出てくることはうなずけるのである。

ここまでが欲界のサマディによって得られる結果である。そして、この上に光音天からマハー・ボーディ・ニルヴァーナ（大到達真智完全煩悩破壊界）までのサマディが存在するのである。

これらのサマディは、欲界を超越しているから、完全なる呼吸停止と完全なる心臓停止が起きるのである。そのときの心臓停止の仕方は、大きな内的音と同時にロックがかけられたかのようにガクッと止まるのである。》

（同誌から）



（ＭＥＭＯ）

※意識堕落天
仏教でいう欲六界（地獄・動物・餓鬼・人間・阿修羅・天界）の上から二番目の世界。一般的には「阿修羅界」といわれる。

※戯れ堕落天
欲六界の最高位の世界で、一般的には「天界」といわれる。ちなみにこの天界は功徳の差によってさらに六つの世界に別れる。

サマディで重視されるべきなのは、むしろ瞑想によって得られる内的体験である
（写真は釈迦牟尼の悟りの地、インド・ブッダガヤの菩提樹の下で瞑想する麻原尊師の弟子たち）

◆サマディの本当の意味

つまり、麻原尊師の経験からも、呼吸の停止という点では同一であるが、心臓の動きは解脱者のステージによって微妙に変わってくるということが証明されているのである。

そして、これが「サマディにはジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハー・ムドラーが不可欠」といわれるゆえんでもある。すなわち、サマディには煩悩のコントロールが必要で、そのためには、いわゆる煩悩の根本的原因であるデータの蓄積、コーザルをコントロールする力が必要となる。そのためには思索によって煩悩を根本から分解できるジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハー・ムドラー以上の力が必要なわけである。

というよりも、ジュニアーナ・ヨーガ、マハー・ムドラー以上の解脱者がコーザル世界へ意識を移し変えるからこそ、「現象として〝呼吸停止〟が起こるサマディに入る」といった方がより正確だろう。心臓の停止も基本的には同様である。ただ、煩悩の程度によって完全停止あるいは微拍動というように微妙に変化するのは、おそらく心臓という部分に我々の魂の本質である「真我」が宿っていることにも関係しているのではなかろうか。

それはともかく、ここまでくればサマディの本当の意味が、おぼろげながらも理解できていただけただろう。サマディは決して見せ物的な奇跡などではない。解脱・悟りといった修行のプロセスを進める上で、絶対に不可欠なもので、それに伴う現象にすぎないのである。

むしろ重視されてしかるべきなのは、内的経験なのである。深い意識状態に入ったとき意識を別の身体に移し変え、この現象界の中の人間界以外の世界、さらに、アストラル世界、コーザル世界を体験する。そして、自らの肉体を含めてふだん目にするこの世界が幻影であることを知るのである。さらに、その結果、獲得した智慧と力（神通力＝超能力）により、苦しみの世界に再生する因を知り、またその因を取り除く術を知り、最終的には魂の永遠の願いである絶対自由・幸福・歓喜の世界、マハー・ニルヴァーナへのキップを手にするのである。

真の解脱者のみがなし得る奇跡、サマディ。それはまさに絶対的自由・幸福・歓喜の世界へのステップなのである。

●仏典にも記されている サマディの果報——六つの神通力

◎神足通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、様々な性質の如意を経験する。

すなわち、一つがいろいろな形となり、いろいろな形が一つとなり、明らかにテレポーテーションをなし、塀を超え、城壁を超え、山を超え、くっついていないで行くのは例として空間の中のようであり、地に浮き上がったりもぐったりするのは例として水中のようであり、水上を沈むことなく行くのは例として地上のようであり、空間の中を蓮華座で散歩するのは例として翼ある鳥のようであり、このように大いなる如意とこのように大いなる威神力がある、あの月と太陽とを手で触れて磨き上げ、神聖天界にまで、身をもって欲望を満足させることに従事するのである。

◎天耳通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、清浄であって人間を超越した天耳界において、天や人間、あるいは遠くや面前の双方の声を聞くのである。

◎他心通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、他の生命体や他の魂の心によって心を把握して認識し理解する。すなわち、

愛著がある心を愛著がある心と認識し理解する。

愛著を離れた心を愛著を離れた心と認識し理解する。

邪悪心がある心を邪悪心がある心と認識し理解する。

邪悪心を離れた心を邪悪心を離れた心と認識し理解する。

迷妄がある心を迷妄がある心と認識し理解する。

迷妄を離れた心を迷妄を離れた心と認識し理解する。

閉じ込められた心を閉じ込められた心と認識し理解する。

散らばった心を散らばった心と認識し理解する。

大いに広がった心を大いに広がった心と認識し理解する。

大いに広がっていない心を大いに広がっていない心と認識し理解する。

より優れたものを持っている心をより優れたものを持っている心と認識し理解する。

無上の心を無上の心と認識し理解する。

サマディに入った心をサマディに入った心と認識し理解する。

サマディに入っていない心をサマディに入っていない心と認識し理解する。

離解脱した心を離解脱した心と認識し理解する。

離解脱していない心を離解脱していない心と認識し理解するのである。

◎宿命通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、様々な前世の生き様を思い出す。

すなわち、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元期と再生期において、

『わたしはあそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような楽苦を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、そこに転生した。

そこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、ここに転生した。』

と、このように状態と説明とがある、様々な前世の生き様を思い出す。

◎天眼通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体の死と転生を見て、生命体が要素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解する。

『尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において悪行を具足し、言葉において悪行を具足し、意識において悪行を具足し、聖人を非難し、誤謬見解を抱き、誤謬見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、離別であり、悲痛に向かうことであり、破滅である地獄に転生した。

尊者よ、確かに、これらの生命体は、身において善行を具足し、言葉において善行を具足し、意識において善行を具足し、聖人を非難することなく、正見解を抱き、正見解の要素の蓄積を記憶実践した。そのため、その身が終わり、死後、幸福に向かうことである天の世界に転生した。』

と、このように、清浄であって人間を超越した天眼によって、生命体の死と転生を見て、生命体がその要素の蓄積に従って達し、卑しかったり高貴であったり、器量が良かったり醜かったり、幸福に向かうことであったり悲痛に向かうことであったりするのを認識し理解するのである。

◎漏尽通

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、諸々の漏を破壊することによって、無漏の心の離解脱や智慧の離解脱を、この世界において、自ら証知し現証し具足してとどまるのである。

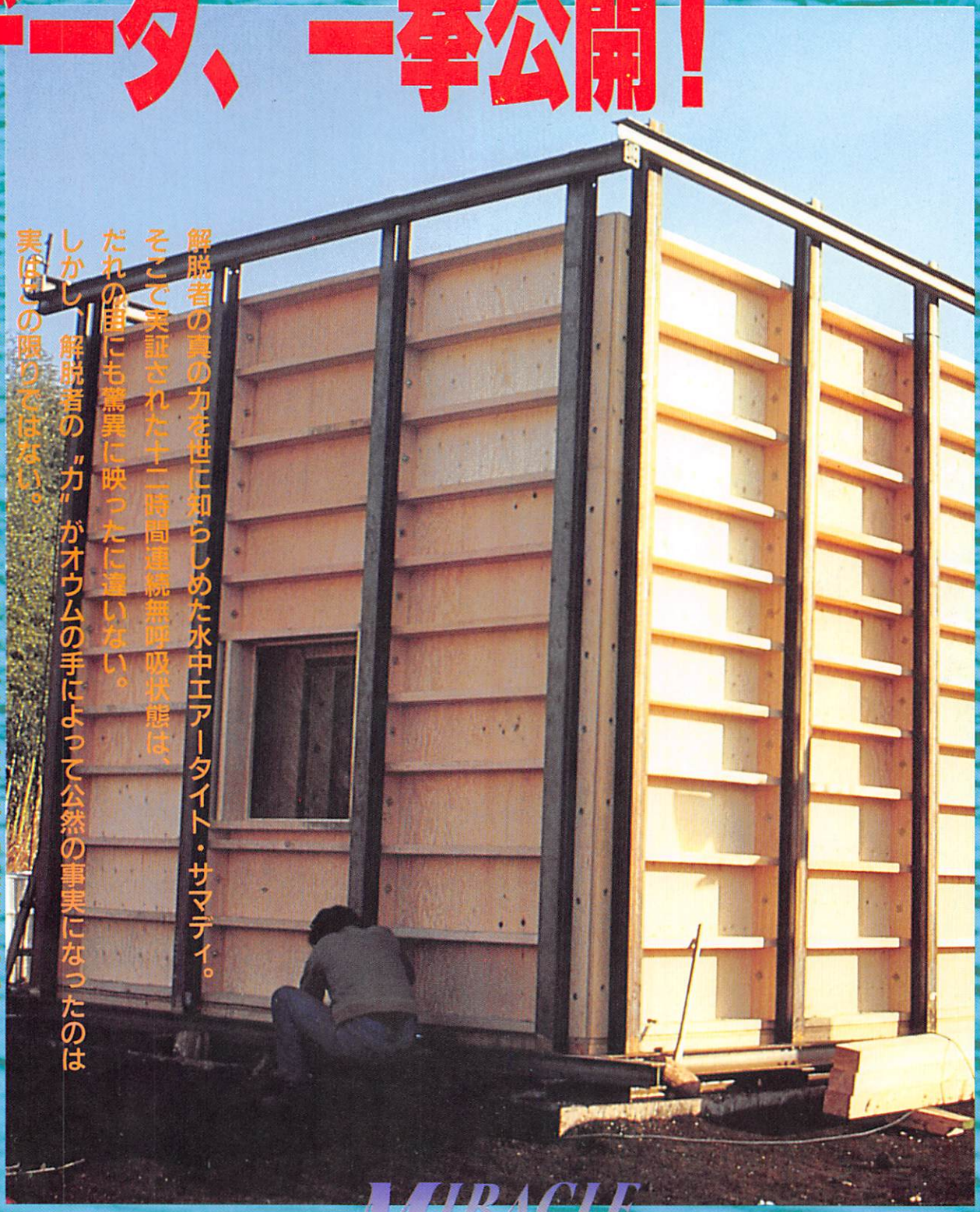
（『南伝大蔵経』相応部経典・神足相応より）

六人の外道（六師外道）の挑戦に応えて法力比べをしている釈迦牟尼の姿を表わしたマンダラ。十五日間にわたって地上の王宮、天界の宮殿で神変を示し、外道を調伏したという

マディ◆

脱者の力の証明

データ、一挙公開！



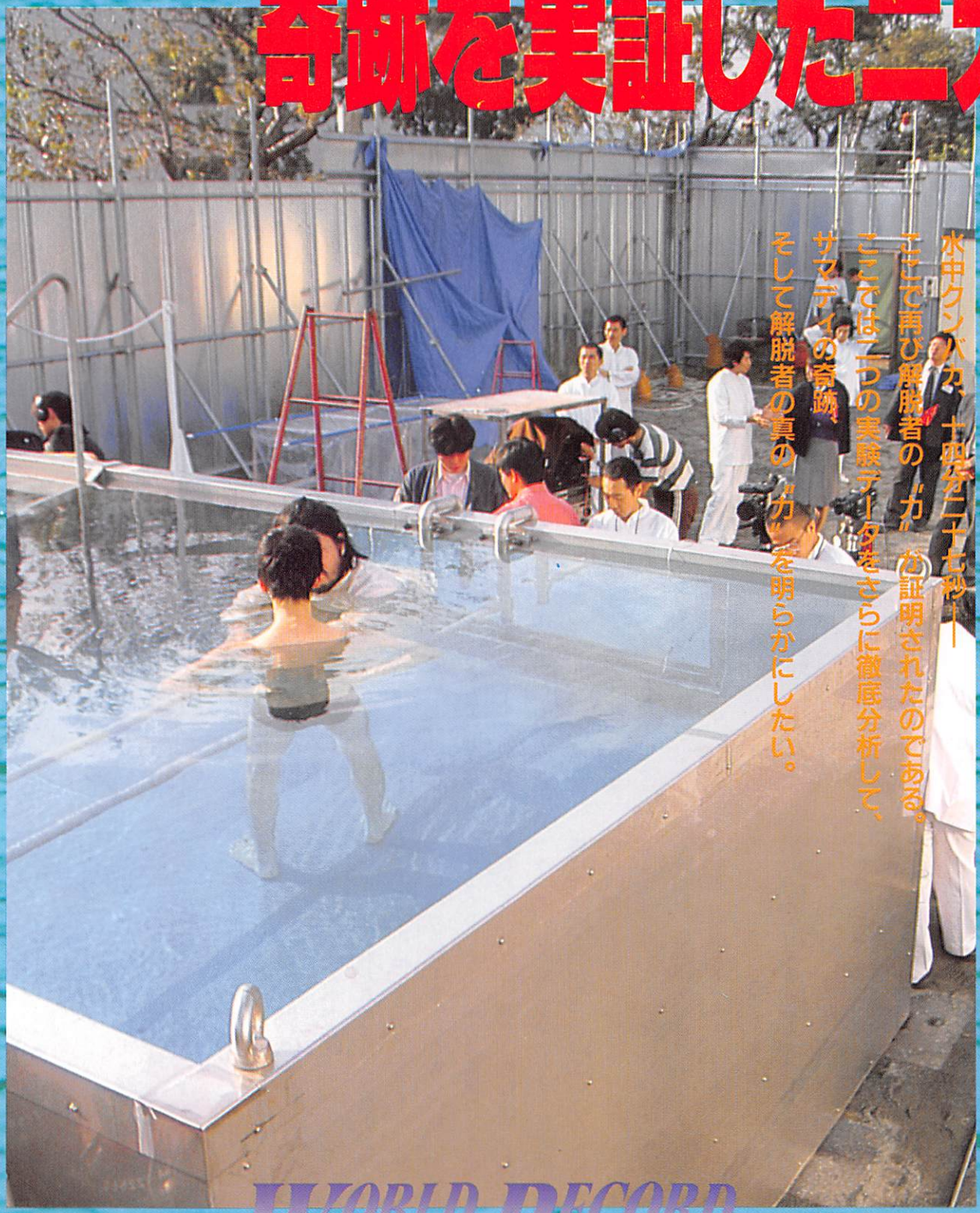
一九八九年十月に行なわれた水中クンバカ（保息）の実験において
解脱者の真の力を世に知らしめた水中エアータイト・サマディ。
そこで実証された十二時間連続無呼吸状態は、
だれの目にも驚異に映ったに違いない。
しかし、解脱者の〝力〟がオウムの手によって公然の事実になったのは
実はこの限りではない。

MIRACLE

◆検証サ

記録が語る解

奇跡を実証した二大



麻原尊師の弟子によって、信じられない快記録が誕生したのである。

水中クンバカ、十四分二十七秒！

ここで再び解脱者の〝力〟が証明されたのである。

ここでは二つの実験データをさらに徹底分析して、

サマディの奇跡、

そして解脱者の真の〝力〟を明らかにしたい。

WORLD RECORD

◆第一部◆

水中エアータイト・サマディ データに見るサマディの奇跡

驚くべき解脱者の集中力

水中エアータイト・サマディにおけるケイマ正大師の記録は、まさに〝解脱者の奇跡〟と呼ぶにふさわしいものだった。

まずはグラフ①をご覧になっていただきたい。これはサマディ時、ケイマ正大師の瞑想ルーム内の酸素濃度の変化を表わしたグラフである。データを見れば一目瞭然のように、スタートから約十二時間にわたる無呼吸状態。解脱者の力のすごさが如実に表われている。

「ケイマ正大師の瞑想ルームの酸素濃度計が二一パーセントのままだったとき、我々には『もしかしたら計器が故障をしているのではないか?』という心配がありました。だから十時間後くらいからは反対に、計器の数字がなんとか減ってくれないものかと願っていたくらいなんです。

ですから、約十二時間後に二〇・九パーセントという数値が出たときは、不謹慎ながら小躍りして喜びました。計器が正確に作動していて、データが確かなものとわかったわけですからね。」

スタッフの一人は水中エアータイト・サマディの直後にこんな話をしていた。これはまさしく、オウムの解脱者が想像以上の高いレベルに到達していたことを表わしているに他ならない。サマディには集中が不可欠とされるが、ケイマ正大師は十二時間にもわたる精神集中を行なっていたことになり、まさに驚異としかいいようがない。ちなみに、一般人の精神集中の限界が十五分といわれていることからも、この数字のすごさがご理解いただけるだろう。

トラブルを跳ね返す底力

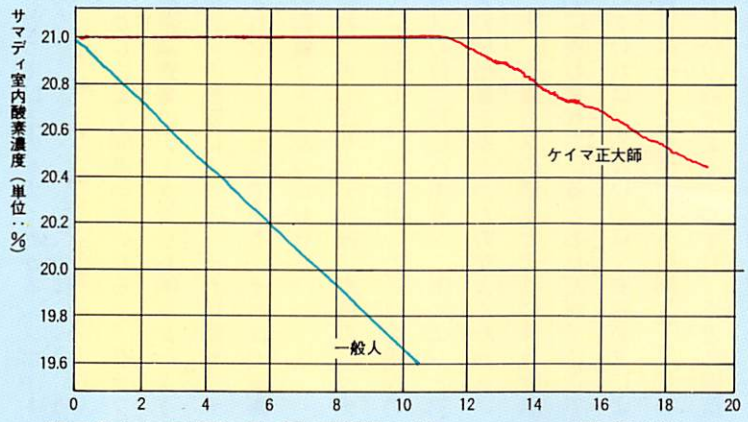
ところで、一方の麻原尊師の方はどうであろうか? グラフ②を見ると、データそのものはケイマ正大師のものに比べ若干見劣りすることは確かである。しかし、条件の違いをよく検討してみれば、「これはまるで怪物のよう!」としか形容できないすさまじい記録であることがよくわかる。

ケイマ正大師がこの実験の準備のために修行に入ったのは、水中エアータイト・サマディのほぼ一カ月前。念入りな修行の後に実験を行なったわけだが、一方の麻原尊師は多忙をきわめていたため一週間の修行期間しか取れなかった。しかも、弟子のケイマ正大師が同時にサマディ実験を行なっていたため、彼女のグルである麻原尊師はエンパワーメント(エネルギー移入)の状態が続き、さらに、水槽そのものが酸素を消費する異常とも思える事態、有毒ガスの発生へのトゥモによる対処など、トラブル続きの最悪の条件下での実験だったのである。にもかかわらず、グラフ②のような安定したデータが検出されているということは、これが真の解脱者のみがなし得る奇跡以外の何物でもないことを表わしているといえよう。

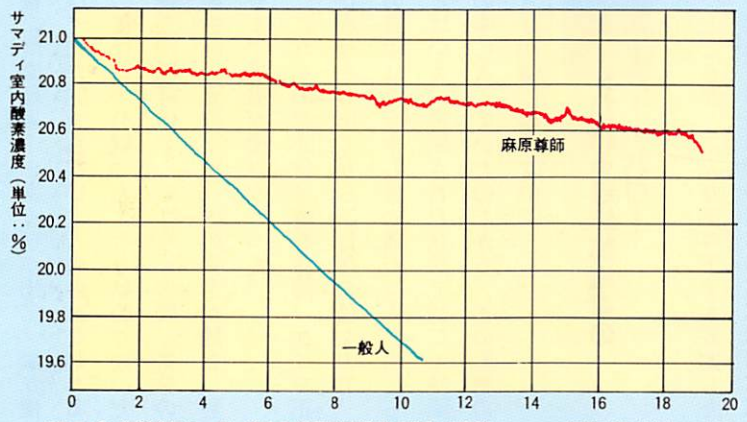
影響著しい有毒ガスの発生

さらに、有毒ガスの発生について、ここで詳しく検討してみたい。以下はサマディ後のケイマ正大師の言葉である。

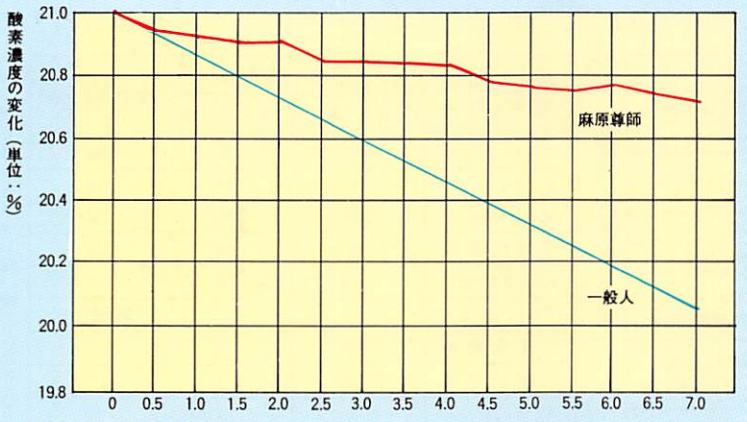
「入って長い時間経ってから、どういうわけか、心臓が早くなって、呼吸が苦しくなってきたんですよ、途中で。まだ、一日も経ってないから、普通に呼吸していたとしても、そんなに苦しくないはずなのにと思って。そして、苦しくなった後ですね。ディアーナの状態になって、ヴィジョンを三回続けて見て……。起きたとき、あ、マズイと思っていました。煩悩のカスがまだ残ってて、心の中にあるんだと思って。これは消さなきゃいけないと、しばらく、そのヴィジョンについて考えていました。」



グラフ ① ケイマ正大師サマディ室内の酸素濃度の変化
（1988年５月17日、静岡県富士宮市オウム真理教総本部道場）
装置の構成…サマディ室３×３×2.4ｍ、実質内容積20.0㎥



グラフ ② 麻原尊師サマディ室内の実質酸素濃度の変化（仮定）



グラフ ③ 第１回水中エアータイトサマディ実験結果
（1988年３月16日、静岡県富士宮市特設会場）
装置の構成…内側水槽：１辺３ｍ、外側水槽：１辺3.6ｍ 実質内容積：24.3㎥

およそ十二時間の無呼吸状態から醒めて室内の酸素を消費してからは、体験そのものも低くなっているのがよくわかる（スポット参照）。これは、この時点で有毒ガスを吸い込んだからにまず間違いないだろう。グラフ①の酸素消費量のデータからも明らかなように、有毒ガスの影響によって、それ以降サマディに入れなくなったのである。それほど有毒ガスの影響は大きかったわけだ。

なお、表①はサマディ後、水槽のハッチをすぐに密閉して、二日おいたときの内部の有毒ガスの値。特にヘキサン、トルエンとアセトンの検出量が多かったのがよくわかる。

一方、有毒ガスの濃度とそれに伴う症状は表②に表わされているとおりだが、ここで注意しなければならないのは、有毒ガスによる影響は《（ガス濃度）×（時間）》で表わされるという点である。つまり、たとえ濃度が許容量より低くても、水中エアータイト・サマディのように密室で長時間ガスにさらされるのは非常に危険なのである。

さらに、実験後、瞑想ルーム内で有毒ガスの成分を測定・分析していたスタッフ二人に、有毒ガスの影響が顕著に現われていたという報告がなされていたのでその記録もここで記しておこう。

●十五分経過……頭痛に襲われ、鼻が痛くなった。

●一時間経過……疲労感、眠気、脱力感が生じる。

●二時間経過……あくびが出て、頭が働かない、口が閉まらないなどの症状が現わる。その後は、半分眠ったような状態が続いた。

●五時間経過……しばらくの間、気分の悪さ、疲労感、食欲不振、尿の異常が続き、翌日の昼まで思考が働かなかった。

これらの測定値は麻原尊師、ケイマ正大師が水槽から出てから二日後の値なので、実験の最中はもう少し低い値だったと考えられる。とはいえ、密閉された状態で約二十時間もこの中に入っていたのだから、その影響の大きさは想像に難くない。

データが語る最終解脱者のスーパー・パワー

ところが、こんな条件下でも安定した状態を保っていたのだから、やはり麻原尊師の力は相当なものである。

「麻原尊師の方の有毒ガスはサマディ中七ppmで一定してたんです。ところが、尊師が水槽から出てから計測してみると、七、八、九、一〇、一一といった具合いに急激に増えていくんですよ。」

これは前出のスタッフが語った貴重な証言である。つまり、麻原尊師がトゥモの技法により体内で有毒ガスを燃やして消費していた

表①　サマディ室内から検出された有毒ガス（検査方法）ガス検知管による、科学反応を利用した測定
※この測定は5／20のものなので、尊師の入っていた5／17、18では、もう少し低い値だと思われる

検出された有毒ガス	サマディ室内の濃度（ppm）		許容濃度(ppm)
	尊師	ケイマ大師	
ヘキサン	38	26	40
トルエン	35	17	100
アセトン	250	50	200
一酸化炭素	15	30	50
ホルムアルデヒド	1.8	0	2
アセトアルデヒド	1	0	8時間で100
一酸化窒素	0.8	0	——
二酸化炭素	3	3	10
スチレン	3	4	50
トリクロロエチレン	0.4	0.2	50
エタノール	100	80	1000
ガソリン	200	150	500

表②　有毒ガスの濃度と症状

ガスの種類	濃　度（ppm）	症　状
ヘキサン	1400～1500	目、喉に刺激。吐き気、頭痛
	5000	めまい、よろめき
	30000	麻酔症状
	35000～40000	死亡
トルエン	20	臭気を感じる
	100	目、上部軌道に軽い刺激
	200～500	疲労感、頭痛、めまい、不眠 食欲不振、吐き気、精神不安定
	600	三時間で極度の疲労、頭痛 めまい、吐き気、精神異常
アセトン	200～300	強い刺激
	500	目、鼻、喉に刺激
	1000	頭痛、吐き気
	4000	一時間で危険症状

のは、データからも明らかになっていたのである。

ジュニアーナ・ヨーガの成就者でさえなかなか手に追えない有毒ガスを、体内で燃焼してしまうことでなんなく克服。しかも、それでいて先のグラフ②のような安定した状態を保っていたのである。いかなるトラブルをものともしない底力には、目を見張るものがある。

ケイマ正大師の〝十二時間無呼吸状態〟ばかりが目立っていた水中エアータイト・サマディ。しかし、様々なデータを検証してみると、むしろ麻原尊師のスーパー・パワーの方がくっきりと浮かび上がってくるのである。やはり最終解脱者の力は偉大である。

そのときヴィジョンもなく、時間は止まっていた

（水中エアータイト・サマディ直後のマハー・ケイマ正大師インタビューから）

――十二時間にもわたる長時間サマディですが、いかがでしたでしょうか。

（正大師）　麻原尊師がサマディに入るためには心だと。とにかく技術じゃなくて心だからとおっしゃっていましたので、もう心をグルとかシヴァ神とか、高い世界に集中させなければいけない、そればかり考えていました。

あとは供養法をやったりしました。それで集中し続けて、たまにちょっと違うこと考えそうになると、いけないと思って戻して、それを繰り返していました。ずっと意識があるものですから、それがサマディだとは思いませんでしたが……。

――呼吸には気がつきませんでしたか？

（正大師）　呼吸はすごく少ないんじゃないかとは思ってました。

――そのときどのようなヴィジョンを見たんでしょうか？

（正大師）　今まではアストラル界に入っていろんな経験をしてヴィジョンを見たんですけれども、何もヴィジョンとしてはなかったですね。時間もどのくらい経ったかわからないんですよ。

※なお、麻原尊師はこのケイマ正大師の経験を聞き、いわゆる「空」という状態であり、コーザルあるいはコーザルを飛び越えたニルヴァーナの最高状態と判断されている。

◆第2部◆

水中クンバカ世界記録達成の瞬間!

ジャーナリストも目撃した水中クンバカの奇跡

「十四分二十七秒三十二です。」
タイム・キーパーから記録が発表されると、
富士の空に拍手と歓声がこだました。
この日の主役は背後にそびえ立つ日本一の富士山ではなく、
世界一の記録を達成した麻原尊師の弟子の一人、
ガヴァンパティ師だった。
一九五九年、アメリカ人のロバート・フォスター氏が樹立した記録を
四十五秒も上回る三十年ぶりの快挙。
一九八九年十月二十二日、
ここにまた一つ、解脱者の証明がなされたのであった。

クンバカの意味?

クンバカとは息を止める修行のことで、その長さが精神集中力の目安ともなっている。ヨーガの世界ではこのクンバカについて、およそ次のようなことがいわれている。

気（体内の活動エネルギー）が動くと心も動き、気が動かなければ心も動かなくなる。気の動きを制止するというのは、つまるところ、呼吸を止める操作であるところのクンバカをすることである——。

そして、ここを起点につきつめていくと、気が体の中に縛りつけられている間は何事にも心が動かず、最終的には、死に対する恐怖感さえ消滅するという結論に導かれるのである。すなわち粗い不規則な息遣いは、心が散漫になっている状態を表わすに他ならない。不動心に達したヨーギーが、呼吸によって気の制止の仕方に熟達しているといわれるのはここから派生しているのである。

もう少しわかりやすく説明しておこう。人間の心を動かす最たるものは、様々な煩悩であることはいうまでもない。そして、この煩悩は、呼吸の状態とも大きく関係しているのである。我々にとっての最終的な煩悩、「生命欲」の大小で呼吸を止められる時間が変わってくることからもそれは明らかである。また、最終的な煩悩が少ない人が、日常的な煩悩に関しても少ないことは容易に理解できるだろう。

そして、ここから煩悩を背景とする心の状態と呼吸の間にある密接な関係、つまり、煩悩が少なければ少ないほど長時間のクンバカが可能であるという結論が導き出せるのである。解脱者の力の証明として水中クンバカの実験がなされたのは、このような意味があった。

死を克服する心の強さ

一九八八年十月二十二日——

小雨の降るオウム真理教総本部道場敷地内に設置された水中クンバカ実験会場に、麻原尊師の弟子を励ます大きな声が響きわたる。

「さあ、一気に頑張れ！」

いよいよ実験の開始である。チャレンジャーは麻原尊師の弟子の一人、ガヴァンパティ師（プロフィール参照）。そして、午後三時二十八分、彼の孤独な闘いは幕を開けたのである。

実験会場はあいにくの雨で気温もかなり低くなり、決して条件は良くはなかった。加えて実験会場となった富士山総本部道場は、標高六百メートルで酸素濃度は平地の九十二パーセント。むしろ「悪条件下での実験となった」といったほうが正確である。

麻原尊師のアドバイスを受けてまずはゆっくりと呼吸を行ない、続いてバストリカー・プラーナーヤーマ（すばやく連続的に力を込めて息を吐き出す呼吸法）を激しく行じるガヴァンパティ師。『ギネスブック』の条件に倣ってチャレンジ直前の三十分、水槽に入って酸素吸入を行なう。

三分前……、師の肩が大きく上下に揺れ出した。いよいよチャレンジ開始である。

「いつでもいいぞ！」

同じ水槽内に入っていた麻原尊師の声を合図に、師の体が水中に沈む。午後三時二十八分、解脱者の奇跡の証明実験は幕が切って落とされたのである。

●ガヴァンパティ師
1988年5月から本格的な修行に入り、水中クンバカの世界記録達成の翌日（88年10月22日）、クンダリニー・ヨーガの成就を果たす。ホーリー・ネーム（成就者に与えられる聖なる名前）の「ガヴァンパティ」は、神通力によって水勢を阻止し、サラブー河の岸で眠っていた大勢の仏弟子を洪水から救ったと伝えられる修行者に由来する。

〈実況＝水中クンバカ〉

◎三分経過……

スタッフが合図で教える時間の経過をしきりに気にするガヴァンパティ師。やはり水中からだと合図が見にくいらしい。麻原尊師から急きょ指示が出され、しばらくは時間表示をなさないことになった。後に師が「すべては心の現われ」と述懐しているとおり雑念といかに闘うかがキー・ポイントであり、精神集中の妨げをできるだけ防ぐためである。

◎四分三十秒経過……

ようやく落ち着きを取り戻した師の身体は、蓮華座を組んだままプールの底にしっかりと固定された。

◎七分経過……

姿勢は先ほどとまったく変わらず。まだまだ余裕がうかがえる。

蓮華座を組んだ師の身体はプールの底にしっかりと固定された

◎十分経過……

やはり先ほどと変わらない。後に「しばらく苦しくない状態が続いた」とガヴァンパティ師本人が語っているとおり、強い精神集中に成功した状態にあったらしい。

◎十二分経過……

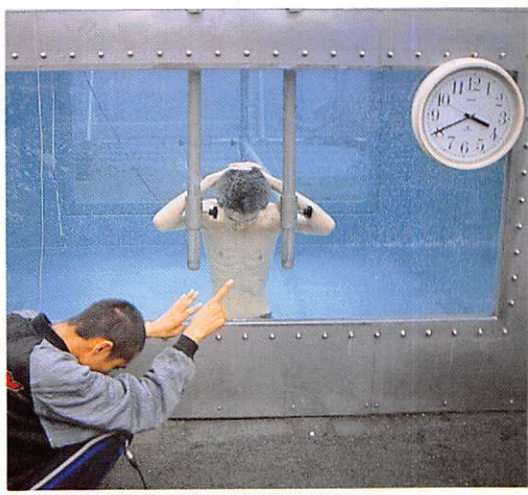
変化は見られず。右に同じである。

◎十二分五十秒経過……

ふいにガヴァンパティ師が動き出した。鼻を押さえ、十三分を超えると、しきりに時間を気にしているのである。どうやら強い精神集中状態が崩れたようである。

◎十三分三十秒経過……

とうとう腹部が痙攣を始めた。世界記録まであと十二秒余り。タイム・キーパーも水槽の窓にできる限り身を近付け、「もう少しだから頑張れ」と指示する。同時に麻原尊師も「頑張れ！」とガヴァンパティ師を励ます。



強い精神集中に成功した師は微動だにもしない

◎十三分四十秒経過……

座法を崩して、時間を確認しようとしきりに指でサインを出すガヴァンパティ師。スタッフが合図を出して答えているうちに、ストップウォッチの秒針が十三分四十二秒を回り、世界新記録の達成がなされた。

「さあ、延ばせ、延ばせ。頑張れ！」

期待に応えて世界新記録を達成した弟子をそばで見守りながら、叱咤激励する麻原尊師の声が響きわたる。

◎十四分経過……

ガヴァンパティ師は再び蓮華座を組み直した。そして、記録は一秒また一秒と更新されていくのである。

後に師は、このときの状態について次のよ

十分を過ぎても師はピクリとも動かなかった

うに述べている。

「苦しくなると生理的に腹が動きました。最後になるとレーチャカの状態（息を吐き切った状態）になり、すごい恐怖感がわいてきました。もうだめだと思ったけれども、麻原尊師が一緒にプールに入ってくださっているという安心感がありました。」

◎十四分十五秒経過……

とうとう水槽の中で半立ちになった。しかし、だれもが「そろそろ限界か」と感じた次の瞬間、信じられない光景が目の前で繰り広げられた。師は強靭な意志力で再度プールに体を沈めたのである。

水中クンバカの奇跡はマスコミ関係者の前でも証明された

「戻った、戻った、すごい！」

実験会場に大歓声が上がった。

「恐怖感で心が動き、自分で自分の限界を作ってしまっていたことに気づいたんです。苦しくて限界だと思ったところは、本当の限界ではなかったんです。」

このときのことをガヴァンパティ師は後にこう述懐している。

◎十四分二十七秒……

ガヴァンパティ師はついに水面に顔を出した。スタッフたちの拍手の嵐の中、激しく呼吸を繰り返す師に、麻原尊師が歩み寄り背中をさする。限界に挑戦した弟子へのねぎらいである。

タイム・キーパーから発表された正式な記録は十四分二十七秒三十二。一九五九年、アメリカ人のロバート・フォスター氏によって樹立された記録は、三十年後に破られたのである。そして、それはクンダリニー・ヨーガ成就者の〝力〟を示すには十分すぎる記録だった。

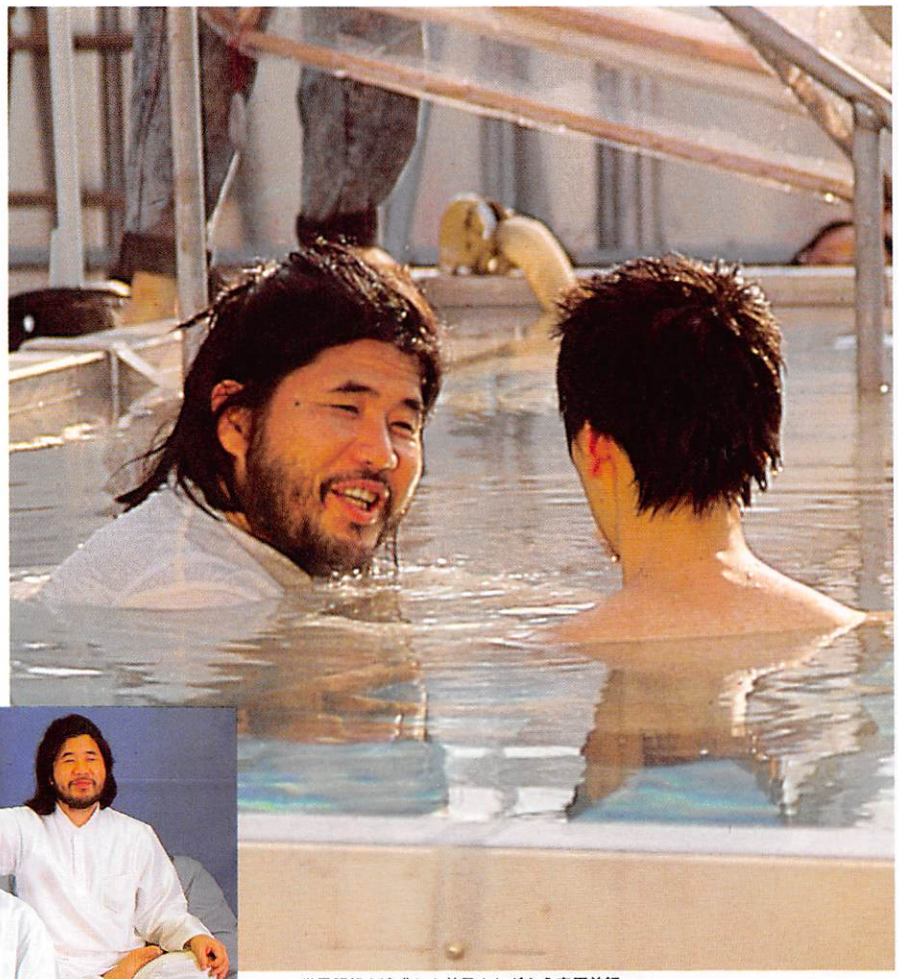
ジャーナリストも目撃した〝解脱者の力〟

ところで、世界記録達成から四日後の二十六日、ガヴァンパティ師は再度水中クンバカに挑戦することになる。TBSなどをはじめとするマスコミの取材に応じての実演である。

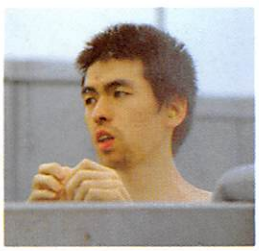
しかし、残念ながらこのときは世界記録の更新には及ばなかった。が、それでも二回の潜水はいずれも十一分を超えるもので、これはジャーナリストたちを納得させるには十分な記録だったようである。実際のところ、世界記録にこそ届きはしなかったが、一般人の能力からすれば十一分でも驚異的な数字である。しかも、それが自分の目で直接確認できたのだから、彼らにとってはまさに〝解脱者の力の証明〟に他ならない。

水中クンバカ十四分二十七秒三十二——。人間の常識を超えたこの驚異的な記録は、果たしてあなたの目にどう映るのだろうか……。

世界記録達成の秘密は、煩悩を見つめる瞑想修行にあった



世界記録を達成した弟子をねぎらう麻原尊師



世界新記録達成の直前まで極厳修行に入っていたガヴァンパティ師。しかし、これはあくまでクンダリニー・ヨーガの成就を目指しての修行であり、水中クンバカのためになされた特別なものではない。

ちなみに師が直前まで行なっていた修行というのは、一筋も光の入らない真っ暗な部屋での瞑想修行で、ここで自己が迷妄に至ったプロセスを認識して、ひたすら心を見つめて煩悩を落とす瞑想に励んだそうである。そして、その結果、世界新記録の達成の翌日に、クンダリニー・ヨーガ成就という偉業を成し遂げたわけである。

これは煩悩と呼吸の密接な関係を表わす証明ということができるだろう。煩悩を認識した上で落としていく修行をしただけで、現象としてクンバカが著しく伸びているわけだから、これは冒頭のヨーガ理論ともぴったり一致するわけである。

ガヴァンパティ師の快記録達成はまさしく、煩悩を超えた解脱者ならでは奇跡だったのである。

●解明！サマディ●

呼吸停止も心臓停止も肉体に全く影響なし！

"サマディの奇跡"の謎を科学する

呼吸も心臓も停止した状態――。
現代医学では、これを〝死〟という。
ほんの数秒の間ならいざ知らず、
数十分、数時間のサマディを経て蘇るとしたら、
それは本来〝死者の復活〟に等しいわけである。
しかし、これはあくまで一般人の医学論での話。
精神性の向上に励む修行者の場合はこの限りではない。

常人が抑えられない煩悩を容易に統御してしまうように、
修行者の肉体は時として常識を覆す働きを見せる。
とはいえ、それは決して荒唐無稽なものではなく、
巷でいうところの〝肉体の神秘〟の範ちゅうで
十分に説明できるものには違いない。
ここでは科学的な視点から
〝サマディの軌跡〟にメスを入れてみた。

SCIENTIFIC PROOF

協力・オウム真理教附属医院顧問・ヴァジラティッサ師

“死”の判定基準

呼吸も心臓も停止したサマディの状態。現代医学ではこれを“死”と呼ぶらしい。この状態を迎えると人間の肉体は徐々に破壊されていき、二度と蘇ることはないというのが世の中の常識である。

ところが、不思議なことに、解脱者たちの身体は長いサマディから醒めたとき、この常識論をあざ笑うかのように再び活動を始めてしまうのである。呼吸や心臓が止まってもなぜ彼らは生きてられるのか？　その答えを導き出す前に、まずは“死”について医学的な定義を明確にしておこう。

現代医学の立場からこの“死”の判定基準を考えてみると、一般的に広く認められているものとして、『死の三徴（トリアス、TRIAS）』と呼ばれる次の三つが挙げられる。

①心臓の停止
②呼吸の停止
③瞳孔の散大

ちなみに、③の「瞳孔の散大」とは、瞳孔が開いてしまって光を当てても小さくならない状態を指す。テレビドラマなどでよく、医者が臨終を確認するのに患者の目にペンライトで光を当てるシーンがあるが、あれはこの瞳孔の散大を見ているのである。

①の「心臓停止」だが、医学的には心臓の停止が起こると特別な場合を除いて、ほとんどが十分以内に②③の条件を満たすことが確認されている。また、②の「呼吸の停止」の場合も同様で、呼吸が止まると続いて①③の条件を満たすことになり、「心臓の停止」あるいは「呼吸の停止」の少なくともどちらか一方が起きた場合、その人はほどなくして①から③の条件をすべて満たすことになる。つまり、サマディにおける呼吸と心臓の停止は、現代医学の常識からいえばやっぱり“死”なのである。

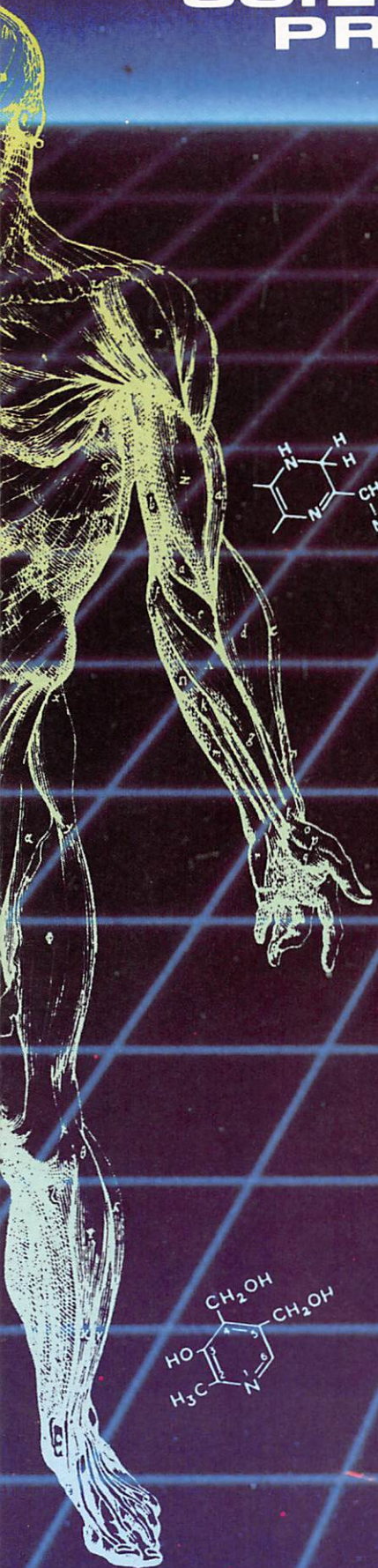
なお、これらの三つに加えて、場合によっては体温の降下、わかりやすくいえば、身体が冷たくなっているかどうかを判定基準として入れる場合もある。が、普通は、病院などでは①から③がすべてそろった段階で“死”と判定し、家族にその旨を告げるのが一般的であるということだ。

医学的にはサマディからの復活は不可能？

もちろん、浅いサマディでは、呼吸停止はしているが心臓が微拍動という状態もある。これも含めてなぜ「三徴」イコール「死」と判定されてしまうのか、これは医学における身体の常識を知らないと解決できそうもないのでもう少し専門的に話を進めていこう。

人間の血液中には、赤血球という中央部の

SCIENTIFIC PROOF



へこんだ円盤状の粒がある。この中にはヘモグロビンと呼ばれる鉄を含んだ物質があり、これは酸素を運搬する役目を担っている。このヘモグロビンというのは実に面白いもので、酸素の多いところでは酸素を取り込み、酸素が少ないところでは酸素を放出する働きを持つ。つまり、肺のような酸素が豊富な場所では酸素を取り込み、身体の各部分へ流れていきながら酸素が少ない場所（細胞）では逆に酸素を放出するのである。我々の肉体は、このヘモグロビンの働きにより各細胞に酸素を供給してもらってるからこそ、生命活動が続けられるというわけである。

ところが、心臓が止まるとなると、ヘモグロビンを体内に巡らせる血流もストップしてしまい、細胞に酸素が届かなくなる。一方、呼吸が止まった場合も同様で、肝心の肺そのものへの酸素の供給がストップされるわけだから、同じように細胞は酸素が届かずに困ってしまうわけである。

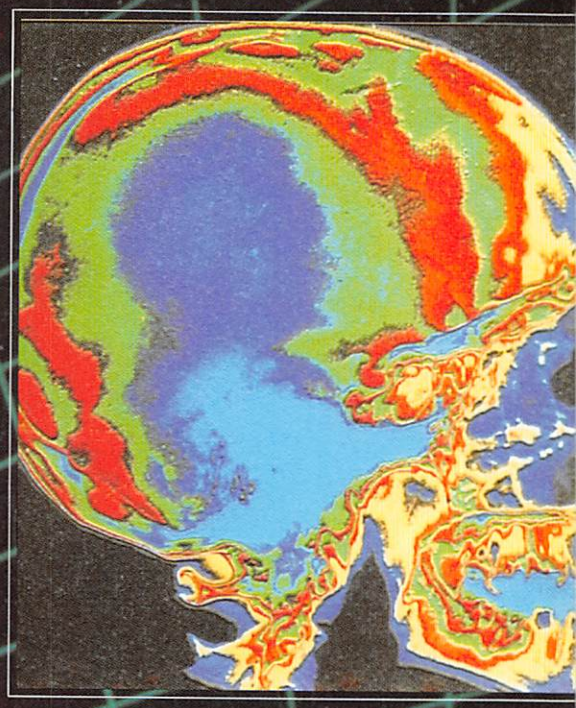
そうなると、細胞たちのエネルギー源であるATPの生産も完全にストップする。このATPというのは、細胞内で栄養分であるブドウ糖が酸素と反応し、水と二酸化炭素ができるときに発生するいわば細胞たちのエネルギーの源だが、酸素がなければこのATPがつくれなくなり、細胞たちの活動も停止。それればかりでなく、細胞そのものが崩壊を始めてしまい、蘇生が不可能な状態、イコール細胞レベルでも死の状態が訪れるのである。

ちなみに、先ほどの浅いサマディの場合だが、この場合も酸素不足となるため結果は同じ。部位によって差はあるが、脳や腎臓などは特に弱く、酸素の供給を受けない状態では、例えば脳などは四分で蘇生が不可能となるのである。もちろん、いわゆる"死"の状態から復活する例も事例として多々あるが、それはごくごく短時間に蘇生されるか低酸素に強い子供の例で、普通はいったん呼吸停止、心臓停止が起こると人工呼吸、心マッサージといったものを続けないかぎり、まず復活することはあり得ないわけである。

正常人（安静時）の各器官血流量および関連諸値.
体重 63kg，血圧 90mmHg，全身 O_2 摂取量 250mL/min.

部位	重量 [kg]	血流量 [mL/min]	血流量 組織100g当り [mL/100g·min]	動静脈血 O_2 含有量差 [mL/L]	酸素消費量 [mL/min]	酸素消費量 組織100g当り [mL/100g·min]
肝臓	2.6	1 500	57.7	34	51	2.0
腎臓	0.3	1 260	420.0	14	18	6.0
脳	1.4	750	54.0	62	46	3.3
皮膚	3.6	462	12.8	25	12	0.3
骨格筋	31.0	840	2.7	60	50	0.2
心筋	0.3	250	84.0	114	29	9.7
その他	23.8	336	1.4	129	44	0.2
全身	63.0	5 400	8.6	46	250	0.4

Bard P (editor) : *Medical Physiology*, 11th ed, Mosby, 1961 による.
「医科生理学展望」（丸善）から



エントロピーの法則が奇跡の解明のヒント

しかし、実際問題、解脱者たちは〝死〟の状態から当たり前のように復活してしまうから不思議である。それはなぜか？　どうやら医学理論だけでは解明が難しいようなので、現代物理学理論を加えながら考えてみよう。

物理学に「エントロピー」という言葉がある。日本語に置き換えると「乱雑さ」という意味だが、熱力学の第二法則によると、物質のエントロピーは常に増大していく方向にあるとされている。

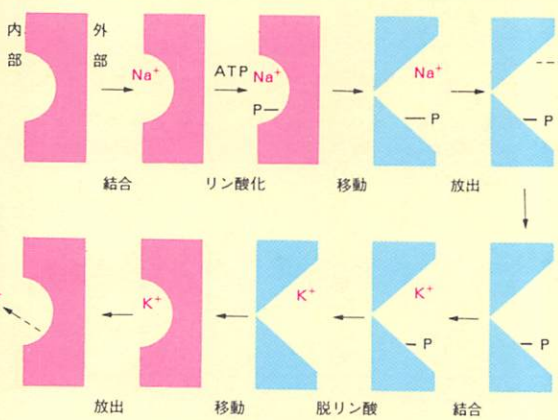
わかりにくいと思うので例を挙げよう。コップの中に入れた水に墨汁を一滴たらす。最初、墨汁は水の中のほんの一部に存在するだけだが、しばらく経つと、その墨汁はコップいっぱいに広がり水全体がうす汚れてしまう。あるいは、酸素の入った袋と窒素の入った袋をパイプでつなぐと、やがてどちらの袋の中にも酸素と窒素が混ざり合って存在するようになる。これがエントロピーの増大の法則である。

もちろん、人間の肉体もこれと同様である。細胞の外と内は細胞膜という薄い膜で区別され、人間が生きているとき、細胞の外にはナトリウムイオンが大量に存在し、細胞の中にはナトリウムイオンは少い。そこでエントロピー増大の法則から考えると当然、細胞の外のナトリウムイオンは細胞の内に流入し（このとき細胞内はカリウムイオン優位の状態）、細胞内外のナトリウムイオンの濃度は等しくなっていくことになる。実際は、そうなると細胞内外の電解質のバランスが崩れ、不可逆的な変化が起こる。つまり、細胞は破裂し、最終的にはカルシウムの沈着が起こりやがては細菌の働きで腐敗してしまう。事実、これは〝死〟を迎えた肉体の細胞ではこのようなことが起こるのである。

ところが、生命活動を行なっている肉体ではなぜか細胞内のナトリウム濃度は外側よりも圧倒的に低い。実は、これは細胞膜に存在するポンプが働いていて、内からナトリウムを外にどんどんくみ出しているため、内外の電解質のバランスが保たれているわけである。

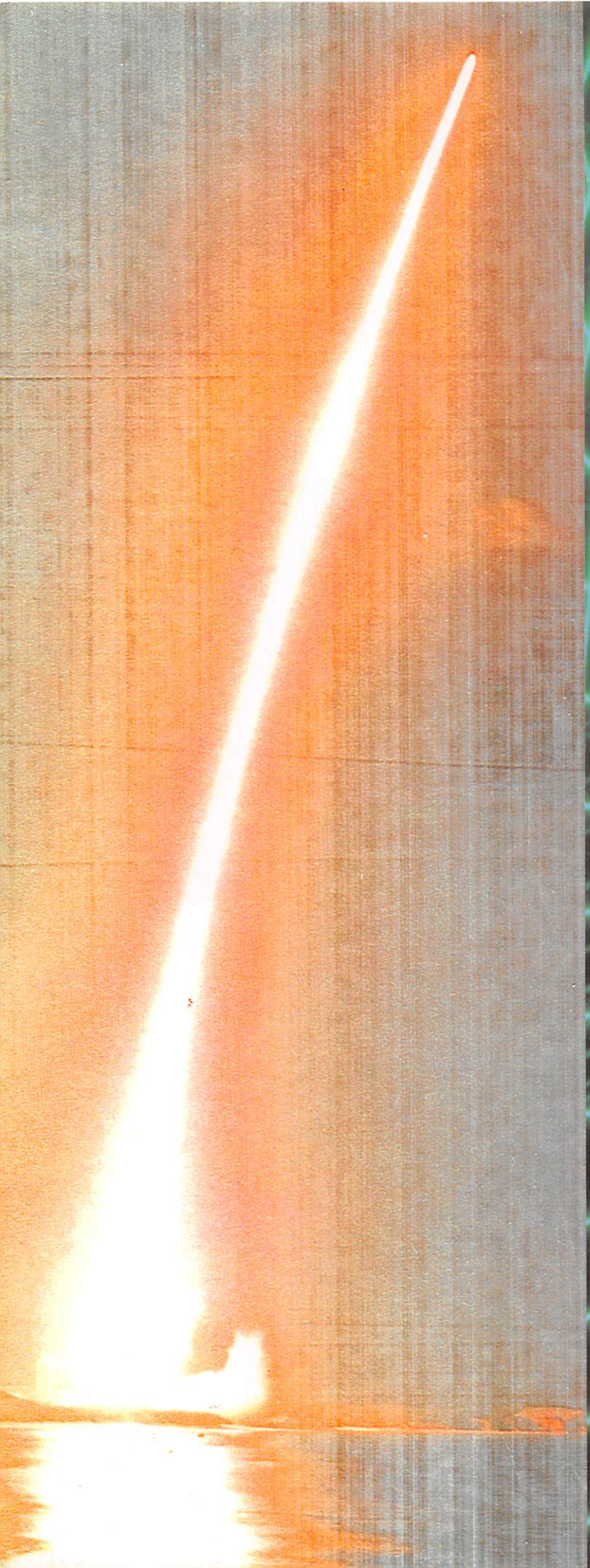
そして、このポンプの働きのエネルギー源こそが先程述べたＡＴＰであり、細胞内が血流によってブドウ糖と酸素を必要とするゆえんでもある。

つまり、一言でまとめるなら、細胞はその恒常性を保ち、肉体を維持するために、エネルギーを使って、自分自身のエントロピーの増大をくい止めているのである。そして、そのためにはエネルギー源であるＡＴＰをつくる酸素とブドウ糖は不可欠な存在なのである。



ナトリウム・カリウムポンプの仮想作動機構。上側の反応系列はナトリウムイオンの汲出しを下側はカリウムイオンの汲入れを描いたもの

「ストライヤ生化学」（東京化学同人）から



SCIENTIFIC PROOF

サマディ中は肉体も時間を超越してる?

いよいよサマディの謎に対する結論である。サマディにおいて長時間の呼吸停止あるいは心臓停止の後に生命活動が再開されるということは、サマディ中、細胞内のエントロピーの増大が抑えられていることを表わす。とするなら、まず真っ先に細胞膜が何らかの形でプロテクトされ、ナトリウムの侵入を防いでいるもの(=カリウムの流出を防いでいる状態)と推測できる。

さらに、ここから発展させ、大胆な仮説をとろう。熱力学の第二法則によれば、「エントロピーの増大は時間の経過とともに起こる」とある。とすれば、エネルギーの供給が止まってもエントロピーの増大が起こらないとするなら考えられることはただ一つ。サマディ時には時間の流れに変化が起こっている、ないしはそれに類似する現象が起こっているのではないか。

これは決して荒唐無稽な説ではない。例えば、物理学の世界では、観測者によって時間の流れが変化するというのはいわば常識。俗に"浦島効果"といわれように、光に近い猛スピードで飛ぶロケットの中と外では時間の進み方も違うとされる。つまり、ある場所の時間の進み方が他の場所の時間の進み方と異なっていても、いっこうに不都合はないのである。とするなら、サマディに入った解脱者のエネルギーによって時空の流れが変わったとしてもおかしくはない。

いずれにしても現段階では推測の域は出ないが、サマディ時の肉体が常識では計り知れない状態にあるのは事実である。近い将来、再び実験を行なう機会が訪れたなら……、そのときサマディの謎は我々の手ですべて明らかにされるに違いない。

史実に見るサマディの軌跡

The Historical Samadhi

サマディは偉大なる聖者の証だ!

歴史を調べていくと、我々は実に多くのサマディの記述にぶつかる。
しかし、ここで確認しておかなければならないのは、
それらがすべて〝聖者〟と呼ばれる方々によってなされたという事実である。
つまり、サマディはいわば〝聖者の証〟というわけだ。
ここでは史実に見るサマディの軌跡から、
真実のサマディ像に迫ってみたい。

原始仏典に見る サマディの軌跡

サマディで最も有名な聖者といえば、仏教の開祖、仏陀釈迦牟尼（覚者サキャ神賢）であろう。事実、仏典には実に多くの釈迦牟尼並びに弟子たちのサマディの記述が残されている。

その一部をここに紹介しよう。出典は『南伝大蔵経』の律蔵三大品一。「ウルヴェーラの神変」として知られる逸話である。釈迦牟尼は実にここで三千五百の神通力をウルヴェーラカッサパに対して示したそうだが、その中でサマディに入ってテレポーテーションを見せたというのが次の記述である。

《そのとき、時ならぬ大雨が降り、大洪水が起こった。覚者がとどまっておられる場所が水で覆われた。そこで、覚者にはこのような思いが生じたのである。

「水を四方に退けて、その真ん中で、ほこりに覆われた地面を経行しよう」と。

そこで、覚者は水を四方に退けて、その真ん中で、ほこりに覆われた地面を経行されたのである。そのとき、結髪のウルヴェーラカッサパは、

「偉大な出家修行者が、水に運び去られることがあってはならない。」

と、船で多くの結髪者たちと共に、覚者がとどまっておられる場所に行った。結髪のウルヴェーラカッサパは、覚者が水を四方に退けて、その真ん中で、ほこりに覆われた地面を経行されているのを確かに見た。見ると、覚者にこう申し上げた。

「偉大なる出家修行者よ、ここにいらっしゃったのですね。」

「カッサパよ、わたしはここにいる。」

と、覚者は空に昇って、船の上に立たれたのである。そこで、結髪のウルヴェーラカッサパには、このような思いが生じた。

「実に、偉大なる出家修行者には、大いなる如意と大いなる威神力がある。なぜならば、水を取り除いたからだ。しかし、わたしのような供養値魂ではないのだ。」》

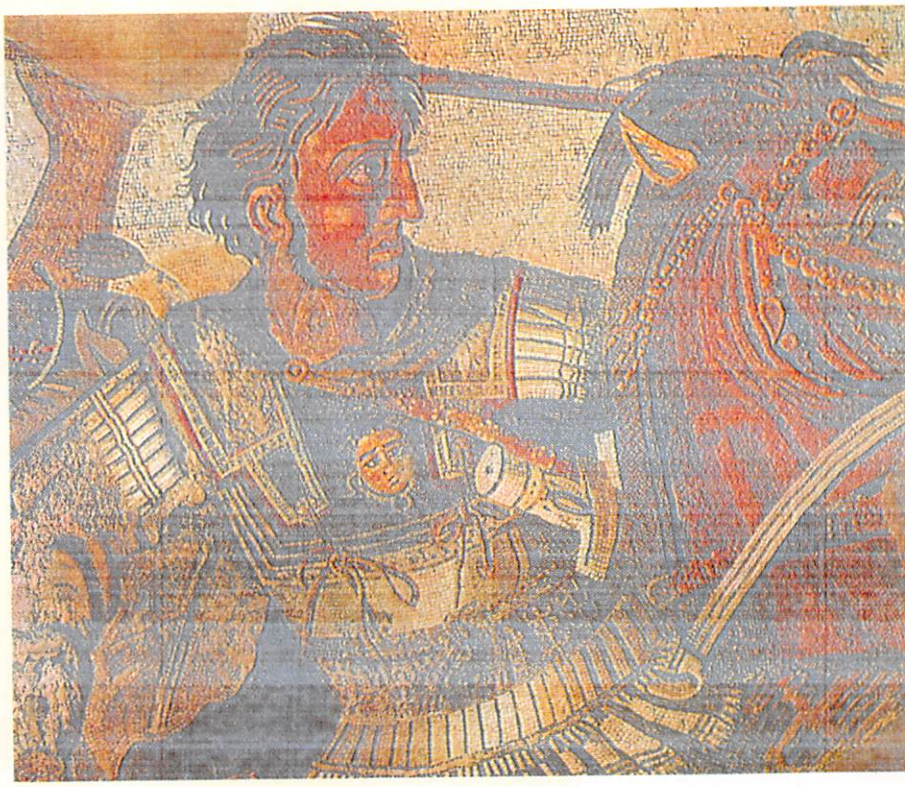
（訳・オウム真理教『南伝大蔵経』翻訳チーム）

サマディに入って見せた神通により、釈迦牟尼はここで、自身の神通におごっていたウルヴェーラカッサパを教化したとされている。ちなみにこのエピソードは、自ら進んで〝力〟を見せることが非常に稀である釈迦牟尼が、珍しく積極的に神通を見せた数少ないケースとしても有名である。

自ら炎の中に入って身を脱したカルヤーナのサマディ

古代ギリシアの英雄にアレキサンダー大王という人物がいる。紀元前三世紀ごろ、ギリシア、エジプト、アジアにまたがる大帝国を築いた王である。

幼少のころ大哲学者アリストテレスに師事していた彼は、後にインドの聖者に関心を示し、インド遠征のときに巡り合ったインド・ヨーギを自分のグルにした。その人物がカルヤーナなのである。



このカルヤーナには、ものすごいサマディのエピソードが残っている。アレキサンダー大王に従ってペルシアにわたった彼は、あらかじめ周囲に伝えておいた日にマケドニア全軍の面前で火葬用の薪の中に座り、なんと自らその老いた身を焼いて肉体を脱したというのである。何の恐怖も見せずに炎の中で身動き一つせず生身を火葬している姿を見て、さすがの無敵軍の猛者たちも驚嘆したそうだ。肉体を心がつくり出す幻影と知る解脱者らしいエピソードである。

ところで、この火葬に先立ってカルヤーナは親しかった一人一人と別れの抱擁を交わしたが、なぜかアレキサンダー大王にだけは、「やがてバビロンでお目にかかりましょう」と語っただけだった。その理由はしばらくして明らかになる。そのアレキサンダー大王は、やがてペルシャを引き上げてから一年後にバビロンで死を迎えることになるのである。この点からもこのインド・ヨーギのステージの高さがわかる。

「国王が生き返った」——シャンカラのサマディ——

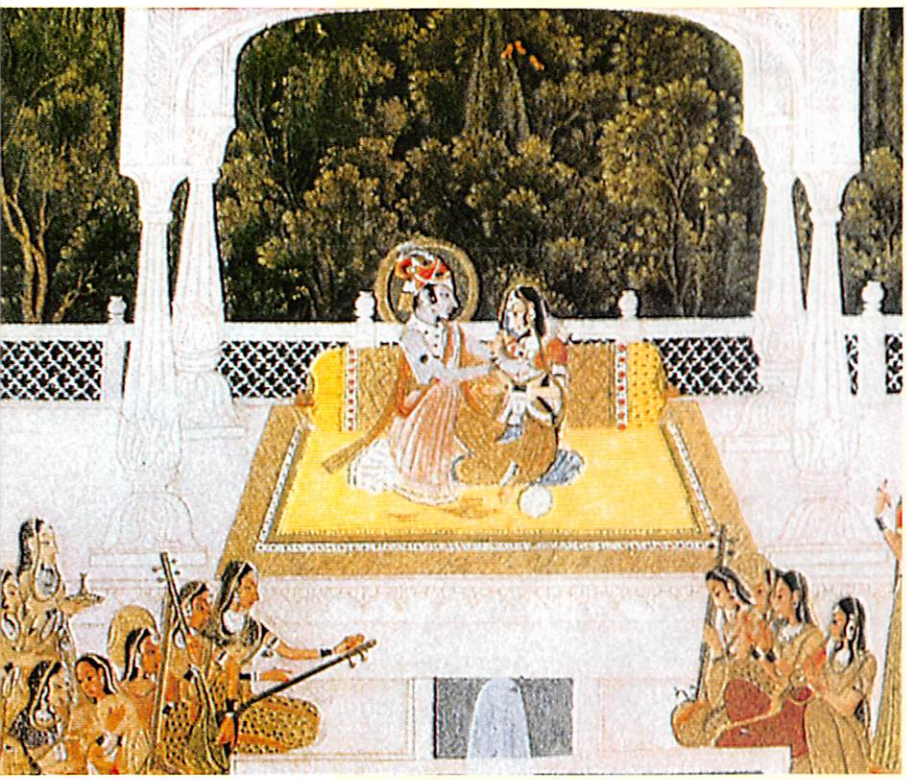
八世紀のインド——

ヴェーダーンタ学派の中の不二一元論派の創始者であり、インド最大の哲学者といわれるシャンカ

ラは、哲学者バーラティとその妻ミトラという、著名な二人の学者より論争を挑まれた。

ところが、シャンカラが夫妻の大邸宅に到着すると、邸宅の門は閉ざされていた。そこで、彼は哲学者夫婦のいる部屋にテレポーテーションして入ったのである。夫妻は突然現われたシャンカラにひどく驚いていたが、気を取り直してさっそく論争を開始した。

しかし、論争はまさにシャンカラの独壇場で優勢のままに進んでいた。夫妻の方も初めはバーラティだけで行なっていたが、最後には二人で立ち向かわざるを得なくなっていたのである。そして、夫婦が今にも負けようというとき、ミトラは起死回生の質問を発したのである。



「それでは、あなたは恋の真理について答えられますか。恋とは、そして性とはいかなるものでしょうか。」

これにはさすがのシャンカラも答えられなかった。清廉潔白な学僧である彼は、恋について全く知らなかったからである。そして、初めて返答に窮した彼は、こういうしかなかった。

「しばらく待ってください。一カ月後に返答をいたします。」

どうしたらいいかと悩みに悩んだシャンカラ……、そんなある日、彼はアマラカという国王の葬儀に出会った。そこで彼は弟子を集めてこういったのである。

「わたしは二週間の間、この肉体から抜け出す。それはあくまで仮死状態であって死んではいないから、その間この身体をしっかり保管しておいてくれ。」

そういい残して彼はサマディに入ったのである。そして、呼吸も心臓の鼓動も停止した身体を見て、茫然とする弟子たちを残し、アマラカは国王の亡骸に入ったのである。

「国王が生き返った！」

葬儀に参列していた王妃も従者は、シャンカラが乗り移ったアマラカ王の復活に、ひっくり返らんばかりに驚いた。中でも喜んだのは王妃である。そして、王妃は以前以上の愛をもって、国王に献身したのである。

当初の予定どおり、二週間後にシャンカラは国王の肉体を去り、

自らの肉体に戻った。王妃は再び悲しみに陥り、一方、弟子たちは驚きながらも師の復活を手放しで喜んで彼を迎えたそうである。

その後、シャンカラは再び二人の学者を訪れ、二週間の貴重な体験を生かして恋愛問題を見事に解き明かしたそうである。さらに、男女の恋愛について長い論文を書いたということである。

変幻自在
——ミラレパのサマディ——

今なおチベットの人々に愛され続けている偉大なヨーギ、ミラレパ。彼もまたサマディに関して豊富なエピソードを持つ聖者の一人である。

ミラレパはチベット仏教カギュ派の開祖で高名な訳経僧、マルパの直弟子で、一〇五二年この世に生を受け、その生涯を徹底した苦行と瞑想に費やした。そして、大

いなる悟りを得て、数々の奇跡を巻き起こしたとされている。

ここで特筆すべきは、ミラレパの場合もその多くは、教化のためにサマディによる神通、奇跡を見せている点である。これはまさに彼がスーパーマンであったと同時に、その力を他の魂を利するために利用するタントラの仏陀であることを表わしている。

さて、以下に挙げる話は、ミラレパの数多く残されているサマディ体験のほんの一例である。スーパー・パワーの源でもあるサマディがいかなるものかご覧いただきたい。

あるときミラレパが洞窟の中でサマディに入っていると、数人の狩人がそこを通りかかった。彼らはミラレパがぴくりともせずに座っているのを見て驚き、不審に思って弓を引きながらこう尋ねたという。

「おまえは人間か、それとも幽霊か。もし人間なら答えてみろ。」

しかし、ミラレパは一言も発せず、不動の姿勢を崩さなかったの

である。

そこで、狩人たちは毒矢を彼に向けて射たのだが、なぜか一本も射当てることはできなかった。川に投げ込もうとしたが、身体を持ち上げることすらできず、火をつけようとしたが、その身体を焼くことはできなかったのである。そして、ついには台座ごと彼を運び、崖の上から荒れ狂う川の流れへと放り込んだのである。

ところが、ミラレパは蓮華座のまま、水に触れることなく、空中に浮いているのであった。そして、しばらくすると彼の身体は徐々に上昇し始め、ついには狩人の頭上を越えて元の場所に戻ったのである。もちろん、この間彼は蓮華座のまま一言も発することがなかった。

狩人たちは驚き、あわてふためいて立ち去った。そして、後に彼らはミラレパが偉大な聖者であることを知り、彼に信を抱くようになったのだという。

ある寺に人々に慕われているミラレパを嫉妬している学僧たちがいた。あるとき彼らは論争を挑むため、ミラレパがいる洞窟を訪れたのである。

しかし、博学な学僧たちもさすがにミラレパにはかなわなかった。そして、話が空間は遮るものか遮らないものかという話題に及んだとき、「空間は遮るものだ」といったミラレパは、その神通力で学僧を固定させてしまったのである。

そこでミラレパは、こういった。

「空間が遮らないものなら、どうして体を動かすことができないのだ。それでは次に、わたしはここにある岩が遮らないものだと見なすが、これについてはどうだ。」

「お前が邪悪な妖術さえ使わなければ、岩は当然遮るものだ。」

学僧は答えた。

そこで、ミラレパはサマディに入り、こちらから向こうへと、岩を通り抜けた。さらに、半身を岩の中に入れたり、半身を外に出したりした。そして、岩を頭上に放り投げて落とし、何ともなかったことを示した。

学僧たちは徐々にミラレパのス

テージを認め、最後はついに彼に帰依するようになったという。

ミラレパが川のほとりで眠っていると、馬に乗った若者が来ていった。

「あなたはどうしてここで眠っているのですか。」

「川を渡りたいのだが、わたしの年じゃ歩いて渡るのはちょっとつらい。どうかわたしを乗せてはくれないか?」

「わたしはこの馬で競争しなくてはなりません。そんなことをすれば、馬を痛めてしまうでしょう。」

若者はこう言い残して、一人で先に行ってしまったのである。

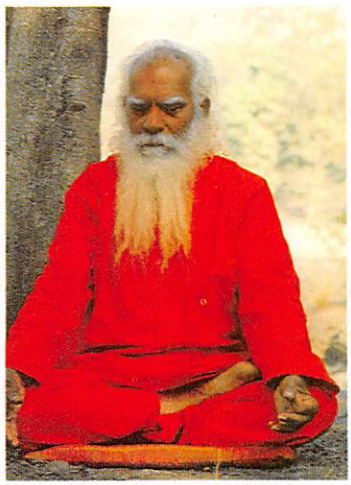
そこで、ミラレパはサマディに入り、流れを横切って、すいすいと滑るように水上を歩き始め、川の中ほどで苦戦していた若者を追い抜いていったのである。

若者は驚いた。

「わたしは幻覚を見ているのだろうか。そうでもなければ、この男は水に浮くように生れついたに違いない。」

反対岸に着くと、若者はミラレパに近づいて彼の足を見た。そこで、足の裏さえ濡れていないことに気がついたのである。

そして、若者は自らの非を反省し、ミラレパに帰依したという。



救済の命を受けて
—ラーマクリシュナのサマディ—

十九世紀インドの聖者、ラーマクリシュナ・パラマハンサは、人生そのものがサマディであったといわれるほど、頻繁にサマディに入っている。歌を歌ってはサマディに入り、カーリー神に祈ってはサマディに入るといった具合で、彼のサマディを見た人もかなりの数に上る。

ここに紹介する例は、そんな数多くの彼のサマディ経験の中でも、いわば人生を左右するターニング・ポイントとなった重要なサマディである。

ラーマクリシュナが二十八歳のとき、カーリー寺院にトータープリという聖者がやってきた。トータープリは、四十年以上に及ぶ厳しい修行により、ニルヴィカルパ・サマディを得ていた。

彼はラーマクリシュナを見て、その優れた潜在性を見抜き、秘儀を授けようと提案した。そして、その結果、たった一日にして、ラーマクリシュナはなんとトータープリのステージに到達してしまいうことになるのである。

それから一年後、トータープリが去ってから、ラーマクリシュナは六カ月間のサマディに入った。その間、彼の身体は仮死状態になったままで、鼻や口の穴には蝿が出入りしてさえいた。身体も髪もホコリまみれのひどいありさまだったのである。

通常、この状態に達すると、もう元の体に戻ってくることはない。肉体も三週間ほど朽ち果ててしまうものだが、ラーマクリシュナの体はサットヴァの要素に富んでいたため、こうした危機を乗り越えられたのである。

それでも、肉体を維持することはなかなか難しかった。甥のフリダイは、一所懸命面倒を見るのだが、栄養不足がたたって、ついには肉体は死に直面したのである。

そんなとき一人の僧侶が現われ、ラーマクリシュナの姿を見た僧侶は荒治療を施したのである。棍棒で殴り付けて彼の意識を肉体に戻し、急いで食べ物を口に入れたのである。これにより、肉体はようやく死を免れることができたという。

ちなみに、ラーマクリシュナは、このサマディの最中にカーリー女神から〝人類救済〟の使命を受けたのだという。つまり、聖者たちにとっては、サマディにより意識を神々の世界へ移すことも可能なのである。

The Historical Samadhi

聖者ヨーゲシヴァラナンダが見たサマディの奇跡

二十世紀を生きたインドの聖者ヨーゲシヴァラナンダ。彼の著書、『魂の科学』は霊視によって最終解脱までのステップが確認できるハイレベルの修行書として有名だが、この『魂の科学』にもヨーゲシヴァラナンダが自らのグルのサマディを見たときのエピソードが残されている。参考までにここに抜粋しておこう。

《それは私達がここで修行を始めてから二十五日目のことでした。一人の森林省の役人が、私達にいつも食糧を提供してくれる店がある村にやって来たのです。役人はそこで、店の主人から素晴らしい私達の尊師の話を来き、私達に食事を振る舞ってやろうと思ったのです。翌日十一時頃、役人は他の人々と一緒に私達を呼びにやってきました。昼食までまだ一時間ほどありましたので、私達は尊師と共に水浴しに出かけました。その時尊師は、深くよどんだ水の中に入って行かれましたが、そのまま一時間近くたっても水から上がって来られなかったのです。

私達は尊師が水に溺れたのではないかと思い、すぐに二、三の者が水中に飛び込みました。そして、水中から尊師を引き上げました。尊師は結跏趺座した姿のままで岸に引き上げられたのですが、しばらくすると深呼吸とともに眼を開かれました。その眼は、燃えるような鋭い眼差をしていました。その眼光にいすくめられ、そこに居あわせた誰もが驚愕のあまり黙って立ちつくしてしまいました。おもむろに口を開かれた尊師は、私達二人に向かって、「私が一人で水から出て来られるのを知っているのに、なぜお前達は水から引き上げたりしたのだ。今日は一切、食物を口にしてはならぬ。」と申し渡されたのです。店の主人がみかねて、私達が何とか許してもらえるよう尊師に頼んでくれたのですが、尊師はそれに全く耳をかさず、居合わせた人々に向かって、皆そこから立ち去るようにと告げられました。尊師はその後四日間、私達に食事を摂らせてくださいませんでした。その代り、その間は瞑想を続けるようにと言われたのです。》

様々な聖者によって伝えられてきたサマディの数々の実例。史実からもすでに明らかなように、サマディは偉大な聖者の証なのである。そして、我々の眼前にサマディの奇跡が繰り広げられているのは、この日本にまさしく真の解脱者＝聖者が出現したことを表わしているのである——。

参考文献

・『超人世界』内垣日親　ヴェーダーンタ文庫
・『あるヨギの自叙伝』パラマハンサ・ヨガナンダ　森北出版
・『真理の太陽』三浦関造　竜王文庫
・『ミラレパの十万歌』おおえまさのり訳　いちえんそう
・『インドの光』田中　玉　三学出版
・『霊性の師たちの生涯』日本ヴェーダーンタ協会
・『魂の科学』木村一雄訳　たま出版

サマディがもたらした聖者ヨーゲシヴァラナンダとの出会い

人間のグルを持たずに最終解脱の偉業を成し遂げた麻原尊師。聖者ヨーゲシヴァラナンダの著書、『魂の科学』はそんな麻原尊師の修行を進める上で大いに参考になったそうだが、聖者と尊師の間にはサマディに関してこんなエピソードが残されている。

そもそも『魂の科学』に目を通すきっかけとなったのが、聖者ヨーゲシヴァラナンダのヴィジョンが突然現われたことに起因しているのである（このとき麻原尊師は聖者が亡くなったと感じたそうである）。そして、まだ最終解脱を果たす前、インドを訪れた麻原尊師は、「なぜか聖者のヴィジョンが見えない」と一抹の不安を抱きながらも、聖者ヨーゲシヴァラナンダのヨーガ・ニ・ケタン道場を訪ねたのである。以下はそのときの大変興味深い記述である。

《夜遅く風雨のなか、私たちはずぶぬれになって、ヨーガ・ニ・ケタンまでたどりついた。道場内は自由に出入りできるので、私は自分を呼ぶバイブレーションの出ている方角を、目指した。弟子達は何も感じないらしかったが、私は強いバイブレーションを感じ続けていた。

「あの建物から、バイブレーションが出ている。ヨーゲシヴァラナンダ師がおられるにちがいない」

建物の内部に入ろうとすると、鍵がかけられていた。私は、誰かを捜すよう弟子に指示した。すでに夜9時を過ぎていて、あたりはまっくらだったが、さいわいにも1人の日本人ヨーガ愛好者を見つけることができた。彼はいった。

「聖者は9月に亡くなられました」

……そうだったのか。私が姿を見たとき、やはり聖者は亡くなられたのか。残念だ。もっと早く来るべきだった。

「しかたがない。出直そう」

3日後、私たちはふたたびヨーガ・ニ・ケタンを訪れた。そして、聖者の後継者であるグルに、私が聖者の信奉者であることを伝えた。彼は私たち一行を、聖者のサマディーへと案内してくれた。

サマディー？

なんとそれは、前回訪れたときに強力なバイブレーションを発していた、あの建物だったのである。墓に眠りながらも聖者は、巨大なエネルギーとして存在し続けていたのである。

内部へ招き入れられた私は、弟子たちに後へ下がるようにいい、等身大の聖者の像に向かって、修法をはじめた。マントラを唱えると、とめどなく涙が流れ落ちた。

「この世で生きているうちに、お会いしたかった。いつまでも、導いていただきたかった」

涙につまってマントラが途切れたとき、聖者ヨーゲシヴァラナンダが現われた。

「私がこれからあなたを守護し、指導してあげよう」

聖者は、こう私にいわれた。

「あなたの最終解脱は遠いことではない。全宇宙のエネルギーが、あなたを味方している。私が指導しよう……」

それからしばらくのあいだ、私は聖者と話をすることができた。私が笑うこともあった。まわりの人間は、きっと変に思ったことだろう。

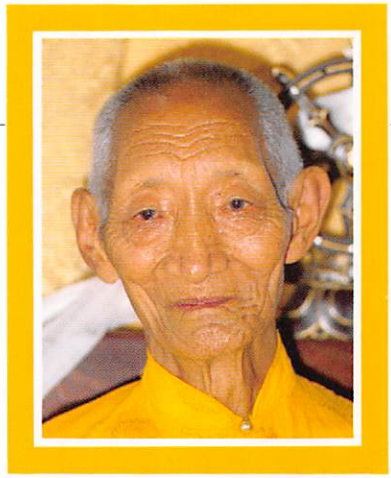
ただ、後継者のグルだけは、聖者と私のアストラル体での会話を、知ることができたらしい。Y君がこういっていた。

「私はあのグルを知っていますが、あんなに冷静な人が目を赤くしていました。とても信じられないことです」

このようにして、聖者ヨーゲシヴァラナンダは、私の最高霊界のグルになってくださったのである。》

これもまた、時空を超越したサマディがもたらした出会いだったである——。

SPECIAL
DOCUMENTARY



故カール・リンポチェ師に捧ぐ

再会のための訣れ

生死を超えた
2つの聖なる魂の約束

言葉も国籍も違う何の接点もないはずの二つの魂は、
ある時期を境に見えない糸で結ばれているかのように
お互いを引き寄せ合う不思議な運命をたどる。
日本とインドと距離は離れていながらも、
肉体を脱した世界で
いつも互いを気遣ってきた二人の聖者——
そして、一つの魂は異世界を通じて別れを告げ、
自らの意志で静かに肉体を離れた。
彼は死期をも自分で決められる
絶対自由の境地にあったのである。
サマディによって出会った二人は、
一方はサマディによって別れの時期を知り、
そのとき、もう一方はサマディによって肉体を離れた。
我々はこの二人の聖者のドラマから
時空を超えたサマディの真実を垣間みることができる。

文・麻原彰晃導師（初出・オウム出版刊『月刊マハーヤーナ』NO23）
構成・AUM Editorial Staff

カール・リンポチェ

チベット仏教カギュ派の総帥。中国共産党によるチベット侵攻により故国を捨て、異郷で仏教を守り続けたラマの一人。チベット仏教では珍しい派を超えた親交を持ち、晩年も老体を顧みずに台湾、香港などを訪れては積極的に真理の流布に励まれた。

また、広く海外に真理の法則を伝播するために、弟子たちを集め、チベット語から英語、英語から他の国の言語へ、あるいは直接英語以外の言語へとチベット仏教の経典の翻訳作業も行なっていた。

ちなみに、師は入滅直前に自己のことは全く顧みず、衆生のためのこの翻訳事業と、長年大切に持ち続けてきたご自分のグルの遺骨を安置する、衆生とグルのためのストゥーパ建設の二つを弟子たちに託されたそうである。

――トージェ・チェ（ありがとう）――

どこからともなく響いてきたこの声は、まぎれもなくカール・リンポチェ師のものであった。その声を聞いた瞬間、わたしは、

（カール・リンポチェが別れのあいさつをしにやってきた）

と感じ取ったのである。それは五月七日（編集部注・一九八九年）の朝方、瞑想中の出来事であった。

（リンポチェは亡くなったのか!?）

わたしはもっと正確にそれを確かめるべく、再び瞑想に入った。瞑想の力によって自分自身で確かめるより他はない。なぜなら、日本―インド間の国際電話事情は非常に悪く、特にリンポチェ師の住んでおられたような田舎とでは連絡の取りようがないからである。

瞑想に入ったわたしは、神々に聞く。

「リンポチェは亡くなったのですか？」

すると、

『リンポチェは死んだ、死んだ、死んだ』

さんざめくような神々の声が聞こえてきて、わたしの質問に答えたのであった。（MEMO参照）

◐過去世のグル――カール・リンポチェ

人は数え切れないほどの転生を繰り返し、数え切れないほどの過去世を持っているものであるが、リンポチェ師は、わたしがある過去世を修行者として生きていたときのグルであられた方であった。そして、昨年の七月、わたしは今生において初めて彼を探し当て、劇的な対面を果たすことができたのだった。

そもそも、わたしがこの前生のグルに会わなければならないと決心したのは、瞑想中に彼のヴィジョンを見たことがきっかけであった。ヴィジョンの中で彼はこうわたしに語りかけた。

――わたしはカール・リンポチェというチベット仏教カギュ派のラマである。わたしはあなたの前生のグルでもある――。

わたしはカール・リンポチェという名をかつて聞いたことがあったのを思い出した。わたしが数年前、わたしを導いてくれることのできるグルを探し求めていたとき、ダライ・ラマ法王（チベットの宗教的・政治的最高指導者。現ダライ・ラマ十四世はインドに亡命中）がわたしに高いステージにあると認められる三人のラマの名を教えてくださったのであるが、そのうちの一人が、確かにカール・リンポチェという名であった。

しかし、ダライ・ラマ法王はゲールク派であるのであるから、法王が教えてくださったラマはすべてゲールク派に属しているのではなかっただろうか？　わたしはカール・リンポチェ師もゲールク派のラマであろうと信じ

インド・ダージリン地方のソナダにある師のお寺、サムドラブ・ダルジェイ・チョリング・モナストリー

込んでしまっていたので、このとき自分が見たヴィジョンが真実のものであるとはとうてい信じられなかった。

ところが、わたしからこの話を聞いたマハー・マーヤ大師（現ヤソーダラー正大師）が書棚からカール・リンポチェの著書を見つけてきたのである。その書の紹介文を読んだわたしは、彼がカギュ派のラマであることを知った。しかも本に載っている写真を見ると、ヴィジョンに現われた方と同一人物であったのだ。

「もう間違いない。ヴィジョンは正しかった！」

このときわたしは、是非ともリンポチェ師にお会いしなければならないと思ったのであった。ヴィジョンに現われたのには、それなりに意味があってのことだと。

麻原尊師とカール・リンポチェ師が実際に会われたのは、それから数カ月後の八八年七月のこと。折しもインドに滞在中に、常に超多忙を極めていた麻原尊師にたまたま空白の数日間が与えられ、運命に任せるままに接触を試みた結果、これまた超多忙のカール・リンポチェ師との香港での対面が実現したわけである。

このときの師の対応もなかなか興味深い。この日に限って、「今日わたしを訪ねてくる人がいたら、どんな人でもいいからこの部屋に通しなさい」と周囲に告げていたというのである。二人の出会いが互いが望まれていた運命的なものであったことがよくわかる。

なお、師はその直後、オウム真理教の富士山総本部道場開設記念式典に祝福に駆け付けてくださり、二時間にわたる説法と、チベット仏教・金剛乗の瞑想法の伝授を行なってくださったりもしている。

その後は直接お目にかかる機会はなかったが、八九年五月には麻原尊師にも、台湾に来てもらえないか、ということを打診してきておられた。日本からは、インドより台湾の方がずっと近いから、というお気持ちがあったからだろうが、それにしても師はご高齢にもかかわらず、仏教を広めようと絶えず動き回っておられる方だった。

瞑想中のわたしに別れを告げにいらしたり

MEMO

ここで麻原尊師が使ったのは天耳通という神通力である。詳しくは、三十一ページの「仏典に記もされているサマディの果報——六つの神通力」参照

ンポチェ師、そしてわたしの問いに対する神神の答え……。リンポチェ師が既に入滅されたか、あるいは非常に入滅に近い状態であることは間違いないであろう。わたしは直ちにインドへと出発することにした。

◐外れた予言!?——喜ばしい知らせ

さてさて、インドに到着した途端、わたしの耳に入ってきた情報は、なんと、

——カール・リンポチェは入院していたが、数日前に元気に退院した——

というもの。旅行会社の人が、あるラマから聞いたのだという。わたし自身、自分の耳を疑ったが、リンポチェ師入滅の予言は、外れてしまったことになる。そうなるとわたしの面目にかかわってきてしまうが、内心ほっとした。ご健在のリンポチェ師にお会いすることができるなら、これに越す喜びはない。

そういえば、昨年ソナダに滞在していたとき、リンポチェ師の外国人の弟子が、

「リンポチェは、よく病気で死にそうだといっては入院し、遠くの弟子たちを呼び寄せるんだ。自分のそばに置いて修行させるためにね。」

と、ジェスチャーを交えながらわたしに話したことがあった。今回もわたしをインドに呼ぶためにアストラル世界を通じて「トージェ・チェ」などといわれたのだろうか?

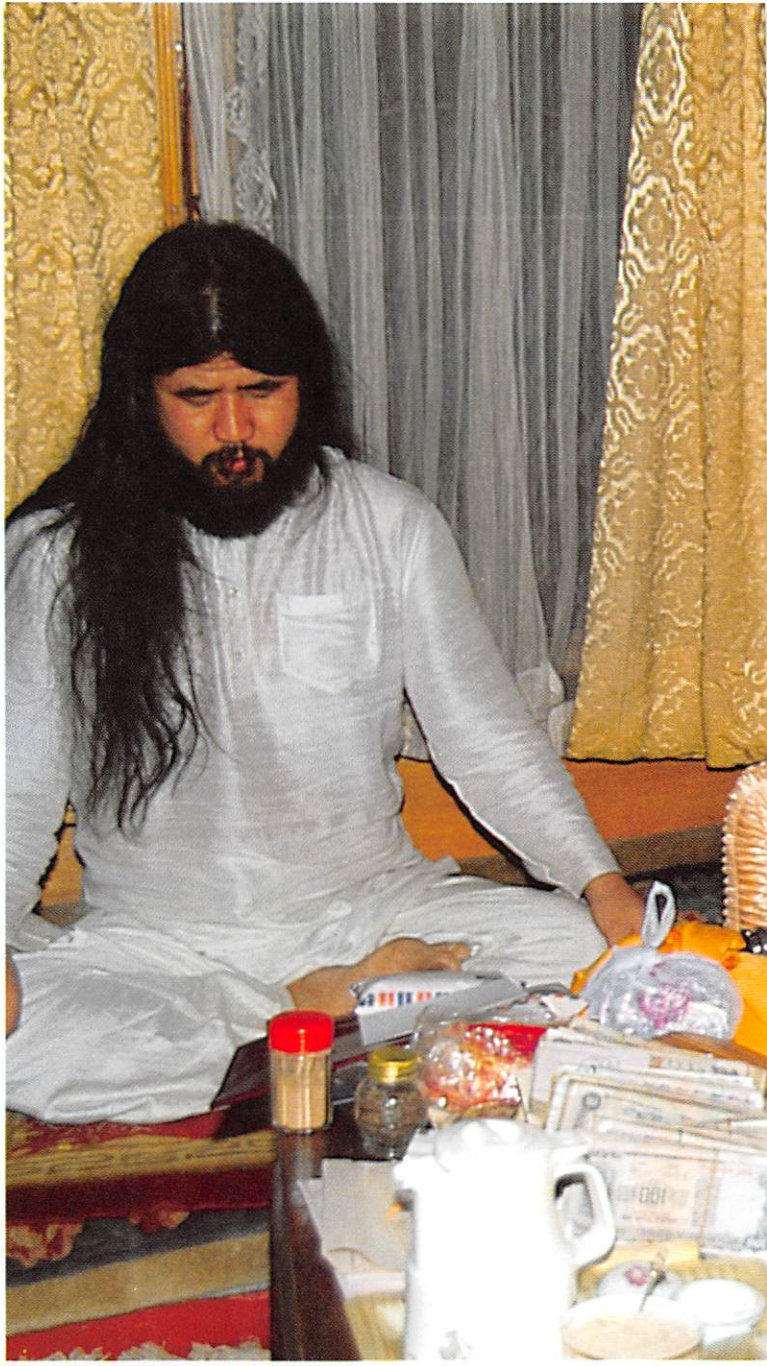
(リンポチェだったらやりかねないな。なかなかユーモアもある方だったから……)

そうわたしは思った。

◐突然の訃報——急きょソナダへ

ところが、その日のお昼ころになって事態は一転した。「リンポチェ死す!」の報が、チベット人の経営する旅行社を通じて入ったのだ。

一瞬にしてわたしの気持ちは引き締まった。これは急がなくてはならない。急いでソナダへと行かなければならない。なぜなら、リン



リンポチェ師は次々と惜しげもなく秘儀を伝授された

ポチェ師の魂が遺体の周辺にある間にお会いしなければならないのだ。人の魂は、死後数日間遺体とともにあるのである。

ただ問題は、リンポチェ師の入滅について、詳しいことが何一つわからないということだ。いつお亡くなりになったのか？　葬儀がダラムサラであるというのは確かなのか？　何一つ即座に正確な情報を得る術はないのだ、このインドでは——。とにかく現地へ行ってみるしかない。

一行は車をチャータし、デリーから一五〇〇キロ離れたソナダに向かった。治安が悪いため現地の運転手が夜間走行を拒否するトラブルもあってソナダまでは丸まる二日かかったが、観光シーズンであるせいか連日予約で満席の状態の飛行機が使えない以上、これでも精一杯の結果だった。

◐はるかに強い仏教のエネルギー

今回、わたしは、ヨーガと仏教の成就の差が大きいことを知った。かつて、ヨーガの成就者であるスワミ・ヨーゲシヴァラナンダの道場を訪ねたことがあった。三年半ほど前のことである。このとき、わたしはスワミ・ヨーゲシヴァラナンダのエネルギーを感じ、そのエネルギーに導かれるようにして道場内を歩いていった。そしてたどり着いた先が、スワミ・ヨーゲシヴァラナンダのサマディであったのだ。インドでは聖者の墓をサマディと呼ぶのであるが、このとき初めて、彼が数カ月前に亡くなっていたことを知ったのだった。それほど、この聖者の墓は強いエネルギーを発していたのである。

ところがカール・リンポチェの場合、はっきりいってそれ以上であった。わたしは乗用車で走りながら数十キロも手前から光を感じることができたのである。その光は、瞑想中に内側が昼間のように明るくなる空無辺処定の光と同一のものであった。ヨーガの成就者

のエネルギーが道場内だけに影響していたのに比べ、仏教の成就者のエネルギーは数十キロも先まで影響するということだ。やはり仏教の方が奥が深いのかもしれない。

◐予言どうりの入滅

「あなたが来てくださって、とてもうれしく思います。リンポチェは、既に二、三カ月前に、自分の寿命が長くないことを知り、わたしにそのことを話していました。

『わたしはもうじき逝くであろう。』

と。

――信じられませんでした。なぜなら、わたしの目には、彼が本当に普段と変わりなく映り、体の状態もそう悪くは見えなかったからです。」

夜遅くなってソナダへ到着したわたしに、リンポチェ師の住居の中の一室で、リンポチェ師の甥でもあり秘書でもあったラマ・ギャルツェンは話し出した。憔悴しきった様子であった。

「しかし、この十日にリンポチェは亡くなったのです。ご自分で予言されていたとおりに……。」

十日にリンポチェは入滅された！　十日といえば、わたしがヴィジョンを見た三日後であり、インドへと出発する前日だ。入滅されてから、今日で四日経ったということになる。

「わたしはすぐに、あなたあてに国際電報を打ちましたが、電報をご覧になってすぐ日本を発たれたのですか？　――それにしても……。」

わたしがソナダに到着した時点では、外国からの弔問客はだれ一人到着していなかった。訃報を受け取ってからビザを取得し、様々な準備をして、しかもこれだけの大人数でやってくるにしては、当然早すぎるとでも思ったのだろう。秘書は不思議だというような顔をした。そこで、わたしはこれまでの経過を説明したのだった。

まず、瞑想中のヴィジョンにリンポチェ師が現われ、「トージェ・チェ」というとともに、わたしに別れを告げたこと、神々に聞いても「リンポチェは死んだ」と答えたこと、そのため、慌ててインドへとやってきたこと――。話しながら、わたしは、わたしに「トージェ・チェ」というチベット語を教えてくれたのが、他ならぬリンポチェ師であられたことを思い出していたのだった。

◐伝えられなかったメッセージ

以下はカール・リンポチェ師が入滅された模様について語ったラマ・ギャルツェンの言葉である。

《リンポチェは亡くなる数日前に退院されたのです。退院された後、あなたについて、二、三話されておりました。

申し訳ないことに、そのときわたしはあまり気にも留めずに聞き流してしまったのです。こんなにも死期が近付いていただなんて、思いもしなかったものですから。最初の二、三言は聞き取れたのですが、その後が聞き取れませんでした。リンポチェの声が小さく、かすれていたもので……。

ただ、あのとき、リンポチェは、「彼はどうしているだろうか?」というようなことをいっておられたと思います。リンポチェがあなたについて語るとき、愛情以上の感情がその言葉に込められていると感じたことが何度かありますが、このときも同じだったように記憶しています。リンポチェには、いつもあなたに何かをしてあげたいという気持ちがあったようです。》

◐死を目前にして、穏やかに、威厳をもって……

《その朝、リンポチェはかなり弱っておられるご様子でした。そのため、そばについていた医者も、周囲の人間も、リンポチェを病院へお連れしようとしたのです。しかし、リンポチェは、「病院へは行かない」とおっしゃるのです。わたしたちは、「どうか病院へ行ってください」と、リンポチェの容態を心配するあまり、一生懸命懇願しました。すると、「皆さんが行くようにいうのだったら行きましょう」と答えられたのです。

しかし、実際は病院へと移動する前に亡くなられたのです。

亡くなる三十分ほど前のこと、リンポチェは体の右を下にして右手を頭の下に入れて横たわっておりました。これは仏陀釈迦牟尼が入滅のときにとったと伝えられている形と同じですね。でも、医者が「横向きで寝るのは良くない」といって、リンポチェを仰向けにしたのです。

それから「バスルームへ行きたい。お風呂に入りたい」とリンポチェはいわれました。わたしたちは、このときもお止めしました。「お風呂だったら、お部屋の方に準備するから、どうか動かないでください」といって。

しかし、このときはリンポチェはわたしたちのいうことをお聞きにならず、バスルームへと自分で歩いていかれたのです。……バスルームからは、わりと早く帰っていらっしゃいました。そのとき、とても弱って見えました。

ベッドのところに来たとき、リンポチェは、「ベッドに横たわらずに座りたい」といわれました。「座法を組みたい」といわれたのでした。もちろんわたしたちは止めました。はっ

盛大に行なわれたカール・リンポチェ師の葬儀

きりいって、とても座れるような状態でないことは、だれの目にも明らかでした。

そのとき、わたしとともに高僧が二人と、リンポチェの親友が一人、リンポチェのそばについておりました。この高僧のうちの一人はボッカ・リンポチェでした。カール・リンポチェは、わたしたちが、「駄目です。どうぞ楽な姿勢で横になってください」といくらいっても、「座法を組まして座らせてくれ」といわれるのです。

三回目にリンポチェがそういわれたとき、わたしは〝そのとき〟がやってきたのではないかと、漠然とした不安に襲われました。そして、彼の望みを聞かないままに彼が亡くなられたとしたら、わたしはきっと後悔するだろうと思ったのです。なぜなら、チベットは伝統ある仏教国なので、多くのラマが座ったまま入滅するということも何度となく聞いていたからです。

〝そのとき〟を意識しながら、わたしはリンポチェが座法を組んで、かつてお元気であられたころのようにベッドの上に座るのを手伝いました。リンポチェは、いつもこのようにお座りになって瞑想し、また、訪ねて来る人々にお会いになったり説法をしたりされておりました。

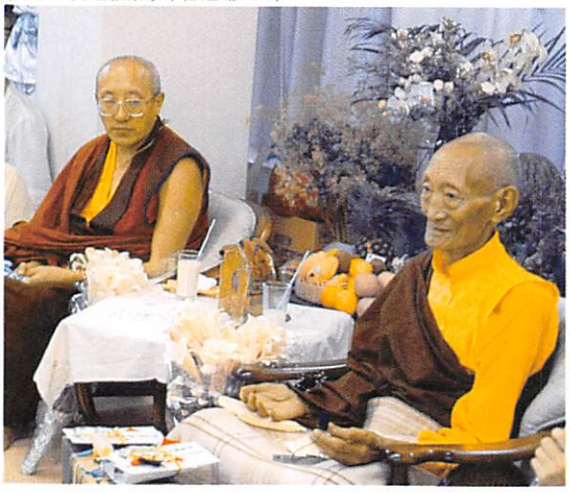
ほんの少しの時間が経って、少しばかり回復されたようなご様子のリンポチェが、今度は、「窓のカーテンを開けてくれ」といわれました。わたしたちがカーテンを開けると、……わたしはリンポチェが亡くなられるのかと思うと、悲しくて悲しくて胸が詰まりました。わたしは四十四年もの長い間、リンポチェを心から尊敬し、尽くしてきたのです。

……わたしたちがカーテンを開けると、リンポチェは微笑みを浮かべました。そして空を見て、それからゆっくりと目を閉じられました。至福に満ちたご様子でした。その間、時間にしてほんの数分。わたしは自分自身でも信じられないことなのですが、そのご様子を見て心が明るくなったのです。本当に、静かに、動かず、穏やかに亡くなられたのでした。あまりにも平和的で素晴らしい光景であったので、それがわたしの心の痛みを和らげてくれました。》

まさに聖者の入滅であったといってよいだろう。リンポチェが完璧な成就者であったことの証明ともなるべきものだ。入滅の直前に空を見つめたというのは、トラータカを行なったのだろう。一点に集中することにより、速やかに三昧（編集部注＝サマディと同義）に入っていかれたのだ。これこそ、成就者が肉体を捨てるときの方法なのである。最期の瞬間にこれほど心の働きを制御なさったのであるから、やはり大したものである。

日本を訪れたカール・リンポチェ師

チベットの高僧であり親友でもあるボッカ・リンポチェ師と
（オウム真理教東京本部道場にて）



逆縁を利用する仏教的救済

今にも動き出しそうなカール・リンポチェ師の亡骸。逝去から2年を経ているとはとても思えない。これもやはりサマディによる奇跡である（撮影・1991年5月10日）

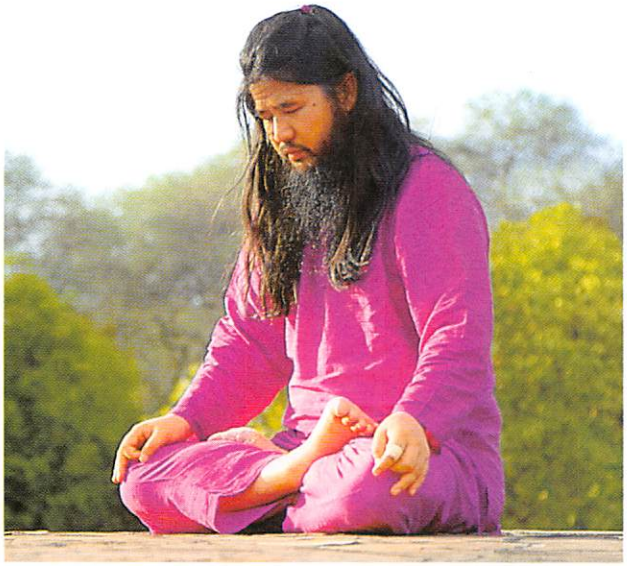
チベットの伝統では、高いステージにあったラマの遺体は、焼かれる場合と保存される場合と二通り。カール・リンポチェ師の高弟たちは、後に残された弟子たちのために遺体を残すことに決めた。

ところで、同じカギュ派のヘッド・ラマ、カルマパの場合はどうだったのだろうか。やはり、遺体が保存されていたのだが、最終的には焼かれてしまった。中国共産軍がチベットに侵攻して多くの寺院が焼かれた際に、カルマパの遺体も灰になってしまったのである。弟子たちの落胆ぶりも想像に難くない。

もっとも、ラマの遺体を切ったり破損したりした人間がいたとしても、そういう人間にまでラマは恩恵を与えるとされるのが仏教なのである。師の弟子たちが決定した遺体の保存にはこんな背景がある。事実、高弟の一人は次のように語っている。

「いつの日か、たとえカルマパのように遺体を焼かれてしまっても、カール・リンポチェは恩恵を与えるでしょう。彼の弟子や信者に対してはいうまでもありません。したがって、どんなことになっても、リンポチェは恩恵を与えるのです。そういう意味からも、遺体は焼きたくないのです。」

まさに逆縁を利用して魂を済度する、仏教ならではの考え方である。



なお、瞑想に入られたカール・リンポチェ師に付き添うように、その日から四人のラマが師の部屋で一緒に瞑想をした。その間、他の人はだれ一人部屋の中へ入ることはできなかった。そして、三日後、師の瞑想が終わったと判断され、ようやく遺体を洗うことになった。このとき、師の遺体は臭いも尿も出ておらず、死後硬直もなかったという。これもまたサマディの奇跡なのである。

◐無言の対話

翌日の朝、わたしは秘書に案内されて、生前リンポチェ師が使っていらした部屋へ入った。正面の、かつてリンポチェ師のベッドが置かれていた場所が、飾り付けられて祭壇のようになっていた。そこには縦に長い箱が置かれ、箱の中心には、カール・リンポチェの写真が飾られている。その箱の前には、供物を並べるテーブルがあり、果物やお布施のお金が供えられていた。ここにも一枚、リンポチェの写真が置かれていた。どちらの写真も、柔らかい、穏やかな微笑を浮かべたものであった。

窓を背にして祭壇に向かい、リンポチェの弟子の高僧が二人、経典を経典台に置いて読経している。入り口の方にも何人かの僧が座っている。

わたしは祭壇の正面に座って手を合わせた。すると、正面の箱に飾られた写真の方向から、懐かしいリンポチェのエネルギーが流れてきた。そして、わたしは無言のうちにリンポチェと対話をしたのだった。

最初、リンポチェは悲しんでおられた。わたしがリンポチェの最期に間に合わなかったからだろう。しかし、話していくうちに、リンポチェの悲しみはなくなった。また、リンポチェは空の瞑想の段階を終え、次の転生の準備を始められていた。

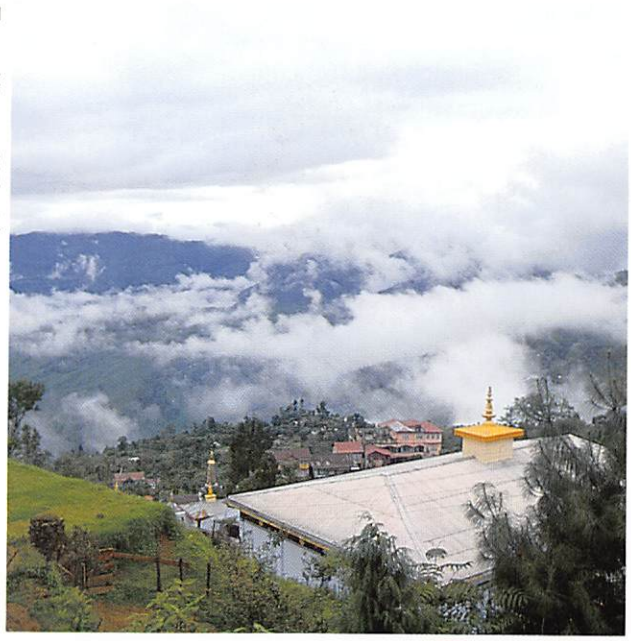
対話を終えた後、読経をしている二人の高弟の方に向き直り、お互いにあいさつを交わした。わたしは高弟に聞いた。

「昨日で空の段階が終わったのではないでしょうか?」

「そう思います。」

高弟のうちの一人、ジャムゴン・コングトロール・リンポチェが答えた。もう一人の高弟、ボッカ・リンポチェは押し黙ったままである。

「あなたとお弟子さんたちが来てくださって、大変うれしく思います。衆生にとっても、我々カギュ派にとっても、最も偉大な師をなくしたことは不幸であります。しかし、仏陀釈迦牟尼が言われるようにすべては無常。リンポチェ自身も五蘊（肉体・感覚・イメージ・意志・意識）によって構成されていた無常のものであったのです。それを理解しなくてはな



山々を見おろし、聖地ソナダは天上界を思わせる

りません。リンポチェが入滅されてから、わたしたちはずっとご一緒に瞑想させていただきました。そして、リインカネーション（生まれ変わり）の誕生が近いことを知りました。わたしとボッカ・リンポチェは、カール・リンポチェのご遺志を継ぎ、ストゥーパの完成と翻訳事業の推進のために全力を注ぎたいと考えております。」

七日、わたしはリンポチェ師の魂が次の世界へと転生していったのを見届けてから、ソナダを後にして山を降りていった。出発のとき、秘書夫婦が、リンポチェ師が生前お召しになっていらしたという僧衣と、小さなストゥーパをわたしに手渡した。この二つのリンポチェ師の形見は、今わたしの瞑想室の祭壇に置かれている。

◐再会の日まで

六月二十八日、四十九日目のこの日は特別なプジャが行なわれる日でもあった。多忙を極める麻原尊師はこのときやむなく弟子の一人を代理として派遣した。

ところで、彼の報告によると、そのときこんな不思議なことが起こったという。

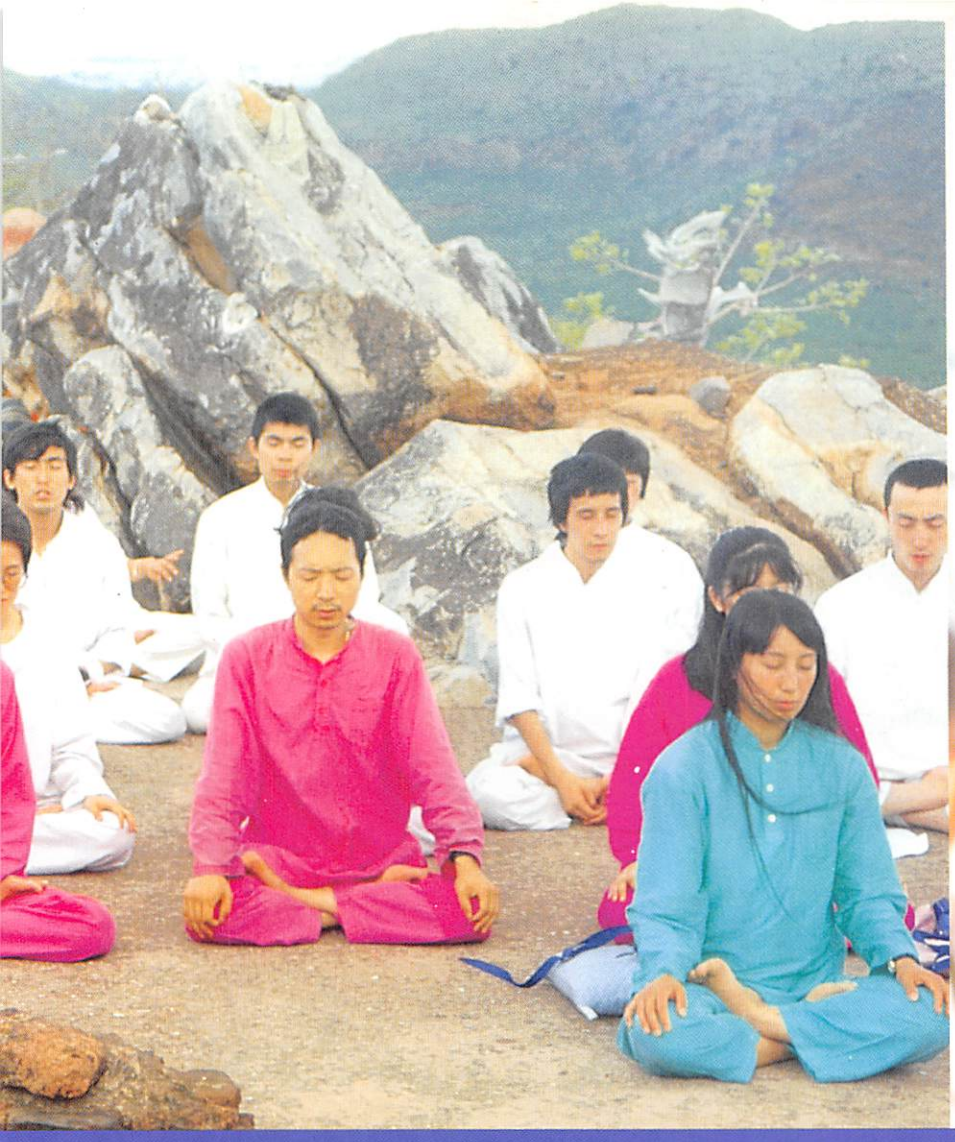
翌二十九日、寺に安置されていたリンポチェ師の遺体を弟子、秘書、その他の参列者が、不ぞろいな石でできている階段を上り、草の生えている細い道を通ってリンポチェの住居へと運ぼうとしているときである。まさに柩を玄関に入れようとした瞬間に起こった。

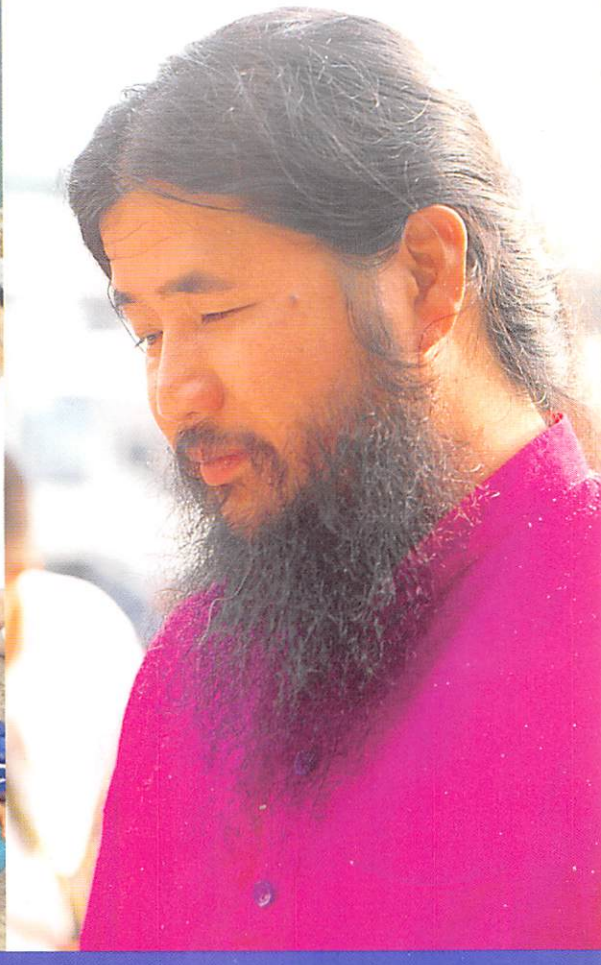
――空にまぶしいばかりに光り輝く太陽が、二つになり、そしてまた一つになった。それから太陽は美しい紫色に変わり、さらに赤紫に変わった。そして、その太陽の周囲を七色の虹が取り囲み、太陽はますますその輝きを増していった。そのとき下界は、金色の光に満たされていたのだった――。

やがて我に返った参列者たちは、たった今自分たちの見た光景を確認し合った。そして、そこに居合わせた全員がこの奇跡を目撃したのだということを知り、興奮に包まれたのだという。

偉大なグルであられたカール・リンポチェ師は、その波瀾に満ちた生涯を異郷の地で閉じた。彼の遺した翻訳事業をはじめ、数多くの業績は、これからも人々を真理へと導く助けとなってゆくことだろう。そして、リンポチェ師の魂は生まれ変わって再び救済活動を始めるのであろう。

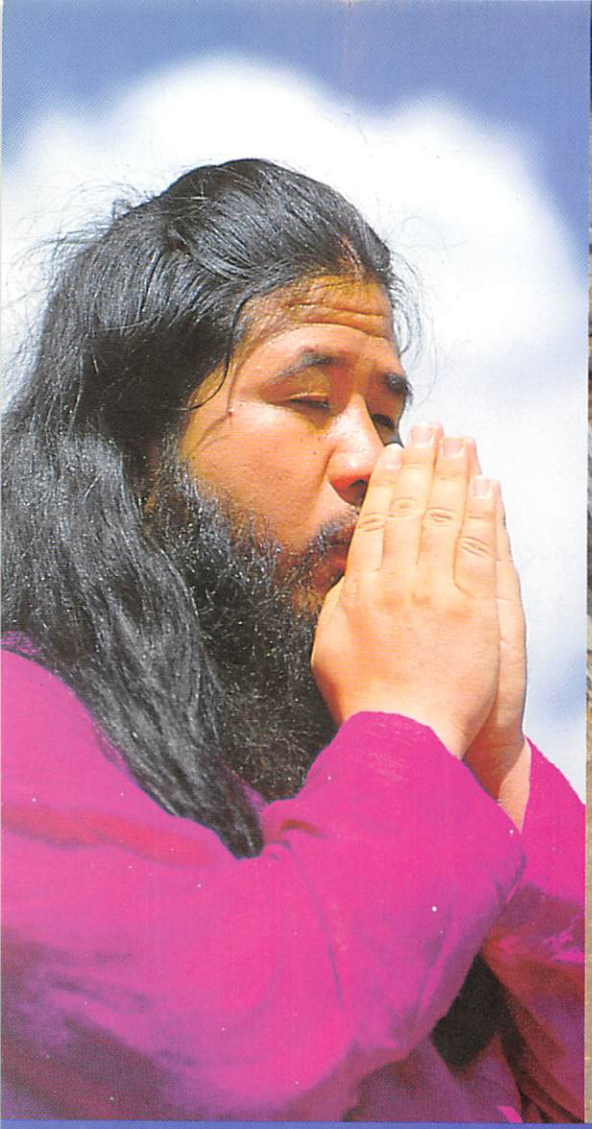
わたしは、カール・リンポチェのリインカネーション（生まれ変わり）と巡り合うことができるだろうか？　いや、いつの日か巡り合えることを信じたい。



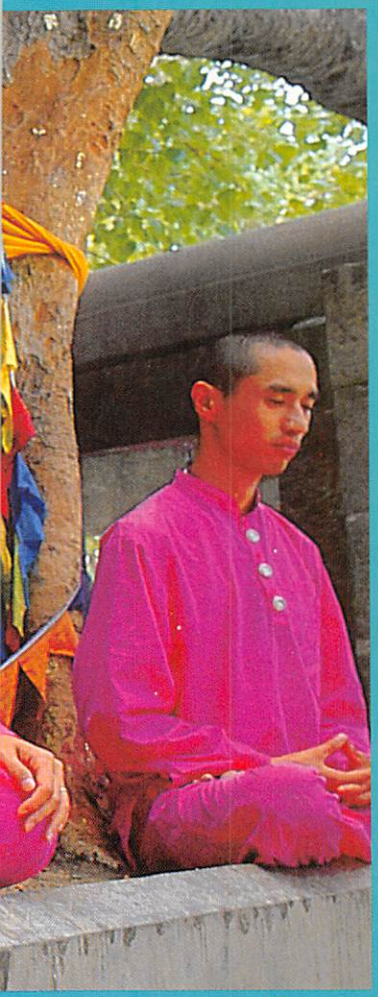


解脱者7人が語るサマディ体験

「生死を超えた その瞬間、わたしは 真実を知った！」



呼吸が停止し、
心臓も微拍動ないし停止してしまう……
これがサマディに入ったときに現われる
肉体的な特徴である。
しかし、前にも述べたとおり
この肉体的変化は付加的なもので、
むしろ生死を超えた瞬間の
内的体験が重要なのである。
煩悩を超えカルマを超えた瞬間に
体験するものこそが、
我々にとって真実の世界、
真実の体験だからである。
いったい我々はサマディの瞬間、
何を見、体験するのか?
ここでは生死を超越した7人の
解脱者の体験に耳を傾けてみたい。



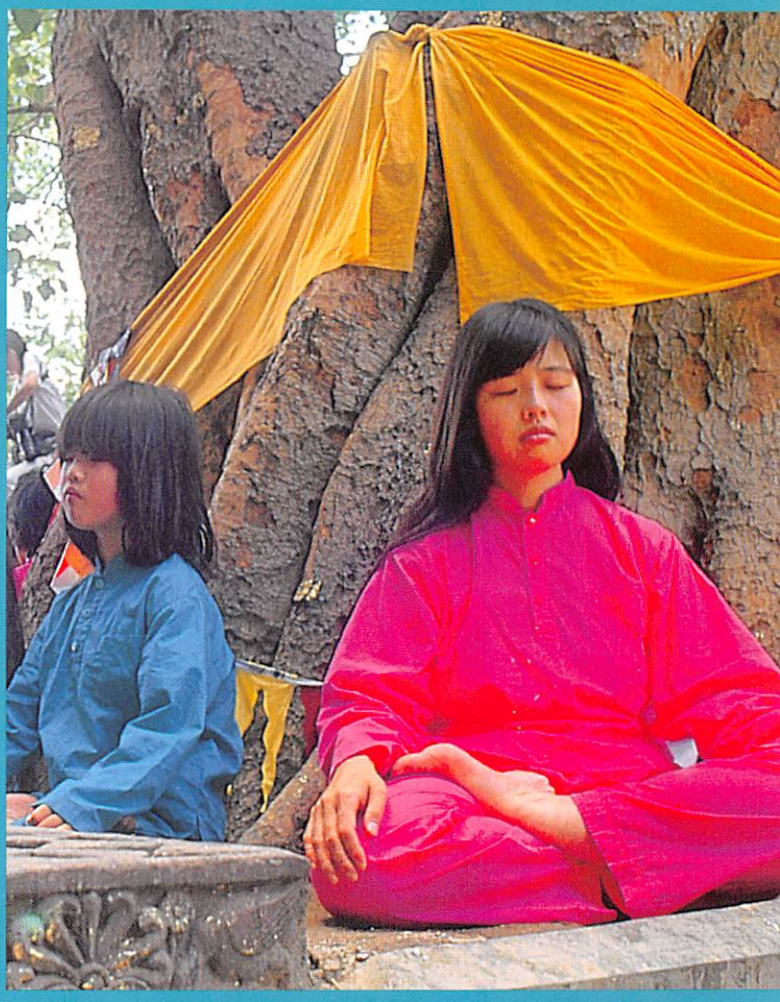
Yasodharā

間もなく、
この現象界のすべてがパーッと輝く
黄色一色に染まるようになりました。
目の前のプリントも畳もすべてが黄色なのです。
あまりに美しく輝いているので
修行場にいることを
忘れてしまっていたほどです。

自己の発する光に包まれて——幸福に包まれた"究竟の空の境地"

修行の道に入るや、わずか一年で個の完成を成し遂げてしまったヤソーダラー正大師。いかにも修行の天才らしく、サマディの体験も豊富である。ここに紹介する体験は、シャクティーパットでの影響を少なくするために参加した極厳修行でのものである。正大師の体験と別項に付記した仏典の「八勝境」の記述を比較

Samadhi Experience



■ ヤソーダラー正大師

大乗のヨーガの成就者。麻原尊師の弟子であり、妻でもある。1988年本格的な修行に入り、わずか1年あまりでクンダリニー・ヨーガ、マハー・ムドラーを成就。多くの人々に「シャクティーパット」を施し、91年、大乗のヨーガの成就を果たした。

青い空間があったので、そこに入ってみたのです。その瞬間、意識はその空間いっぱいに広がりました。実は、究竟の瞑想時に、アストラルで数時間後の未来に起こる出来事を見続けるという特殊な意識状態になったのですが、不思議と「この未来ヴィジョンも消さなければならない」という気がして払いのけたのです。そのときから今回の新たなる体験が始まりました。

雑念は全くなく、深く入って集中し続けることができました。意識が空間いっぱいに広がったまま集中できるというのは、体験してみないとわからないことでしょう。ただ、不思議なことに、意識は同時に現実レベルにもあるのでした。つまり、深く集中しながら、現実をも冷静に把握しているのです。

尊師が、

「それは、八勝境の中の第五勝境の段階だ。」

と教えてくださいました。

間もなく、この現象界のすべてがパーッと輝く黄色一色に染まるようになりました。目の前のプリントも畳もすべてが黄色なのです。あまりに美しく輝いているので修行場にいることを忘れてしまっていたほどです。次にその黄色はとても鮮やかな黄緑、そして青緑へと変わっていきました。これは色界に入っている状態だそうで、何日間も続きました。

同じころ、詞章やプリントが透けて宇宙が

してみると、正大師の体験が決して特異なものではないことがよくわかるだろう。

● 仏典どおりの体験

極厳修行が始まって二日後、アストラル世界の体験を打ち消したわたしは、究竟の瞑想中に意識を空間に固定することを覚えました。

向煩悩滅尽多学男たちよ、八勝境がある。それでは、八つとは何であろうか。

ある人が、内に形状・容姿の認知があり、外に形状・容姿が好み・嫌悪することを少し見る。それらに打ち勝ち、「わたしは気付き、わたしは見る」という、このような認知を有する者がいる。これが第一勝境である。

ある人が、内に形状・容姿の認知があり、外に形状・容姿が好み・嫌悪することを無量に見る。それらに打ち勝ち、「わたしは気付き、わたしは見る」という、このような認知を有する者がいる。これが第二勝境である。

ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が好み・嫌悪することを少し見る。それらに打ち勝ち、「わたしは気付き、わたしは見る」という、このような認知を有する者がいる。これが第三勝境である。

ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が好み・嫌悪することを無量に見る。それらに打ち勝ち、「わたしは気付き、わたしは見る」という、このような認知を有する者がいる。これが第四勝境である。

ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が青く、青い色彩で、青く現われ、青く輝くことを見る。たとえるならば、ウンマーの花が、青く、青い色彩で、青く現われ、青く輝くようなもので、またたとえるならば、両面が滑らかなバーラーナシー産の衣服が、青く、青い色彩で、青く現われ、青く輝くようなものである。このように、ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が青く、青い色彩で、青く現われ、青く輝くことを見る。それらに打ち勝ち、「わたしは気付き、わたしは見る」という、このような認知を有する者がいる。これが第五勝境である。

ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が黄色く、黄色い色彩で、黄色く現われ、黄色く輝くことを見る。たとえるならば、カニカーラの花が、黄色く、黄色い色彩で、黄色く現われ、黄色く輝くようなもので、またたとえるならば、両面が滑らかなバーラーナシー産の衣服が、黄色く、黄色い色彩で、黄色く現われ、黄色く輝くようなものである。このように、ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が黄色く、黄色い色彩で、黄色く現われ、黄色く輝くことを見る。それらに打ち勝ち、「わたしは気付き、わたしは見る」という、このような認知を有する者がいる。これが第六勝境である。

ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が赤く、赤い色彩で、赤く現われ、赤く輝くことを見る。たとえるならば、バンドゥジーヴァカの花が、赤く、赤い色彩で、赤く現われ、赤く輝くようなもので、またたとえるならば、両面が滑らかなバーラーナシー産の衣服が、赤く、赤い色彩で、赤く現われ、赤く輝くようなものである。このように、ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が赤く、赤い色彩で、赤く現われ、赤く輝くことを見る。それらに打ち勝ち、「わたしは気付き、わたしは見る」という、このような認知を有する者がいる。これが第七勝境である。

ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が白く、白い色彩で、白く現われ、白く輝くことを見る。たとえるならば、治療の星が、白く、白い色彩で、白く現われ、白く輝くようなもので、またたとえるならば、両面が滑らかなバーラーナシー産の衣服が、白く、白い色彩で、白く現われ、白く輝くようなものである。このように、ある人が、内に形状・容姿の認知がなく、外に形状・容姿が白く、白い色彩で、白く現われ、白く輝くことを見る。それらに打ち勝ち、「わたしは気付き、わたしは見る」という、このような認知を有する者がいる。これが第八勝境である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが八勝境なのである。

❖ 仏典に記されている「八勝境」❖

と尊師がおっしゃってくださいました。当時の日記をそのまま抜き出すことにします。自分では経験が乏しく、自己の状態を分析できるほどではありませんから。

見えてきました。これは天眼を使って見ているのだそうです。また、自分の内側から発されている光がプリントに射し込むこともありました。自分自身が光っているのだということをはっきりと認識したのはこのときです。

さらに五日経ったときには、

「もう少ししたら魂の究竟を体験するかもしれないな。」

“空”の世界の体験

◎九〇年七月十九日

――意識を深めていったらコーザルの光があったので、その中に意識を固定した。これも、意識を空間いっぱいに広げたまま集中している状態だ。しかし、本当はもっと明るい空間があるのだと思う。ここには白い光と小さな赤色などの光の粒子が存在している。究竟の瞑想全体で一時間二十分だったので、おそらく一時間くらい経ったときのことだと思う。急にヴィジョンを見出した。息苦しくなり、早い鼓動が。その後は、周囲がうるさく、深い意識状態へと持っていけなかったので、浅いところに意識を置いたまま。

「三昧に入って瞑想に入っていないから外の音で動いてしまう。」

と尊師より注意あり。

現実でも（瞑想しなくても）光に包まれて至福の状態を味わう。尊師に「喜・軽安・楽のどれだ?」と聞かれたわたしは、「楽」と答える。このとき意識ははっきりしているし、体も固定されている。

◎七月二十日

五十分から一時間くらい深くそこ（光の中）に固定（コーザル世界はまさに“止まっている”という感じ。現象界での時間は後で計算したものです）。周囲の音も遠くに聞こえ、心に響かない。ゆっくりと意識を戻した。途端に足が痛くなる。もう一度入らなければも

思った。また、今のわたしは、完全に善性のエネルギー状態となっているとのこと。

◎七月二十一日

意識を固定する場所を探した。アナハタ・チャクラから光が射して辺りを照らしている。漏れ出ている光をたどって、アナハタ・チャクラに入った。白い光の世界である。三十分ほどそこにとどまる。でも、あまりいいところじゃないなという印象。意識を現実に戻してから、もう一度光の空間に入った。次に戻ったとき、ふと、自分から入る世界を探すのではなくて、世界を近付けようと思った。すると光の世界が一面に広がり、意識も体もなくなってただ漂った（ただし、それを認識している別の意識が存在している）。

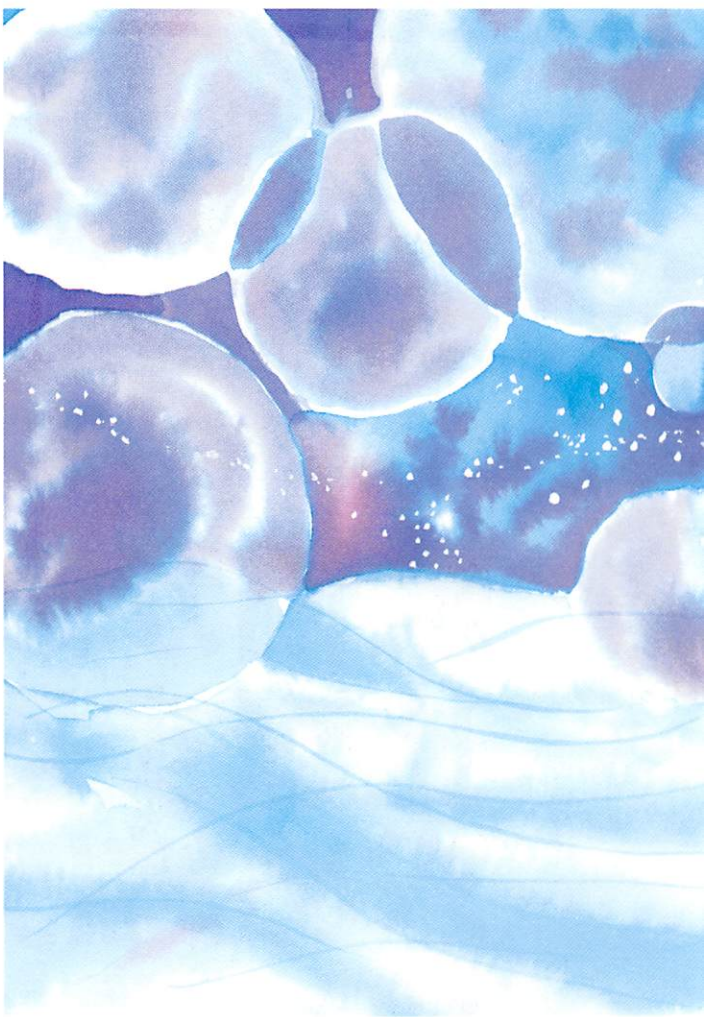
◎七月二十二日

どこを探しても意識を固定できるところがない。古代エジプトの壁画のように、サハスラーラ・チャクラの上には、球体があるのかな、と思って、そちらに意識を持っていく。すると引っ張り込まれるかのように、スルッとサハスラーラ・チャクラに入ってしまった。金色の光。エネルギーが強いせいか波にもまれているようで、とてもゆったりできるようたないな、と思って入ろうとするがなかなか入れず、手頃なところにあったオレンジ色の光の中に飛び込んだ。しかし、そこでは竹刀がバシッバシッと畳を叩く音（究竟の瞑想中に寝込んでしまう人を起こしているのです）にビクッとする。尊師に、

「そんなところに入ったら、これまでの修行が台なしになるぞ。」

と叱られる。尊師はコーザルの光の色の意味を知り尽くしておられるんだな、とつくづく

な感じではない（微細な金色の粒子が波のように動いている）。意識はちぢこまっておたしていた。それでも、しばらくそこにいるようにした。ところが、気付いたときには、既にはじき飛ばされてしまっていた。はじき飛ばされた先が結構深い光の中だったので、そのままいることにした。後で尊師にお聞きしたところ、わたしがサハスラーラ・チャクラだと思ったところは意思鞘で、心の動きが一切なくなったときに静かになるということだった。



「煩悩がない」「雑念がない」「意識が鮮明」「心は満ち足りて」

――このようにわたしは、空（コーザル世界）にとどまる体験を多くしたのでした。この修行が寂静に到達することを目的としていたのですから、当然といえば当然なのですが、尊師なくしてはこのステージに到達することなどとてもできなかったことでしょう。

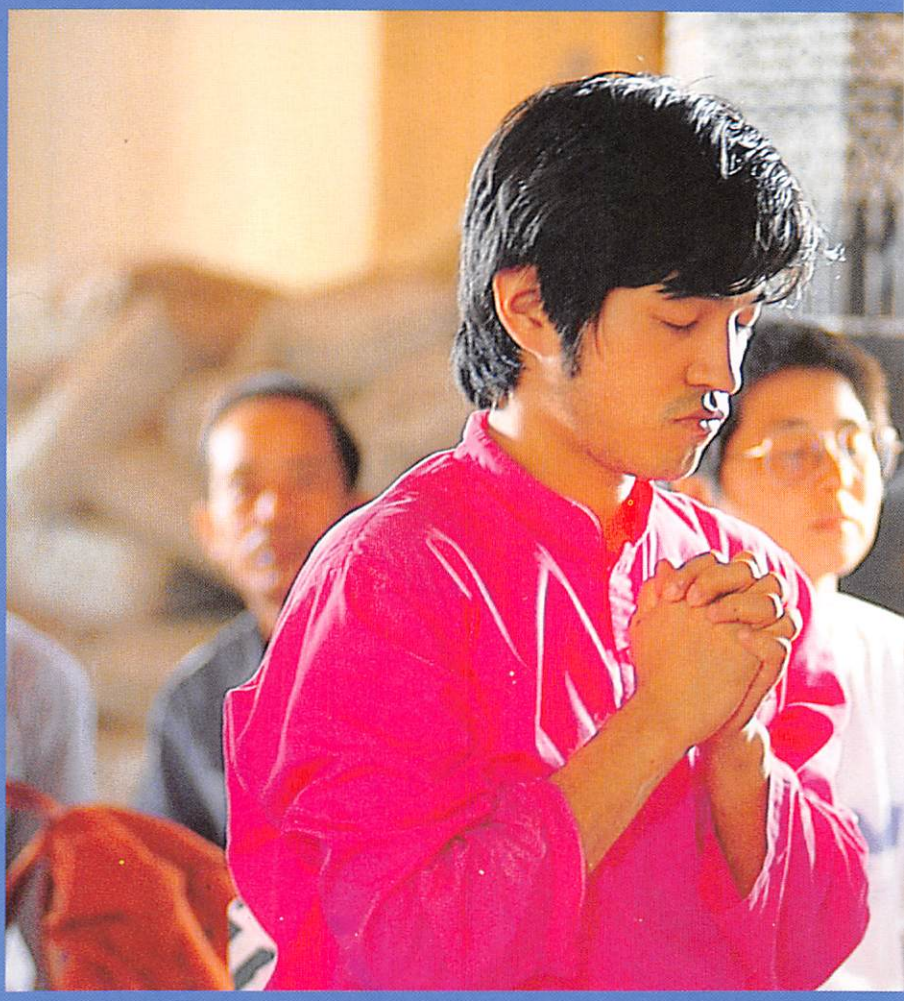
空の境地は、とても言葉では表現できません。煩悩がなく、一切の雑念がなく、意識は鮮明で集中し続けている、心は満ち足りて幸福の中に安住している、自分の発する光に包まれている（尊師にも「完全に解脱者の光になってきたな」と評されたものです）――この終極にマハー・ニルヴァーナが存在しているのだということに、もはや疑いはありません。

しかし、マハー・ニルヴァーナに入るためには、まず第一に、この小乗の完成で得た自己の幸福を破壊しなくてはならないのです。他の魂の苦しみを背負う大乗の扉を開くために。そして、それこそが今のわたしに与えられた課題なのです。

Maitreya

性欲について思索を始めた。
その瞬間だった。性欲がズバッと落ちた。
続けてプライドについて瞑想した。
すると、思索を始めてすぐに、
プライドに対応するチャクラのあたりに
何かがチカッと光って消滅した。
そして強いエネルギーが昇り、
目の前が光で満たされていった。
「煩悩が瞬間的に滅するとは、このことか！」
それまでどうしても到達できなかったステージだった。
極厳修行のときも、その後の修行でも、
一回も経験することができなかった。……(中略)……
しかし、このとき、
「煩悩は本当に滅することができるんだな」と、
わたしは実感した。
それは、わたしが修行を始めてからずっと求め続け、
初めて体験した〝本当の喜び〟だった。
煩悩を満たすことによっては絶対に得られない、
自分のすべてが喜んでいる状態だった。

煩悩が瞬間的に止滅する――求め続けていた〝解脱〟の瞬間



■ マイトレーヤ正悟師

元宇宙開発事業団勤務。1987年クンダリニー・ヨーガ、89年マハー・ムドラーを成就する。論理的な思索力に特に優れている修行者。ホーリーネームの「マイトレーヤ」は伝説の未来仏の名に由来。

精神世界に興味のある人ならだれしもあこがれる〝悟り〟。実は、この最高の境地も、我々はサマディによって得ることができるのである。つまり、サマディで知る真実の世界の経験が、この現象界といういわば幻影にしばられている我々の意識を、迷妄から解放してくれるわけである。

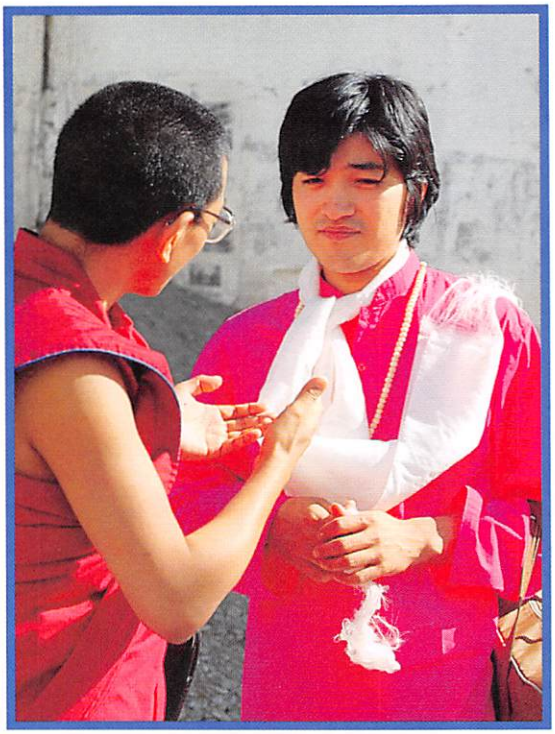
以下はマイトレーヤ正悟師が八九年にヒマラヤで獲得した最高の境地、解脱の瞬間の貴重な体験談である。

●聖なるヒマラヤにて

ウッタルカシー――そこは、ヒマラヤにあるこぢんまりとした町だった。近くにはガンジス川が流れている。上流に近いので水は澄み切っていて、太陽の日を受けると水晶のようにきらめく。

わたしたちは、町中から少し外れて、質素なホテルに荷を降ろした。そこで、大師（編集部注＝クンダリニー・ヨーガ成就者の称号）は一人一部屋与えられ、それぞれ瞑想修行に打ち込むこととなった。前回の極厳修行とよく似ているが、食事のときには外に出られるし、部屋も広いからプレッシャーは格段に少ない。

しかし、今回の修行には、一五〇〇メーター以上の高地であるということと、特殊な漢方薬を調合し粉末状にした「丹」という二つの負担があった。丹は、エネルギーが強化される反面、非常にまずくて消化もされにくく、大きな精神的負担になった。修行を早く進めるために、尊師が考えられたものだった。



念を強めて

一回目の丹を食べた。その後瞑想したが、丹のせいで腹が重たい。意識は不鮮明。三回ほど意識が飛ぶ。尊師のお言葉によると、丹によって上昇する風のエネルギーが強いからだという。

しかし、風エネルギーが強く上昇するため、潜在意識に入るが、同時に煩悩についての思索もしにくくなって、ついつい意識が飛んでしまう。尊師は「風エネルギーに意識が付いていっていない」状態だとおっしゃった。

二回目の丹を食べ、瞑想する。しばらくすると、尊師がわたしをお呼びになった。

「どのくらい思索できたか。」

「三十分くらいできました。その後また飛んでしまいました。」

「三十分できることはよいことだ。三十分の四倍、二時間になったらいろいろな変化が起きる。あと何日かの状態だ。」

「時間はどうやって延ばしていくんですか。意志の力ですか。」

「意志ではない。念だ。」

意志とは、欲求を満たそうとする心のある方向での働き、念とは修行を成就しようとする心の働きで区別される。

念という言葉は心に響いた。

三回目の丹。通常丹は一日一回だが、これで一日半の間に三回食べたことになる。尊師は「加速実験」といわれていたが、早く成就するため、限界いっぱいまで丹を使おうということらしい。食べた後瞑想していると、下痢をもよおしてきた。

しばらくして、尊師から呼ばれた。

「吐いたか。」

「いいえ。下痢を三回しましたが、吐き気はありません。」

「すごい。加速実験に生き残ったのはお前だけだ。他の大師はみんな吐いてしまった。アナハタなどでエネルギーの流れが詰まっていると吐いてしまうんだ。それで瞑想状態はどうだ。」

Samadhi Experience

「明瞭な意識と不明瞭な意識が交互に来るといった感じです。不明瞭なときは眠りの中にいつつ思索しているといった感じです。」

「はっきりした意識というのは、今までのはっきりした意識と違うんじゃないのか。」

「はい。そう思います。」

「意識状態によっては明日終わるかもしれないよ。」

尊師の最後の言葉に少し緊張しながら、わたしは自分の部屋に戻った。

●待ちこがれていた解脱の瞬間

午後〇時ちょっと過ぎ、十七日になったばかりのときに、再び尊師に呼ばれる。

「もう〇時になったからいうが、今日終わるか、明日終わるかだ。それはお前の念次第だ。」

とおっしゃった。

その後、再び丹の時間がやってきた。つらい。もう少しで吐きそうだ。どうにかこらえて部屋に戻るが、胃がもたれた感じだ。

瞑想に入った。しばらくすると、眠気が襲ってきて、耐えられなくなった。

「眠るな！　今が一番大切なときだ。」

わたしは自分を励ました。

「苦しいが頑張らなくてはいけない。念だ！　念を強めろ！」

すると、いつもと違う非常に気持ち良い状態に入った。大変楽で静かな状態だ。意識は深い感じなのに、すごく鮮明だ。呼吸もほとんどしていない。

「これが『楽』の状態か。」

ふっとそう思う。

瞑想課題について思索し始める。まず、性欲について意識を向けた。具体的にイメージすると、性欲のエネルギーが上昇してくる。明るかったヴィジョンが暗くなる。そして、性欲について思索を始めた。その瞬間だった。性欲がズバッと落ちた。

続けてプライドについて瞑想した。すると、思索を始めてすぐに、プライドに対応するチャクラのあたりに何かがチカッと光って消滅した。そして、強いエネルギーが昇り、目の前が光で満たされていった。

「煩悩が瞬間的に滅するとはこのことか！」

それまで、どうしても到達できなかったステージだった。極厳修行でも、その後の修行でも、一回も経験することができなかった。

前回の極厳修行でクンダリニー・ヨーガを成就したが、それは修行が完成したというわけではない。特に支部での救済活動など、他人の影響を強く受ける環境では、煩悩を押さえきれずに何度となく振り回され、自分が自分

の思うようにならず苦しみ続けてきた。

しかし、このとき、

「煩悩は本当に滅することができるんだな」

と、わたしは実感した。それは、わたしが修行を始めてからずっと求め続け、初めて体験した〝本当の喜び〟だった。煩悩を満たすことによっては絶対に得られない、自分のすべてが喜んでいる状態だった。

しばらくして、尊師の部屋を訪れる。今、かなり意識が鮮明になっていて、もう終わりは近いということである。さっきの体験についてお話しすると、

「それは、マハー・ムドラーの成就の状態だ。」

とおっしゃられる。尊師の言葉のニュアンスは、「まだ成就とはいえないが、今の状態をより確実なものにしていけばよい」といった感じに受け取られた。もっと頑張らなければいけない。

尊師にご挨拶をして、わたしは立ち上がった。喜びと緊張の両方の感情に包まれながら、部屋を出る。そういえば、今日はわたしの二十七回目の誕生日だ。きっと、この日は人生の重要な節目となるに違いない。

●「捨てる」の意味

お昼過ぎ（十二時四十分）、食事の際に、尊師に朝の体験の報告をした。すると、尊師は、

「マハー・ムドラーは終わっている。あとはどのくらいの完成度にもっていけるかだ。そのためには、この前いった幅を広げる瞑想をしなさい。どうせ空無辺処定に入っていかなきゃならないんだから。」

といわれた。わたしは、尊師のお顔を見ながら。

「修行をやっていて、本当に良かったと思います。」

と心の底からいった。

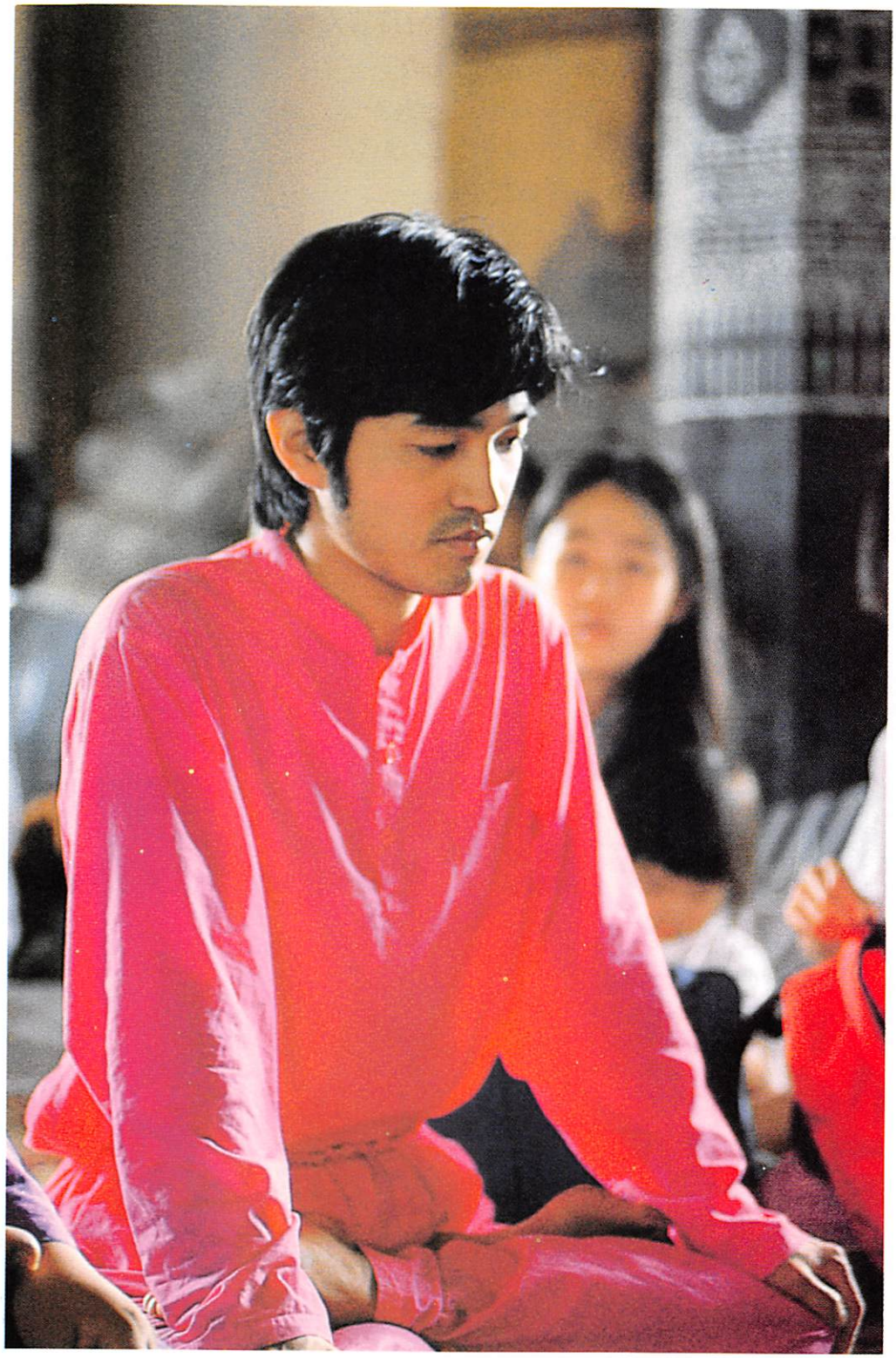
朝の瞑想。いつものように気持ち良い状態に入る。煩悩について、その対象を具体的にイメージしても、性欲も食欲も、何もわいてこない。非常に安定していて、そのままの状態に漂っていたいという感じだ。しかし、人と触れ合い、救済活動をすれば、この状態は失われる。瞑想による喜の状態にさえ執着せず、救済活動に取り組むことが、尊師のいわれていた「捨てること」の意味合いではないだろうかと思った。

すると、体の感覚が鈍くなって、座高が半分くらいになったような気がした。はっきりとした感覚があるのは、頭と手とお尻の部分だが、頭からお尻までの長さがおなかまでの長さくらいに感じた。少し横にも広がったよ

うな感じだ。肉体という外枠をはずれ、意識が広がりかけているような感じだ。「これが、尊師のいわれていた空無辺処定の状態の入り口かもしれない」とわたしは思った。そして、「修行というのは終わりがない。もっともっと奥へ、先へ行こう」と決意した。

以前、尊師から六つの極限についての詳しいお話しがあったことがある。そして、それには、八つの解脱の段階があるということだった。それによれば、今のわたしの状態は第三解脱、第四解脱に相当する。この尊師の説法を聴き、わたしはマハー・ムドラーを遥かに越えて続く修行の壮大さと神秘を感じた。そして、自分の修行意欲が高まるのを感じた。

今後は、マハー・ムドラーの上に遥かに続くステージをできるだけ早く与えていただけるよう、全力を尽くそう。

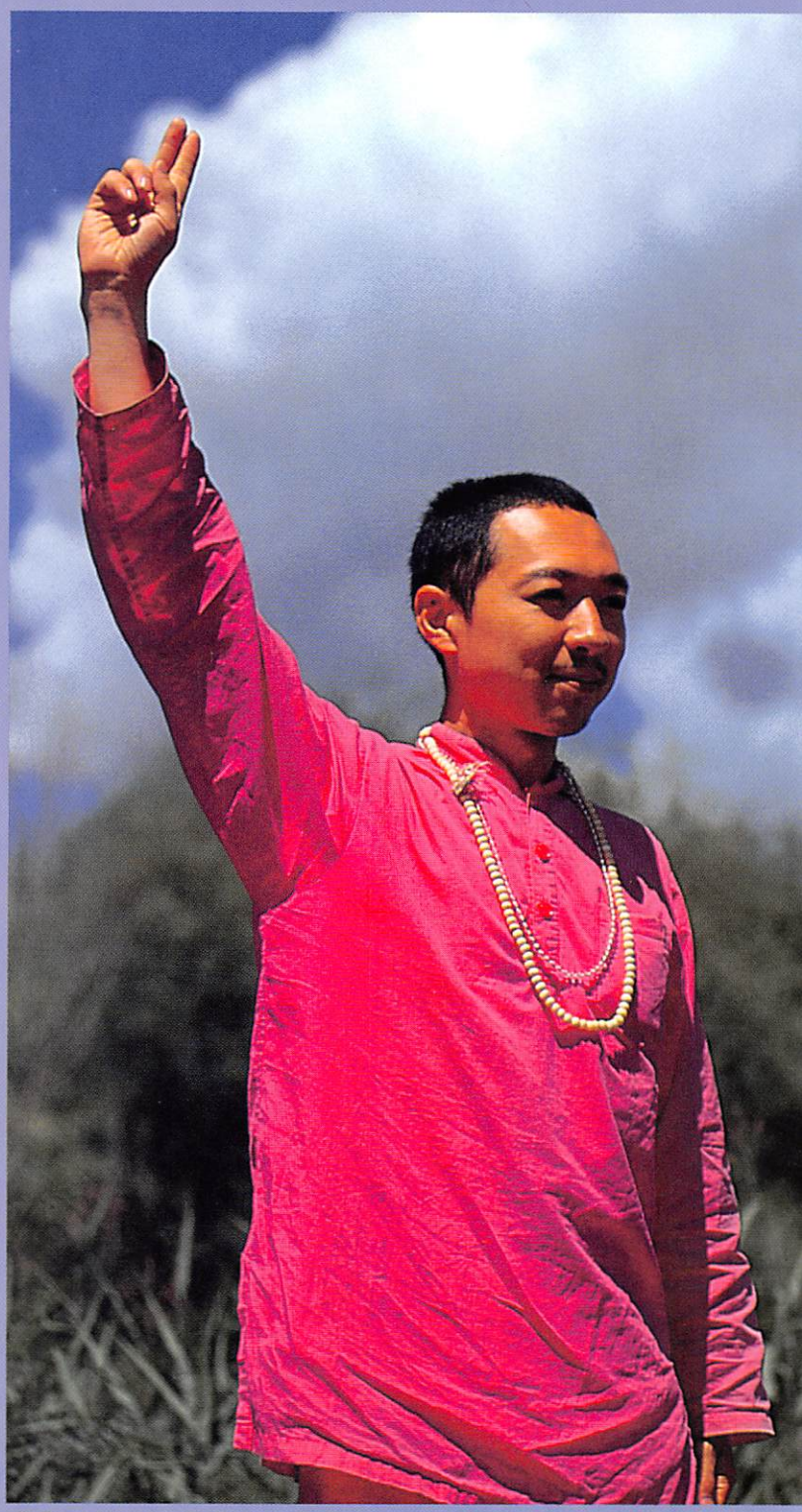


こらえきれなくなった招待客たちは
わたしに詰め寄りました。
そして、彼らの中の一人が
手にした杖のようなものから
深紅の光線が放たれ、
その真っ赤な光線が
見事にわたしの首を撃ち抜きました。
わたしはその場で
死んでしまったのです……。

サマディで知る異世界「阿修羅の世界の発明家」

■ マンジュシュリー・ミトラ正悟師
元神戸製鋼勤務。1987年から本格的修行の道に入る。88年クンダリニー・ヨーガ、89年マハー・ムドラーを成就。科学的才能に長けている。

Samadhi Experience

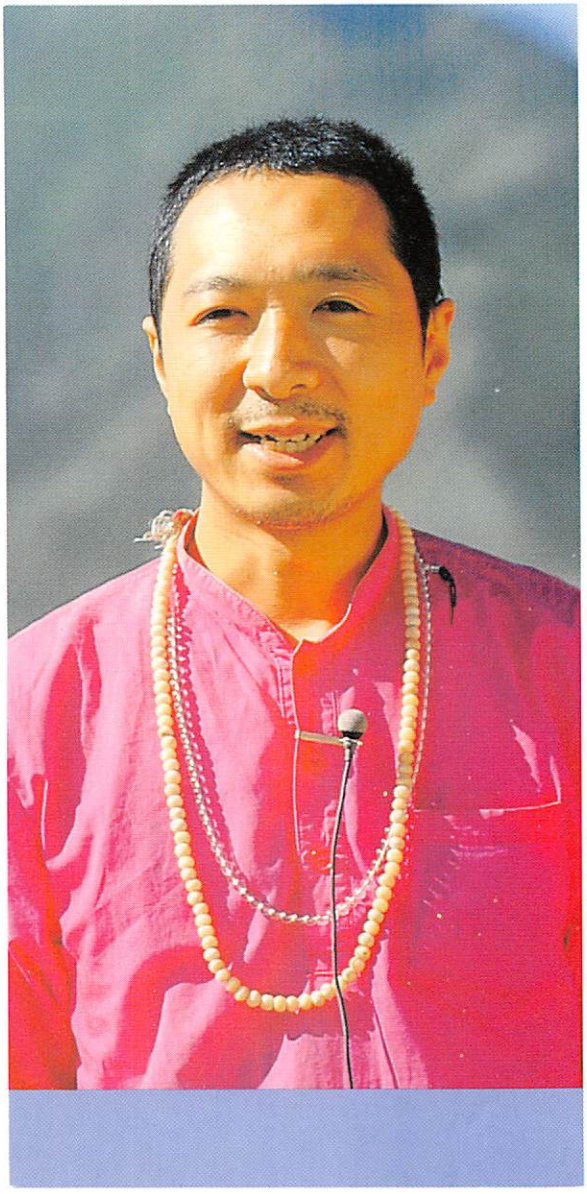


Mañjuśri Mitra

サマディによってすべてを知った解脱者たちは、人間界以外の様々な世界で活動する身体（別項参照）を得て、この世界の構成を詳しく知ることができる。以下はアストラル世界での意識堕落天（阿修羅界）の体験である。この世界は我々の住む人間界を含む欲六界の上から二番目の世界である（ちなみに、人間界は三番目）。

❖異世界で働く五つの身体（五法身）

- 変化身……下位アストラル
- 法　身……下位及び中位コーザル
- 報　身……上位（純粋）アストラル
- 本性身……上位（純粋）コーザル
- 金剛身……マハーヤーナ



●意識は肉体を離れて

今年（九一年）の一月中旬、わたしは阿蘇山の麓、オウム真理教シャンバラ精舎にとどまっていました。どこにいてもそうするように、わたしは、ここ阿蘇においてもワークの合間を縫って瞑想を行なっていました。四無量心の瞑想です。

やがて瞑想が深まり、わたしの意識は肉体を離れ、アストラル世界へと入っていきました——。

そこは三階建てのビルディングでした。中はほとんど空っぽで、ガラーンとしていました。わたしはそのビルの一角で何か研究に没頭していました。ある装置を作っていたのです。やっとのことで装置が完成した場面からストーリーが始まりました。これはどうやらわたしの過去世の一つのようです。

わたしは手にしたリモコンのスイッチを入れました。このリモコンは非常にコンパクトなもので、手のひらの中にすっぽり収まる、ちょうど百円ライターくらいの大きさです。これは装置の末端で、これ以外に本体装置があるはずなのですが、周囲には見当たりません。きっと巨大な装置だとは思うのですが、目に見える範囲には置いてありませんでした。

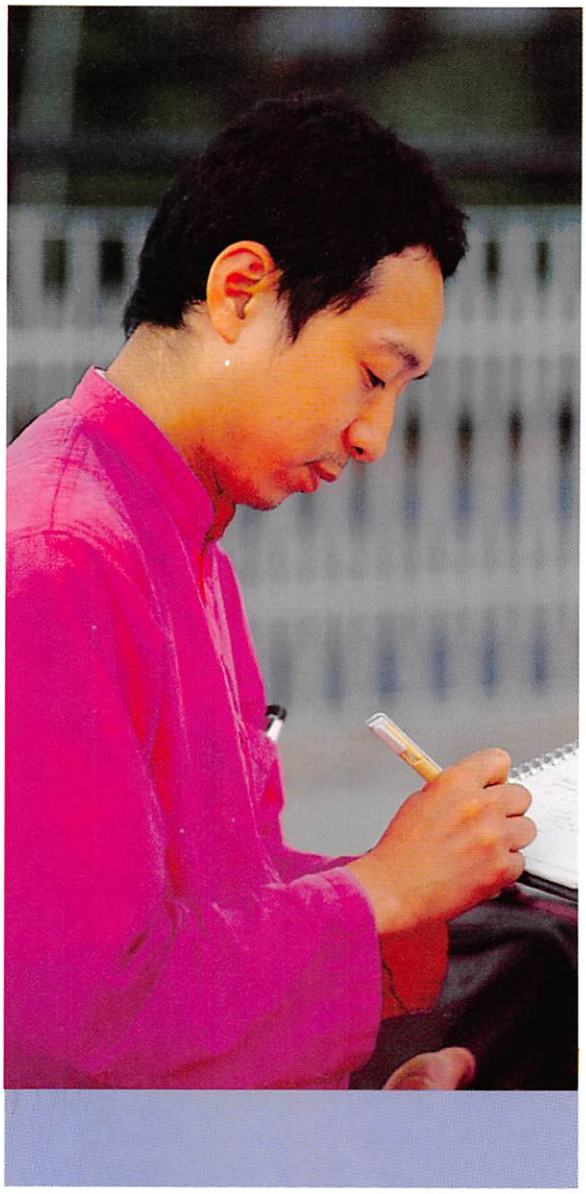
さて、スイッチを入れると目の前に立体映像が浮かんできました。いえ、目の前だけでなく、ビルディングの中の至る所にいろんな映像が浮かび上がったのです。わたしが研究開発していたのは、どうも立体映像を浮かび上がらせる装置のようです。……少なくともわたしはそのつもりでした。こうして、浮かび上がった立体映像によって、空っぽだったビルの中は、美しい衣類や小物類など、様々な珍しい品々でいっぱいになりました。

もう一度スイッチを押すと、またまたヴィジョンが変わります。今度もまた、先程の様子に勝るとも劣らぬ、珍しく面白そうな品物が並び、ビルディングの中は大変魅力的なデパートのようでした。

わたしはその中の一つ、目の前にある直径二十～三十センチメートルくらいの白いリング状の物に手を伸ばしました。すると、なんとそれに触ることができるのです。これにはわたしの方がびっくりしました。リモコンのスイッチを押して辺りの様子を変化させましたが、手にしたリングは消えずに残っています。

「そうか、自分では立体映像を浮かび上がらせる装置を作ったつもりだったけど、実はこれは空間からアイテムを取り出す装置なのだ。」

わたしはこのとき、功徳の理論を知らず、この科学的な装置がわたしに幸福と繁栄をもたらすものと思い、すっかり有頂天になりました。



●魅力的な光景が現われない！

わたしは人々を招待することにしました。この世界の住人は地球人と同じような容姿をしていますが、着ているものは現代のわたしたちとは少し違い、古代ギリシャかローマのような、ゆったりした薄くて軽い生地でできた服を着ています。

わたしの招待を受けた人たちは、心ゆくまで「ショッピング」を楽しみました。彼らは手にトレイのようなものを持ち、各々が欲しい物を欲しいだけ手に入れることができました。彼らも満足し、わたしも大満足でした。

リモコンのスイッチを何度も押して、自在に品物を取り出し、精いっぱいサービスしました。

しかし、やがてスイッチをいくら押しても、魅力的な光景が現われなくなりました。招待された人たちは「何だ何だ」という感じで、いぶかしがりました。わたしは、

「まあ、ちょっと待ってください。じきに良くなりますから。」

と弁解をしてスイッチを押しました。しかし、ちっとも魅力的な品物は出てきません。それどころか、ビルの内部の光景はだんだんと悲惨なものになっていきます。

「一体どうしたんだ。」

彼らはだんだんと不満を示し始めました。

わたしはなぜこうなるのか訳もわからず、一生懸命弁解しながらスイッチを押しました。

ピッ……。スイッチを押すと壁にひびが走ります。ピッ……。もう一度スイッチを押すと天井にひびが、さらに押し続けるとビルの一角が崩れ、エレベーターは落下し、エレベーターの中に乗っていた人は落下の衝撃で死んでしまいました。

さあ、いよいよこらえきれなくなった招待客たちはわたしに詰め寄りました。そして、彼らの中の一人が手にした杖のようなものから深紅の光線が放たれ、その真っ赤な光線が見事にわたしの首を撃ち抜きました。わたしはその場で死んでしまったのです……。

その生で修行の経験があるのか、それとも過去世からの修行によるものか……。首を撃たれて死ぬよりも一瞬早く、わたしの意識はその体から抜け出しました。そして離れた所から自分が打ち抜かれるのを見たのです。

その後、その建物は廃虚のまま保存され、そばに惨事を憂える碑が建てられました。碑には、

「この過ちを二度と繰り返すことのないよう……」

というような文面が刻み込まれています。美しい湖のほとりでした……。

●エレベーターは功徳の象徴だった

瞑想から肉体に戻り、「ああ、自分は阿蘇にいたんだな。今のはアストラル体験だったんだ」と納得し、安堵に胸をなで下ろしました。そして早速、今見たアストラル・ヴィジョンを尊師にお話ししました。

「位相空間を利用したのだろう。エレベーターはどうなった?」

まだ、わたしがエレベーターの話をしていないのに、尊師はこのように尋ねられました。

「止まっていたエレベーターが落ちました。」

「やっぱりそうか。徳がなくなったんだな。」

つまり、このアストラルヴィジョンにおけるエレベーターというのは、功徳の象徴であり、単なるエレベーターではなかったのです。非常に示唆的だと思いました。

徳といえば……。今考えればよくわかるのですが、スイッチを押せども押せども素敵な光景が現われず、むしろ悲惨な光景が展開していったのは、わたしをはじめ、招待された客たちの功徳がすり減っていったからだと思います。しかし、そのときのわたしは無智に覆われ、功徳の理論を知らず、なぜ魅力的な光景が出てこないのかを理解できませんでした。そして、悲惨な光景が出てきても、それを功徳が減ったためとは考えず、偶然そのような光景が現われるのだとばかり思っていました。

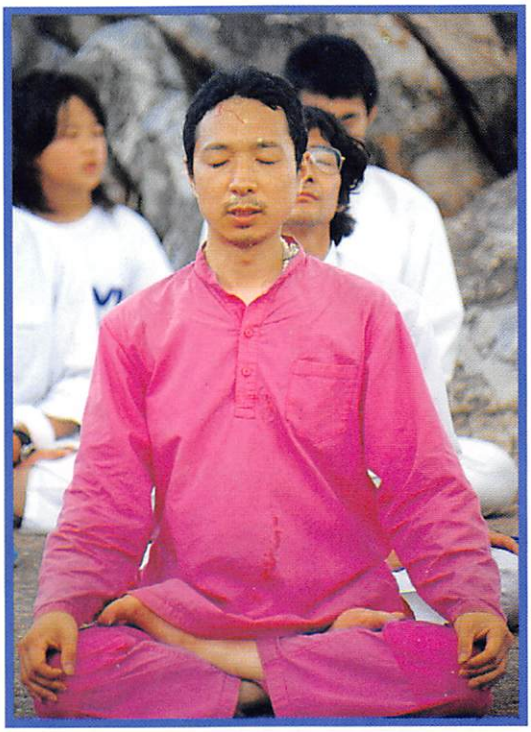
実際は、その装置はその人の功徳に応じた世界と呼応して、今いる世界と、呼応した先の世界とをつなぐ装置だったのに違いありません。そして、最初は高い世界と呼応し合ってつながっていたのが、功徳が減るにつれ、だんだんと低い世界につながるようになっていったのでしょう。

徳を積まずに欲だけを満たせば、このような惨事が起こるのは当然です。現代の地球の文明が遠からず破局を迎えるのが実感をもって理解できました。

なお、このときの世界は科学が進んでいること、カルマの返りが早いこと、徳があまりないこと、および、周りの美しい風景などから阿修羅界であると思われます。

アストラルで会った悲しそうな子供たち

さて、もう一つ、現象界の裏側にあるアストラル世界での体験をご紹介しましょう。これもマハー・ムドラーを成就してからのことです。



そのときわたしは子供部屋を自分の修行場として使っていたのですが、そこで瞑想修行をしていたときに、完全に意識が分離したのがわかりました。座って瞑想している自分と、それを見ている自分がいて、「これは体から抜けられるな」と思ったらやっぱり抜けられたわけです。

それからちょっと歩いてみました。いつもなら壁などもすんなり抜けられるのですが、そのときはコツンと当たったのです。「あれっ、抵抗があるな」と思って、改めて床をよく見ると、もう一層下のレベルにも床がありました。そこで下のレベルの入っていって歩くと今度は壁も自由にすり抜けることができるのです。

さて——。わたしはサティアン・ビルの方へ行こうと思いました。

そのとき、だれかが足にしがみ付いてきたのです。振り向くと、何人かの子供がわたしの足にしがみ付いていました。その力が相当強く、もがいても逃げられませんでした。子供たちの顔を見ると、みんな悲しそうな顔をしています。

わたしのアストラル体験の場合、いつもなら怪獣やギャングが登場してきて、そいつらを（失礼！）蹴散らしたりすることが多いのですが、そのときは子供たちの寂しげな顔を見たときに、何を思ってか、わたしは子供たちの額に触れ、シャクティーパットを施したのです。

すると、子供たちはみんな解放されたように明るくなり、満足してスーッと離れていきました。わたしはまだシャクティーパットを施した経験がないので、自分でもなんでそういうことをしたのか不思議に思いました。もしかしたら、わたしの過去世の経験が出てきたのかもしれません。

ところで、強くしがみついてきた子供たちの様子から、わたしは彼らが餓鬼界の住人ではないかと思い、

「これは餓鬼ではないでしょうか。」

と尊師にお伺いすると、

「それは霊であろう。」

と教えてくださいました。

人間は、死ぬと四十九日の間に次の性に転生していくのが通例ですが、非常に執着するものがあったりして、転生しきれずにバルドーに残されている魂もいるのだそうです。わたしが見た子供たちもそうだということでした。そのとき修行していたのが子供部屋だったということもあって、そういう子供の霊がそばに寄ってきたのでしょう。

いかがでしたか。今回ご紹介したこのようなアストラル体験は、正しい教えを具足した正しいグルに師事し、正しい修行法を実践するならば、だれにでも起こり得ることなのです。そして、この物質でできた世界以外の世界があり、わたしたちの目に映るこの世界は、他の多くの世界の中の一部でしかないんだということを認識することは、解脱・悟りに到達するためにも欠かせない大切な経験なのです。

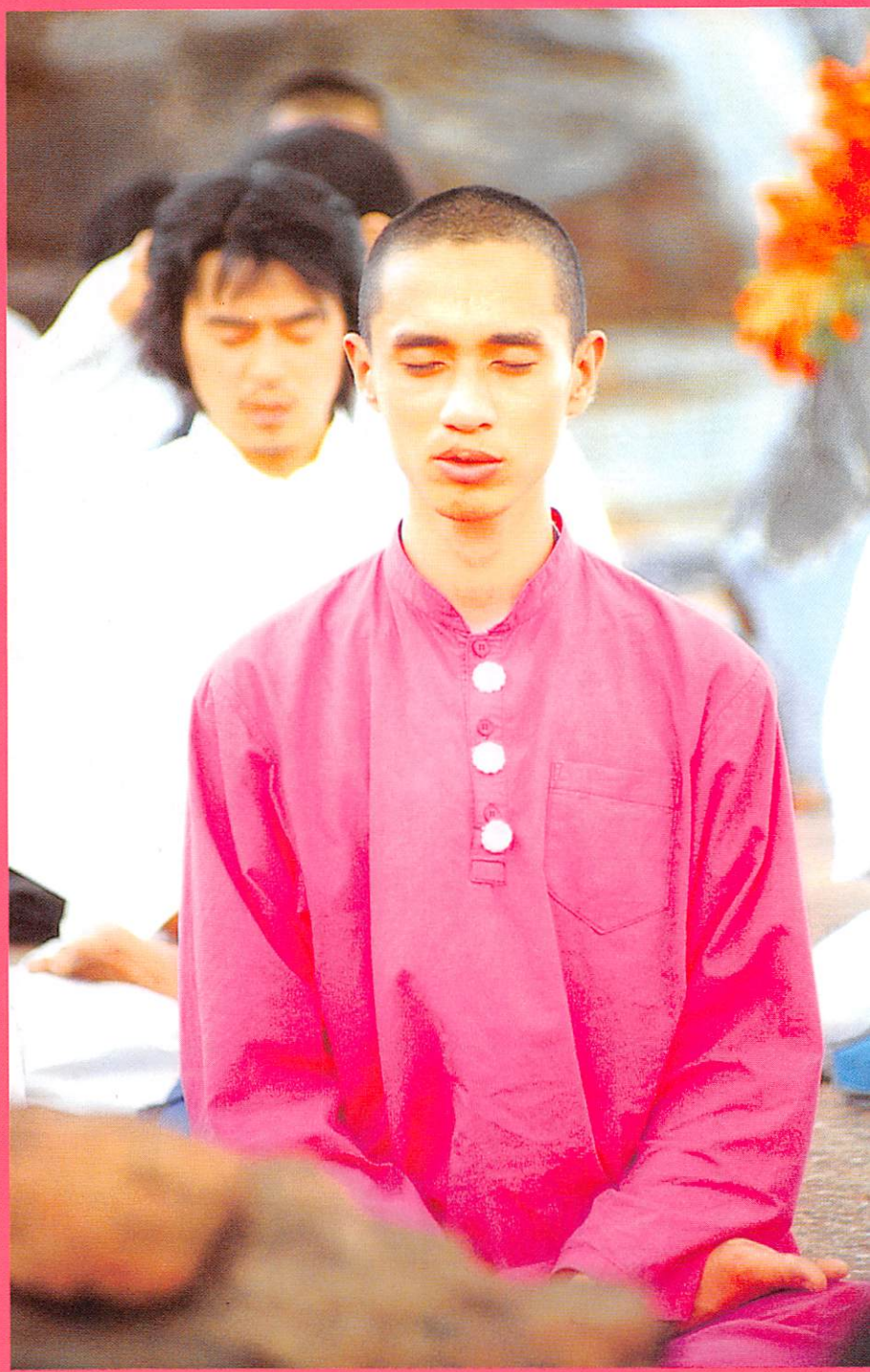
さあ、皆さんも修行の門をノックしてみませんか。

見えない世界の不思議な神秘体験

「もう一人の自分、もう一人の世界」

意識の分化により、我々が存在するこの世界と別の世界に同時に意識が存在している……。にわかには信じられないことだろうが、これが解脱者と呼ばれる人々が身につけている力であり、仏教などの教えで「この世界は心がつくり上げた幻影」とされるゆえんでもある。ここに紹介するのは、まさにこの意識の分化の瞬間を克明に記した体験談である。

このとき、
肉眼は下を向いているのですが、
別の「眼」で自分自身と
隣の人の姿と周りの状況も見えるのです。
隣の人の息遣いとか、声も聞こえました。
さらに別の「わたし」は
非形状界の光に没入して、
その光を見ているのです。
光は確か黄色で、
ちょっと無明を表わす黒が
あったと思います。
そして、意識は非常に鮮明でした。



Milaraspa

■ミラレパ正悟師

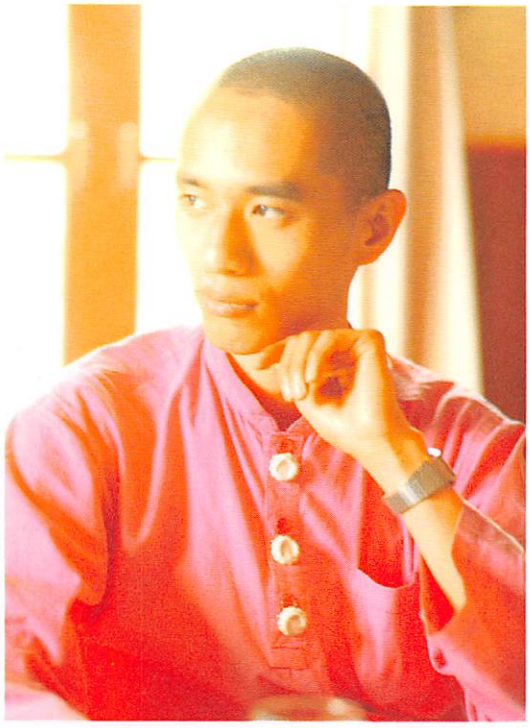
元マルサンアイ勤務。1987年クンダリニー・ヨーガ、90年マハー・ムドラーを成就する。バイタリティーあふれる優れた行動力には定評がある。

●時空を超える幻身のヨーガ

昨年わたしがマハー・ムドラーを成就したときの修行中の出来事をお話ししましょう。

このときの修行では、まず、死に対する恐怖、肉体的苦痛がカルマとして現われました。

まず、もう忘れていた幼いころ強く感じていた、死に対する恐怖がこのときの修行によってどんどんわき出てきました。それに伴って肉体的にも、膿を持ったでき物がお尻にどんどん出てきて、畳に当たっているところが蓮華座の痛みより痛むのです。さらに、トウモミ



たいに熱が出てきて頭も痛くなってきました。

そこで、わたしは尊師に「ヴァジラヤーナの帰依」という修行をさせていただきました。この激しい修行によって苦しみを乗り越えていき、少しずつ形状界の体験が始まってきました。

このときの体験としては、「幻身のヨーガ」（時間や空間、さらに自分自身までが幻影であることを認識するヨーガ。具体的には、時や空間を超えて様々な場所に移動するテレポーテーションが起こったり、自分の体つきや顔が瞬間的に変化したりする）の体験が多かったと思います。ちょっと究竟の瞑想に入ると周りが一変してしまうのです。

例えば、わたしの修行中、尊師がその場でイニシエーションのための飴を修法されたのですが、その修法されている場面が、森の中のような所に変わってしまったのです。そこでは片肌を脱いだ感じの尊師がいらっしゃり、その周りに弟子たちが集まっていました。そして、その弟子の一人として自分もいるのです。尊師はそこでもやはり飴を修法されています。尊師が飴を手に持つと、その飴に向かって光が周りから集まって、飴がどんどん輝き出して修法が終わるという光景でした。

このように、現実に自分がいるはずの光景が全く変わってしまうことが他にもたくさんありました。

もう一人の「わたし」が見ている世界

このような体験が過ぎたところで、非形状界の方に意識が移っていきました。

修行中、ふいに座法を組んだ身体が押しつぶされていくような感じで前のめりになって、体が地べたにぴたっとくっ付いて頭が上がらない状態になりました。このとき、肉眼は下を向いているのですが、別の「眼」で自分自身と隣の人の姿と周りの状況も見えるのです。隣の人の息遣いとか、声も聞こえました。さらに別の「わたし」は非形状界の光に没入して、その光を見ているのです。光は確か黄色で、ちょっと無明を表わす黒があったと思います。そして、意識は非常に鮮明でした。

以前も宿命通の体験で、別の「眼」が自分

❖仏典に記されている八つの離解脱の状態

向煩悩滅尽多学男たちよ、八離解脱がある。それでは、八つとは何であろうか。

形状・容姿を有する者が、形状・容姿を見る。これが第一離解脱である。

内に形状・容姿の認知がない者が、外に形状・容姿を見る。これが第二離解脱である。

美しさに対して没頭している。これが第三離解脱である。

完全に形状・容姿の認知を超越し、嫌悪の認知を滅し、様々な認知を作意しないことから、『空間は無辺である』という空間無辺境を具足してとどまる。これが第四離解脱である。

完全に空間無辺境を超越し、『識別は無辺である』という識別無辺境を具足してとどまる。これが第五離解脱である。

完全に識別無辺境を超越し、『何ものもあることはない』という無所有境を具足してとどまる。これが第六離解脱である。

完全に無所有境を超越し、非認知非非認知境を具足してとどまる。これが第七離解脱である。

完全に非認知非非認知境を超越し、認知経験滅尽を具足してとどまる。これが第八離解脱である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが八離解脱なのである。

自身を見るということはありましたが、同時に非形状界まで見るというのはこれが初めての経験でした。

この形状界、非形状界を同時に経験するというのは、意識が分化して同時に複数の意識が存在するというマハー・ムドラーの成就の状態なのです。

この体験を尊師にお話ししていわれたことは、そうやって少しずつ死の体験をしていく（バルドーの光が見えるようになること）ということでした。

このプロセスは悪業の果が最初に現われ、それから善業の果が現われて、意識が肉体から離れて形状界、非形状界という別の次元に行ったということだと思います。これは煩悩が止滅して意識が鮮明な状態、つまり離解脱の状態になり、その鮮明な意識状態のときに形状界、非形状界の経験をしたということです。

この鮮明な意識状態というのは、例えば寝て眼が覚めてすっきりしたというような感覚ではなく、煩悩という重い衣を脱ぎ捨て、心が本当に自由になった状態から来る覚醒状態なのです。

普通の人はセックスとか食べ物をたくさん食べるといった煩悩的な行為によってエネルギーを使うため、心が常にどよんとして憂いがあるのですが、こういった行為をあまりにしすぎると、初めて「心がどんよりしてるな」などと感じます。

わたしは既にクンダリニー・ヨーガを成就しており、それは自分では調子がいい状態であると思っていたのですが、それすらもどんよりとしていたんだなというのがそのとき実感できたのです。

マハー・ムドラーを成就するまでは、結局わたしもいつも煩悩という重りをしょって歩いていたので、本当の意味での心の自由はなかったのです。しかし、成就によってその重りが取れて、「修行して良かった」「修行によって自分はこうなるんだ」ということをようやく納得できたのです。

わたしがお話しした、見えない世界を見る神秘的な力、さらには心の絶対的な解放も、麻原尊師という最高の指導者のもとで真理を学び、修行し、イニシエーションを受けることによって必ず到達できるのです。皆さんもぜひこの道を歩んでみてください。

Sakulā

やっとのことでトンネルを抜けると、
そこは見たこともない外国で、
自分自身もいつの間にか
金髪の女性になっているのです。
そのときの意識というのは、
自分がその金髪の
女性であるという意識と、
すべてを客観的に見ている意識と、
両方の意識が
同時に存在しているのです。
過去世のヴィジョンを見るときは、
いつもこのような意識状態でした。

サマディへの道程で……修行が教えてくれた前生のわたし

Samadhi Experience

■サクラー正悟師

元日産火災勤務。麻原尊師の最も古くからの弟子の一人で、1988年クンダリニー・ヨーガ、90年マハー・ムドラーを成就する。ホーリーネームの「サクラー」は「天眼第一」と称された仏弟子に由来する。

最近よく話題になる〝前生体験〟。実は、これもサマディへ至る修行の過程で必ず経験できるものである。彼らは数多くの前生を知り、この世が無常であることを経験しながら最終的には解脱に導かれるのである。ここに紹介するのは、解脱者の前生体験のステップを綴った貴重な体験談である。

テレパシーで会話する〝とう利天〟の神々

わたしが最もいろいろな体験をさせていただいたのは、ラージャ・ヨーガの成就を目指して極厳修行に入っているときでした。

あるときは下位アストラルの世界に入ってしまい、悪魔や奇怪な動物に襲われて恐怖におののいたり、あるときは白銀の光に包まれて至福を感じたり……。このような体験をするにしたがって、尊師がお説きになっているすべてが真実であるということを、それまで以上に確信できるようになったのです。

わたしがアストラル世界へ飛んでいろいろな体験をしたのは、主にムドラーと呼ばれる激しい修行を終えて、シャヴァアーサナをとっているときでした。最初は体が揺れるような感じになり、そのうち硬直し、ゴーッというものすごい音と共に意識がマニプーラ・チャクラにある変化身に移って体から抜け出すのです。

そして、風に流されながら、巨大な筒の中を下に行ったり上に行ったりして、行き着いたところで様々な体験をしてくるというわけです。わたしがアストラル体験をするときは、いつもこのように始まるのでした。

その行き着く先というのは、地獄から天界までと、様々ですが、よく印象に残っているのは、とう利天でした。とう利天は、天界の中でも下から二番目に位置するところで、楽しみを求める心が強く、しかも徳のある魂が集う所です。それほど高い世界ではありませんが、それでも人間の世界よりは数百倍も綺麗で素晴らしい所です。実はわたしの二生前が、このとう利天の生なのです。

極厳修行中にわたしがとう利天を訪れたときは、そこにいる人たち（神々）は、綺麗に

着飾っていて、何か飲み物を飲んでいました。彼らは、言葉をしゃべらないのですが、こちらの考えていることが黙っていてもわかってしまうのです。わたしも相手の心が自然にわかるわけですが、これはテレパシーのようなもので、意思の疎通をしているのだと思いました。みんな言葉をしゃべることなく、相手の心を読んで行動していました。

面白いことに、恋愛も同様で、手を触れ合うということもなく、ただお互いがお互いを好きだということをアナハタ・チャクラで感じ合って喜んでいる、そういう所でした。

●トンネルを抜けるとそこは……

ところで、アストラル世界では、自分の過去世のヴィジョンを見るという体験もしばしばしました。筒の中の風に流されて、行き着いた先で、自分が全く別人となってしまっていたりすることがあるのです。

あるときなどは、マハー・ケイマ正大師が、道案内をしてくださったこともあります。いつものようにわたしの変化身が、風に流され、着いたところが長いトンネルの中でした。

そうすると、ケイマ正大師がいらっしゃって、わたしを導いてくださるのです。

「もう少しですからね。」

と、ケイマ正大師にこう言われて、わたしはくねくねした真っ黒なトンネルの中をひたすら歩いていくのです。そして、「右ですよ」とか「左ですよ」とか指示されながら、やっとのことでトンネルを抜けると、そこは見たこともない外国で、自分自身もいつの間にか金髪の女性になっているのです。

そのときの意識というのは、自分がその金髪の女性であるという意識と、すべてを客観的に見ている意識と、両方の意識が同時に存在しているのです。過去世のヴィジョンを見るときは、いつもこのような意識状態でした。

❖仏典に記載「宿命通」の中身

このように、向煩悩滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、様々な前世の生き様を思い出す。

すなわち、一生、二生、三生、四生、五生、十生、二十生、三十生、四十生、五十生、百生、千生、十万生、多くの還元期、多くの再生期、多くの還元期と再生期において、

『わたしはあそこでは、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような楽苦を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、そこに転生した。

そこでも、このような名前であって、このような家系であって、このような容色であって、このような食物であって、このような苦楽を経験し、このような寿命の最期であった。そして、このわたしは死んだ後、ここに転生した。』

と、このように状態と説明とがある、様々な前世の生き様を思い出す。

（『南伝大蔵経』相応部経典・神足相応より）

●「色即是空、空即是色」を日常生活で体験

ところで、話は変わりますが、マハー・ムドラーを成就してからというもの、わたしは現実とアストラルが同一であるという体験をよくします。思念したことが現実となったり、

現実と夢が一致したりすることが多いのです。

例えば、信徒名簿を見ながら、「明日は、この信徒の方に来ていただけたらいいな」と思うと、必ず来ていただけるのです。今のところ、これは百発百中です。

また、あるとき、夢の中でミラレパ正悟師が出ていらして、尊師のお部屋で一緒に食事をされているのです。その食事というのは、わたしが実際に、その夢を見る二、三日前に尊師に供養させていただいたものでした。そして、夢の中で尊師が、

「サクラーも食べないか。」

とおっしゃってくださったのですが、

「いいえ、これはわたしが供養させていただいたものですから、わたしはいただきません。」

と申し上げたのです。

そんな夢を見たその日に、ミラレパ正悟師から電話があったので、夢のお話をお伝えしたところ、ちょうどわたしが夢を見ていた時刻に、尊師のお部屋でわたしが供養したものを召し上がっていたというのです。

これらは、色（アストラル）と空（心）が同一、つまり『般若心経』でいわれている「色即是空、空即是色」を日常生活で体験しているといえるでしょう。

真理というものは、今も昔も変わりません。釈迦牟尼がお説きになった法が、今麻原尊師によって現代に甦っているのです。このチャンスを逃すことなく、すべての人に真理の実践をしてほしいと思います。そして、全力でオウムの修行をすることによって、あなたにも、必ず素晴らしいアストラルの体験が訪れることをわたしはお約束しましょう。

地獄・餓鬼・天界・神聖天を超えて……サマディで見た真実の世界

ここで紹介する体験も、基本的にはいわゆる欲六界といわれる世界のものである。ただ、この人間界より低い世界、そ

心は神聖天へと傾き、
神聖天に憧れ、集中したわたしは、
黄金と白銀の光のうねりが透明光をまといながら
立ち昇っているのを見つけました。
そして、その光の中へと入っていったとき、
その世界には、
ギリシャ神話の神々を思わせるような
長い巻毛、髭の豊かな人物がいて、
白い衣を足元までまとい、
ゆったりとした物腰でわたしを迎えてくれました。

Uppalavaṇṇā

■ウッパラヴァンナー正悟師

元住友化学勤務。1987年、出家後わずか2カ月でラージャ・ヨーガを、88年にはわずか3日間の極厳修行でクンダリニー・ヨーガを成就。恵まれた天性の素質で90年にはマハー・ムドラーの成就を果たす。

して、高い世界、あるいは欲六界を超えた世界と段階的に著わされており、仏教やヨーガなどで真実とされている宇宙観を証明するものとして貴重である。

最も下の世界である地獄から、人間、天界、そして欲六界を超えていく。まさに仏教の修行のプロセスがここにある……。

●サマディで知る真理の世界観

わたしは、オウム真理教に入信し、そして出家し、麻原尊師の説いていらっしゃる真理の法に基づいて、すべての現象を見つめ、考える実践をしてきました。その法とは、生ず

るものは必ず滅する――つまり、わたしたちは死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられないという事実、あるいは、なしたことが返ってくるというカルマの理論、苦は存在し、苦は生起するものであり、苦は滅尽できるものであり、その滅尽に至る道（方法）があるという四つの絶対的真理、などのことです。

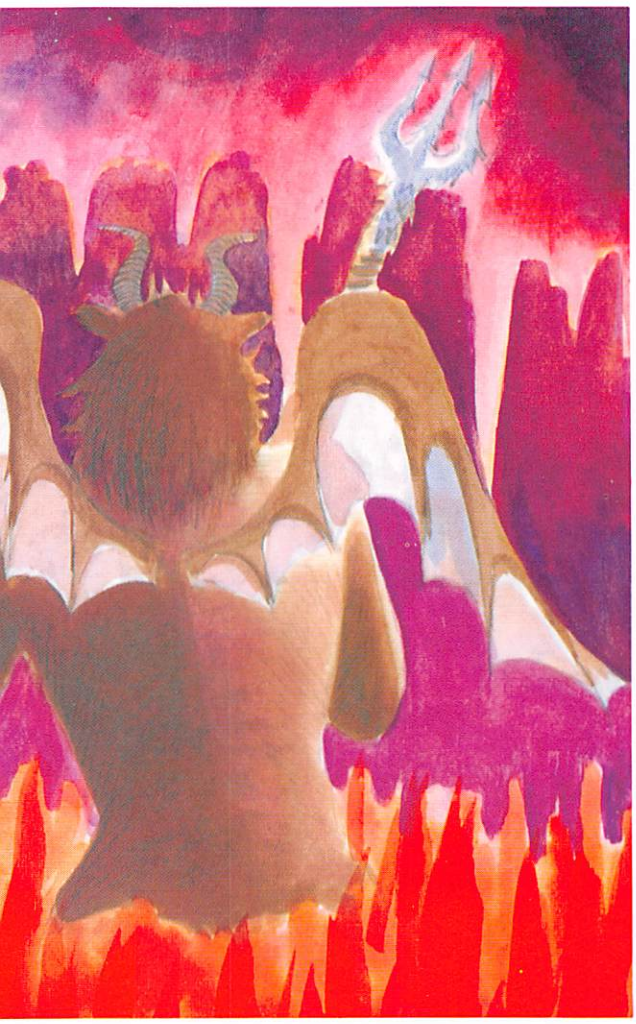
現世にいたころのわたしは、カルマの理論を知るよしもなく、世の中の矛盾に取り組もうとしては挫折し、絶望的な心の空虚感にしばしば襲われていました。それによって、前向きに生きることがだんだんと苦痛となり、消極的な人生を選び始め、自分自身の心を奥深くしまい込んでいったのです。

しかし、オウムに巡り合い、尊師の真理の法に目覚め、今まで抱いていた疑問が、霧が晴れるように解消し、心が快晴のようにすがすがしく広がったのです。カルマにおいて、すべては平等であり、努力は必ず報われるのだとわかりました。すべての生類がお互いを慈しみ合い、高め合う、諦めていた理想の環境が実現できるかもしれないと知りました。そのときの歓びは、今も忘れられません。

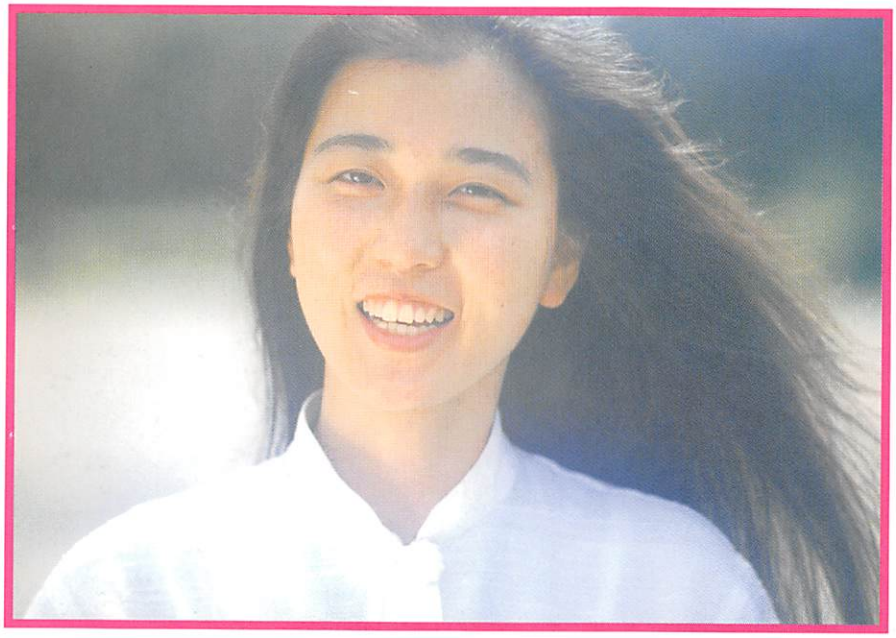
その結果、わたしの潜在意識、あるいは超潜在意識に根付いている煩悩に対して、次第に抵抗力を強め、尊師の偉大なる導きによって、一九八七年にはラージャ・ヨーガ、一九八八年にはクンダリニー・ヨーガ、一九九〇年にはマハー・ムドラーの成就を授かり、煩悩の本質を見、超えることができたのです。

このマハー・ムドラーの修行において、わたしは、真理のデータである経典、あるいは尊師の説法を日々繰り返し修習することにより、雑念から解き放たれ、寂静の境地に達し、集中力を増しました。そして、正しいサマディに導かれ、大いなる空の体験をし、輪廻のからくりを知って、尊師の世界観、教えが真理であることを確信したのです。

普通、わたしたちは、この人間界と動物界のみしか見ることはできません。しかし、わたしは、尊師の指導される正しい瞑想修行によって、地獄界、餓鬼界など経典に記されているような様々な世界を旅することができま



した。尊師の説かれる世界観が真実であると確信した理由には、これらの実体験が大きな要素となっているようです。皆さんにも、その真実の世界を少しでも知っていただくために、修行中の瞑想体験の一部をここに書き記したいと思います。



●存在していた恐怖の世界、地獄

欲六界の最下位にある地獄。ここは、苦痛のみの世界です。生き物を殺すことを喜びとしたり、脅かして遊んだり、恐怖心を抱かせることに心を費やしている魂は、この地獄に赴きます。

そこは、自分よりも大きな獄卒がいて、にぶい黄金のよろいをまとい、両手には大きな鋭い刃の付いたサーベルと三叉戟を持っています。そして、自分は身体が固定され、全く動けない状態になり、その獄卒が自分に少しずつ近づいてくるのです。当然、自分を殺しにやってくるということがわかっていますから、その少しずつ近づいてくるときの恐怖は、頭がおかしくなる寸前、つまり発狂寸前にまで高まり、その状態の中でサーベル、三叉戟によって身体をバラバラに刻まれるのです。

その後、また身体は復活し、固定され、再び獄卒が近づいてくる間、極限の恐怖に襲われ続け、殺されるというパターンを、その魂が他に対して与えた恐怖の総量にたちするまで、終ることなく繰り返されます。

●貪りの心が強いときに知る餓鬼の世界

次に、貪りの心が強いとき、わたしたちは黄色い光に包まれ、満たされることを知らない貪欲な心によって形成された世界に行きます。

その世界の住人は、ただおなかを満たすことのみに集中しており、それによって目が飛び出て、口は大きく裂けています。身体は赤茶け、お腹が前に大きく張り出ており、その

他の部分は骨と皮のみのガリガリの身体です。たとえるならば、アフリカで飢えに苦しんでいる人たちの様子が、テレビなどで紹介されますが、ちょうどその中にいる子供の目がもっともっと大きくて飛び出し、口が耳まで裂け、手足の皮はしわができ、しなびている状態に似ています。

彼らは、食べ物が少しでもあると、我こそはというすごい勢いで、その少々のおにぎり等を奪い合うのです。しかし、その食物を得たとしても、食べたいという気持ちが強すぎて、喉に通っても通った気持ちも生ずることはなく、次の瞬間にはさらに強い貪りの欲が心を支配し、満たされることのない苦しみに身を置かなくてはならないのです。

これが餓鬼と称される欲六界の下から二番目の世界の様子です。

●天界はダイナミックな遊園地?

また、善業を積み、持戒を守り、功徳に満たされた時、天界の白い光が現われます。その光に入ったわたしは、戯忘天に行きました。そこでは、女性は一人残らず美しく、赤や黄など彩りの鮮やかな衣装を身に付け、和やかにすごしているのです。

わたしが行ったところは、デパートのような建物があり、その一階ごとに様々なものが置いてあるのですが、人間界のデパートとはかなり様子が違います。例えば、そこにある風景画に注目すると、その風景が広がり、その世界を楽しむことができたり、単なる置物としか見えないものでも、それに目を向けると、大きくなって動きだしたりするのです。遊園地をもっとダイナミックにしたようなところでした。

そこには女性のみならず男性もいましたが、やはり美しく、そこに集っているすべての人々は、それぞれが心ゆくまで楽しんでいるのです。

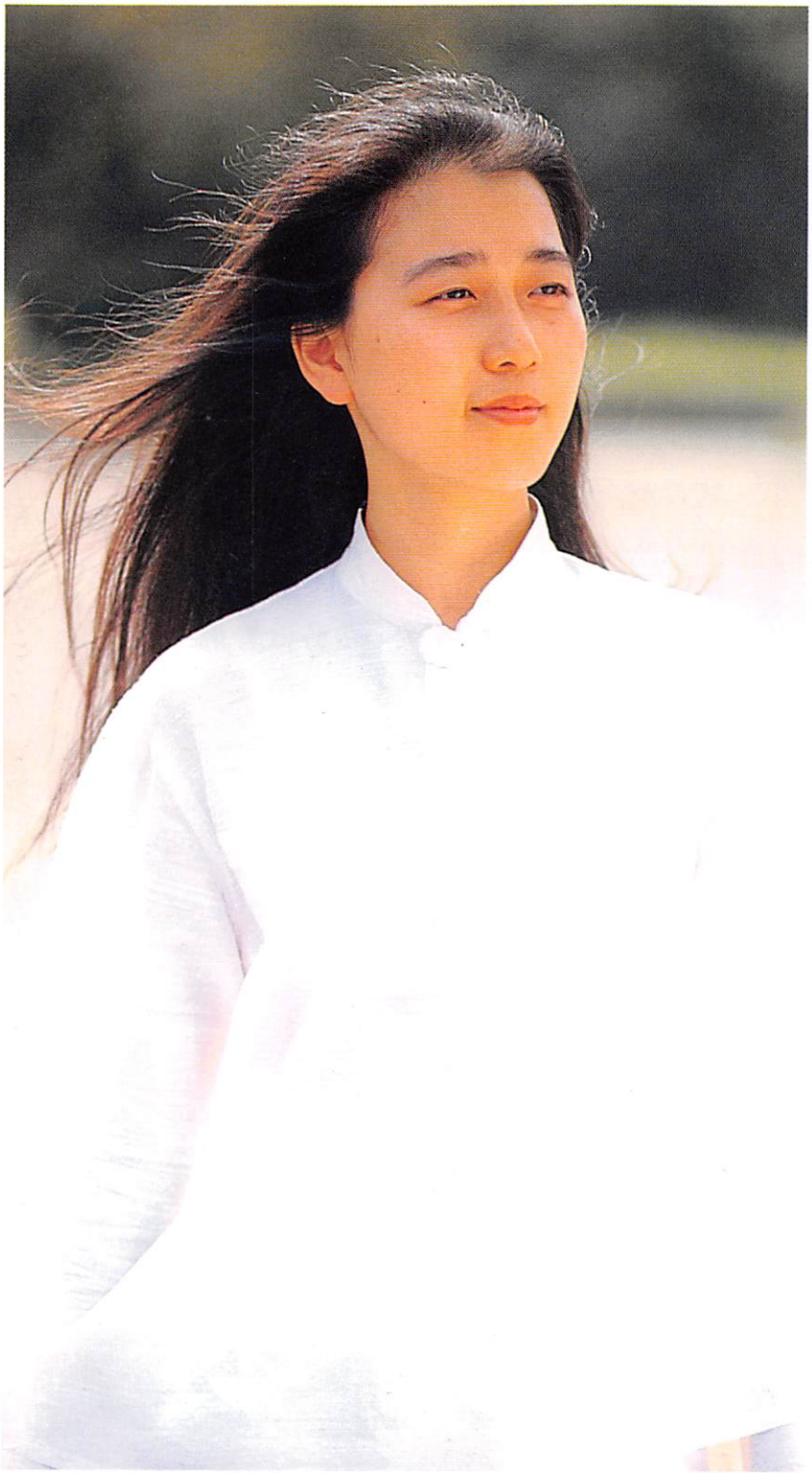
●神聖天を超えて——大いなる空への没入

心は、神聖天へと傾き、神聖天に憧れ、集中したわたしは、黄金と白銀の光のうねりが透明光をまといながら立ち昇っているのを見つけました。そして、その光の中へと入っていったとき、その世界には、ギリシャ神話の神々を思わせるような長い巻毛、髭の豊かな人物がいて、白い衣を足元までまとい、ゆったりとした物腰でわたしを迎えてくれました。

そこには、数多くの書籍が並んでいて、わたしはそこから欲六界に関する本を貸していただいたのですが、その本には、それぞれの

世界を構成する様々な心の働きが記されていました。驚いたことには、その一つ一つの心の働きに、聞いたこともないような名前がつけられており、心が一つの形ある物として表現されているようでした。その方々は、大変静かで、かといって冷たいヴァイブレーションはなく、とても聡明な印象を受けました（この神聖衆天への旅は時間にすればたった二十分のことでしたが、得たものが多く、いつの日か再び赴きたいと思っています）。

そして、戯忘天を超え、神聖天を超え、大いなる空に没入したとき、心は寂静の中にあり、輝くばかりの透明光に包まれます。その満ち足りた空間の中で憩うとき、わたしの心は歓喜を得て、偉大なるグル、シヴァ大神に心から奉仕したいと思うのです。



わたしのこれらの瞑想体験は、決して特別なものではありません。麻原尊師の説かれる教えに基づいて修行すれば、誰でも体験できることなのです。わたしは、一人でも多くの魂がこの絶対なる真理に出会い、真実の体験をし、本当の幸福を得てほしいと思います。

執着が、嫌悪が、無智が、そしてプライドが、
権力欲が、慢が、うたかたのように、
浮いては消えていった。
そして、いつしか、わたしの心は静止した。
目をつぶっても周りは輝いていた。
外的情報に一切心が乱されず、
静止したままである。
オール イズ ストップ ストップ
その状態がキープされたのだった。

サマディが もたらした不動の心 「オール イズ ストップ」

Puṇṇa Mantāniputta

■プンナ・マンターニプッタ正悟師

元鍼灸師。1985年、神秘の石「ヒヒイロカネ」が縁で麻原尊師と出会い翌年出家。本格的な修行生活に入る。88年クンダリニー・ヨーガ、90年マハー・ムドラーを成就。優しく包み込むような温かさは、多くの人を魅了している。

修行を飛躍的に進めようとするなら、力のあるグルの存在が必要である。グルのステージが高ければそれだけイニシエーションの効果も高く、何よりもすべてを知り尽くしたグルにより弟子を最短距離でステージを挙げることができるからだ。これがインドなどでは「修行者はグル探しに一生を懸ける」といわれるゆえんである。

さて、ここで紹介する体験は、オウムの修行者たちのグル、麻原尊師のステージの高さをよく表わしているものでもある。以下を読み進めていけば、正しいグルのもとで正しい修行をなすことがいかに大切か、よく理解できるはずである。

●グルによって導かれた正しいサマディ

わたしは、五年前、偉大なる真理勝者、麻原尊師に巡り合い、尊師のもとへ弟子入りした。出家制度確立に伴い出家し、偉大なるグルに信と帰依を培い、功徳を積む場と真理を実践する場を与えていただいた。八正道を行ずることのできる環境を得ることができたのである。

このことによって、わたしは、偉大なるグルの真理の法を学ぶ機会に恵まれた。尊師の法は尽きることのない宝の山のようなものであり、この法の修習によって、正しい見解を少しずつ具足することができた。そして、次に、その法にのっとり思索するという正思惟の実践ができるようになった。三番目の正語において、妄語、軽薄語、悪口、両舌という四つの口のカルマの果報を知ることによって、

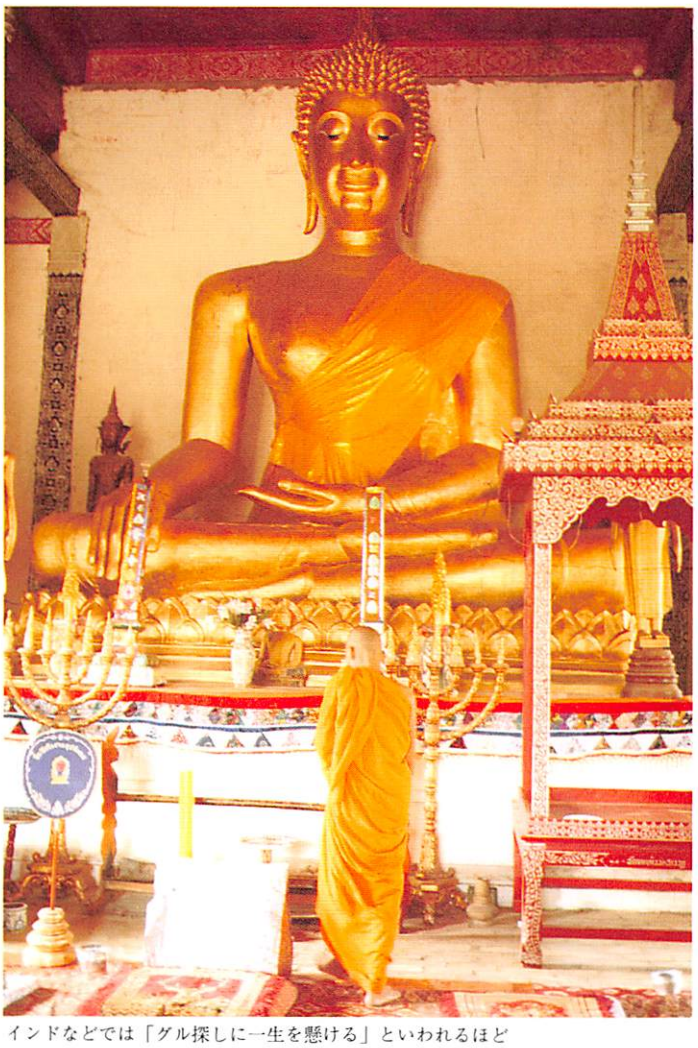
賛嘆、愛語を語るようになり、時に無言の行において心を静め、口を開けばグルの偉大さを、真理の法の話をするようになった。そして、サマナ生活において、煩悩的生活から少しずつ離れ、正生活の実践に入らせていただくことができた。正記憶修習においては、サマナ生活そのものが、日々汚れたデータと真理のデータの入れ替えであったといえると思う。

これらの実践を行なった結果、最終的にマハー・ムドラーの修行において、徹底的にデータの入れ替えを行ない、グルのお力によって——そう、グルのお力以外の何物でもない、偉大なるグルの愛と力によってわたしはサマディに導かれた。

サマディ——それは素晴らしい体験である。

※八正道

- 正見解
- 正思惟
- 正語
- 正行為
- 正生活
- 正精進
- 正記憶修習
- 正サマディ



インドなどでは「グル探しに一生を懸ける」といわれるほど修行者にとってグルの存在は大きい

このサマディにおいて、煩悩が崩壊した瞬間を少し書き記そうと思う。

執着が嫌悪が……うたかたのように消えた！

マハー・ムドラーの修行における瞑想中、煩悩が次から次へと浮いてきた。それは、まさに煩悩という「もの」であった。「もの」としかいいようがない。何か「形のある物のようなもの」と表現したほうが正確かもしれない。それが、浮いた瞬間、綜制を加えずとも勝手にバラバラになって落ちていった。一番引っかかっていたものに対してはもちろん綜制を加えたが、これもズバーッと面白いように落ちていった。

執着が、嫌悪が、無智が、そしてプライドが、権力欲が、慢が、うたかたのように、浮いては消えていった。

そして、いつしか、わたしの心は静止した。目をつぶっても周りは輝いていた。外的情報に一切心が乱されず、静止したままである。オール　イズ　ストップ．ストップ．その状態がキープされたのだった。

この煩悩が落ちた体験の後、わたしは不動心を得た。例えば、プライドについてお話し

すると、プライドが出てもおかしくないような外的環境の中にいて、止まっている自分を認識することができるのだ。心が外的情報に流されないのである。心が動かないから、他と比較し、普通だったら自分より劣っている者に対して優越感を生じるような場面においても、優越感を感じない。自分より優れた人に対しても、比較して卑屈にならない。自己と同等の者に対しても、闘争心を持つことなく、同じ魂のレベルで、カルマの分析をするばかりである。

そして、このように心が動かなくなった分だけ、冷静な判断力、カルマについての分析力が身に付いた。また、修行レベルが上がるにつれ、神通力もそれなりに付いてきた。一例をあげるなら、般若心経に説かれている「色即是空」の状態がある。心で思ったことが現象化するということだ。肯定的なこと、否定的なこと、双方ともそうである。願望成就の非常に強力なものと思っていただければ、わかりやすいだろう。わたしは、この力をグルの意思、つまり苦悩する魂の救済のために向けようと日々心がけている。

マハー・ムドラーの成就——この素晴らしい境地。これはいうまでもなく偉大なるグルから与えられたものである。そのグルの意思を実践するために、わたしはこの成就後、それまで以上に全力で頑張ろうと心を新たにした。

■ 巻末特別付録 ■

麻原彰晃尊師説法

サマディへの道——実践的八正道と四無量心

❖心をさいなます幻影

人の心というものは、幻影にさいなまれている。この幻影というのは、いったいどういうことかというと、自己の目的、自己の利益というものと相反する方向にベクトルの向きを作ってしまうということである。そして、そのベクトルの向きを本当の意味で自分自身のために向けること、それが八つの実践、そして四無量心である。

スタートから、いきなり抽象的な話になってしまった。もっとこれを具体的に表現したいと思う。

まず、人はだれでも幸福にありたいと考える。そして、その幸福という意味合いは、チャクラの示す煩悩の満足度で決まる。そして、その煩悩を満足させるための心の働きは、自己の利益と相反する方向へ現象を動かしてしまう。

例えば、おいしいものを食べたいと、たくさん食べたいと考える者がここにいたとしよう。この者は、初めのうちはおいしいものを食べ、そしてたくさん食べるという行為に走ったと。ところが、この味覚というものは、年齢とともに退化し、そして、そのおいしさを味わうことができなくなる。ところがもし、この魂が自分のおいしいと欲するものを布施したとしよう。すると、布施された対象の喜びの感覚がその布施した者の心に伝わり、そして布施した者の味覚は倍増し、人の味わえないようなおいしさを味わうことができるはずである。

例えばこれは、『ガティーカーラ経』というお経、これは『南伝大蔵経』の「中部経典」に入っている内容の中にもあるが、ずっとずっと以前に登場したカッサパ仏を供養したガティーカーラは、そのカッサパ仏に対して供養した功徳によって、二週間、歓喜の状態にあったといわれる。

では、量についてはどうだろうか。これも同じように量をたくさん食べるということは、ひたすら胃袋が下がり、そして下垂し、大量に食べないといられなくなる。つまり、それは、初めの段階では少しで満足した胃袋が、大量に量をほうり込まないと耐えられないという状態なのである。もし、この大量の食糧の一部でも布施をするならば、その人の胃袋は死ぬまで健全な状態であり、ある一定の状態で満足を覚えることができるはずである。皆さんも知ってのとおり、この胃の下垂というのは、例えば副腎を圧迫したり、あるいは下腹部臓器を圧迫することにより、いろいろな病の原因ともなる。

❖自己の利益を離れよ

科学的に見ると、仏教の教えというものは、人を絶対的に幸福にする教えということができる。それは、自己の利益、この自己の利益を離れることにより、本当の意味では、自己に利益が還元されるんだということの教えでもある。

例えば、性欲の例を取ってみよう。本来、男性にしろ、女性にしろ、長い性的快感を味わいたいと願望する。そして、その満足を得るために、いろいろなエロティックな本、あるいはビデオ等で情報を入れる。ところが、心はもう既にそこで頂点に達しているから、実際の交わりでは性的感覚を味わうことができない。もし、これが逆に真理の実践をし、徳を積み、そして、そういうデータのない状態で、本当に執着する異性と交わり、性的な行為を行なったならば、それは当然、現代の人の感じる何倍、何十倍といったような性的エクスタシーを感じることができるはずである。

つまり、これも、皆さんが求めている楽しみというものと、実際皆さんが行なっている実践というものとの間に、大きな隔たりがあることを表わしている。

❖嫌悪——悪魔の使い手

では、嫌悪はどうであろうか。本来人間というものは、人と、特に愛する人たちと交わり、楽しみ、そして語らい、それを喜びと考えるはずである。しかし、嫌悪の情は、自己の心を閉鎖し、そして、いいことにつけ、悪いことにつけ、ブロックすると。そして、この嫌悪の念が強くなると、相手の優しさ、あるいは、あるいは相手のあったかさというものが伝わら

なくなり、すべてが自分を痛め付けてるといったような被害妄想的な心の働きになり、結局自分自身を孤立させ、不幸にしてしまう。もし、法をしっかりと学び、人の話をよく聞き、受け入れようとするならば、そのようなことはないはずである。そして、絶えず人の良さを学ぶことにより、心は成熟するはずである。つまり、この嫌悪こそ、悪魔の使い手といわざるを得ない。なぜならば、この嫌悪は、わたしたちが本来他の魂から学ばなければならない多くの利益というものを阻害するからである。

ということは、食欲、あるいは性欲、あるいは嫌悪といったもの、これらはすべて、わたしたちがこの修習をし、実践することにより、何の利益も与えず、逆にマイナスの方向に向かうんだなということが理解できるはずである。

✣愛着の思わぬ欠点

次は、アナハタ・チャクラに対する、愛着はどうであろうか。愛着というものは、自己と縁の深い者に対して、その者を独占し、そしてその独占する対象、この独占する対象にいろいろ近付いてくる者に対して、それを排斥したいと願う、つまり嫌悪ともからんでくるが、そういう感情の働きを持たせる心の働きである。この愛着は、もっともっとその魂と親しくなりたい、もっともっとその魂を知りたい、もっともっとその魂と接したいと、いうような心の働きが生じている。そして、それを根本として生起した心の働きが愛着である。ところが、その愛着は、先程も述べたように、その愛着する対象と他とを区別する、あるいは、その愛着する対象を独占したいと思う心の働きによって、その愛着する対象に対して逆にいろいろな圧力をかける形になる。これはちょうど舟を岸に着けたいと考えていて、竿で舟を押すようなものである。つまり、力を強く入れれば入れるほど、舟は遠のいてしまう。

本来、一つ一つの魂というものは、自由でなければならない。ということは、その自由を尊重されてこそ、本当の意味での和合というものが成立するはずである。ところが、例えば親子関係において、例えば兄弟関係において、例えば夫婦関係において、例えば友人関係において、この愛着のディフェクトというもの、欠点というものに陥りがちである。よくこれについては気を付けなきゃならない。

✣権力——その衣を脱ぎ捨てたとき

では、次に、権力に対する指向とはどうであろうかと。わたしたちの権力に対する思いは限りない。なぜならば、その権

力というものは、権力によって多くのものを満たしてくれる。しかし、この権力は、わたしたちの着ている服にたとえることができる。つまり、これは、いつまでもその座に就くことができないということなのである。例えば、生まれ、王子として成長し、王様となり、死んでいくと。しかし、死んだときには、この王様という衣を脱ぎ捨てなきゃなんない。その王様という衣を脱ぎ捨てたとき、果たしてその人が平常心でいられるかどうか。つまり、権力という乗物を使わないでその人が幸福でいられるかどうかということ、これが最も大切なことなのである。そして、権力とは衣であるということを、権力というものは乗物であるということを理解したならば、その権力は、すべての衆生を利する最高の衣、あるいは最高の乗物ということになるであろう。しかし、その権力と自分自身、服と自分自身、あるいは乗物と自分自身とを同一であると考えるならば、この人はまさに死というものを直前にし、あるいはその権力から追われたとき、その苦しみは計り知れないものになるであろう。

それはちょうど、別の表現で表わすことができる。大変な寒冷地、例えば氷点下三十度とか、四十度といったような、例えば北海道の北端。この真冬を想像していただきたい。ここに、大変暖房の効いた家があると。そして、その中で生活をしていると。この人は、こう考えた。「わたしは、北端で、マイナス三十度、四十度のところで、平気で生活することができる」しかし、本当にそうであろうか。この人が生活をしているのは、マイナス三十度、四十度という外界と違い、暖房にあったためられた、二十度、あるいは二十五度といったポカポカの空間で生活しているということになる。権力とは、この家にたとえられる。そして、本当に幸福を願うなら、この家を取り払った状態、三十度、マイナス三十度、マイナス四十度といった中で、暖房を使わず生活できるかどうかということなのである。

そして、そういうことを培っていくこと、これが真理であり、これが仏教なのである。

❖拾の精神——ひたすら今を作り上げよう

では、徳の現象についてはどうであろうか。この徳の現象は、わたしたちを現世において、いろいろと満足させてくれる。そして、現世的な願望というものは、すべてがかなうということになる。しかし、この徳もまた幻影なのである。なぜならば、徳を積まず、徳を使い続けると、必ずその徳は切れ、そして喜びから苦しみに転落するからである。

これはちょうど、冷暖房機にたとえることができる。ある時期、暖房を入れる。しかし、その暖房機が壊れて、次のスイッチが入るとき、それは冷房機となると。しかし、もしこの暖房機を絶えず修理し、チェックし続けるなら、長い間、その暖

房の恩恵に預かることができるであろう。これが、功徳の特徴なのである。よって、この功徳の現象に対して、頓着をすべきではないのである。

そして、四つの無量心の最高の心の状態は、無頓着、捨の精神だといわれている。真理でいう捨の精神とは、こういうバックボーンをもとに説かれた教えなのである。つまり、今味わっている苦楽というものは、過去、あるいは過去生のわたしたちの言葉、行為、心の働きという三つが重なり合って現象化しているにすぎないと。ということは、今味わっている喜び、あるいは苦しみというものは、今、この瞬間とは無縁なのである。つまり、これはあくまでも過去の幻影であり、現在の結果ではないのである。

よって、すべての魂を救済する大乗の仏陀になるためには、この無頓着、今なされている苦しみ、あるいは楽に対して、一切頓着せず、ひたすら今を作り上げていくということが大切なのである。

❖仏教は未来志向

ここで、出てくるのが、二正勤二正断なのである。つまり、これはどういうことかというと、今、瞬間瞬間を全力で生きる、あるいは未来を全力で生きることこそ、仏教の真義だからなのだ。そうだね。だって、過去の幻影を今味わってるわけだけど、この幻影は、過去のあくまでも幻影であって、わたしたちの未来に何の恩恵もない、そうじゃないか？　それよりも、今、瞬間瞬間を二正勤二正断の実践により、今なしている善法を増大させる、そして今まだ徳がなくてできないけど、未来において徳が備わったら、絶対にこの徳を積むぞという、徳を増大させるように意識する。そして、今なしている悪業を断ずる。そして、未来において生じるかもしれない悪業を出ないように、心がけると。これは、どうですか。未来のわたしたちの楽を決定するものだと思わないか。ということなんだよ。つまり、仏教というものは未来志向なのであると。

❖サマディに至る七つのステップ

では、そのためには、いったいどういう行ないをなせばいいのかということになってくる。これは、まず、何が真理で何が真理でないかを、ひたすらデータを入れるということから始めなければならない。この、何が真理で何が真理でないかを何度も何度も繰り返し、データを入れなければ、わたしたちは過去世からの幻影によって、過去世からの錯綜によって、ものを正確にとらえることができなくなっている。よって、ひたすら記憶修習をすべきなのである。

そして、今何の修行をなしたら最もメリットがあるのか、これを次は選択しなければならない。例えば、初心者があまりにも難しい瞑想をなすとか、あるいは修行の進んでる者が、簡単なマントラを唱えて、自分は修行しているんだと錯覚するとかいうことは、その人の修行を挫折させたり、あるいは進まなくさせたりする要因となる。よって、この二番目の何を選択するのか、これは最も大切な仏陀へ至る道の一つということになる。

そして、三番目は、決めた修行に対して勇敢に修行を進める。そして、たゆまず修行を進める。これが必要なのである。これを勤精進、あるいは勇気をもって精進するといわれている。これが、第三の仏陀の心を支える、仏陀の心を作っていく修行なのである。

そして、第四番目は、「ああ、今日は疲れたな」といいつつ修行するのではなく、「うれしいなあ、自分は修行してうれしいなあ」「自分は修行できることがうれしいなあ。自分は教学できることがうれしいなあ。徳を積むことがうれしいなあ」という、この修行に対して、ただひたすら喜びを持ち続ける修行、これを実践しなければならないのである。

そして、生活のリズムをしっかりと作り、心身が軽快になるように、修行によって軽快になるように組み立てる修行。これが、第五のわたしたちの仏陀に至るための土台を培う修行なのである。

そして、この五つを達成し、ある程度固まったならば、次はしっかりと自分の内側を見つめる。そして心を鎮め、心を止め、観察する。そして、どういう煩悩があり、自分はどういう世界へ転生するのか、あるいはどういう、自分自身は思考のパターンを持っているのかをしっかりと理解すると。これが第六番目のわたしたちが仏陀になるための土台となる修行なのである。

ここで、問題になってくるのは、例えば一番目の、何が真理で何が真理でないのかということを理解できてないと、この六番目、この観察の智においても当然ずれが出てくる。

例えば、現代人は、膨大な時間を使って、マンガ、アニメ、あるいはテレビ、映画、雑誌等のデータを入れている。そして、こういうデータは、わたしたちの知らないうちに深い意識に根付き、このデータをもとに判断をするという謬見解を培うことになる。よって、その前に、ひたすら何が真理で何が真理ではないのかの記憶修習をなさなければ、このサマディというものが、全く無効になってしまうということなのである。

そして、先程も述べた、例えば嫌悪、性欲、食欲、愛着、権力、あるいは現世の願望成就といったようなもの、こういうものに対して一切頓着をしない、頓着しないでただひたすら修行を続けるということ、これが七番目の大乗の仏陀に至る土

台なのである。

なぜかというと、先程も述べたとおり、現在という瞬間は、幻影である。これは、過去、あるいは過去世のわたしたちのカルマが生起し、現われてる状態を表わしている。その現在の幻影にとらわれ、それにより再びまた悪業を積み、あるいはそれに溺れ、功徳を積まない状態を作ってしまうならば、その人の現在から投影された未来というものは、また不幸ということになる。よって、現在を無視しなければならないわけである。これが、正生活、正しい生活なのである。

❖苦を与えれば、苦が返る

では、わたしたちの身・口・意における、まず身の行ないの統御については、何をなせばいいのであろうかと。例えば、わたしたちが殺生をする。例えば、相手に苦痛を与える。苦痛を与えると、その苦痛のヴァイブレーションは、シャクティーパットと同じで、自分の内側に内在される。ということは、苦の総量は一定なのである。苦の総量が一定だということは、相手を苦しめたそのデータというものは、必ず自分に入ってくるわけである。すると例えば、小さな虫たちにも、当然苦しみというものはあるから、その苦しみの総量が、わたしたちに伝わってくる。もっと徳の高い大きな生き物は、その苦しみの量が多いから、その苦しみのデータというものは、わたしたちのコーザルに、しっかりと根付かされると。逆に、生き物を安らがせるということは、その生き物の喜びというものが、わたしたちの心に根付かされるから、これはわたしたちの喜びという形で返ってくる。この理法を理解するならば、殺生を離れ、すべての魂を安らがせることの偉大さに気付くであろう。

次は、偸盗である。人の心というものは、必ず、その人の所有してるものに対して愛着している。あるいは、執着している。ということは、他の者の所有を盗むということは、その人に、その執着からくる苦しみを与えることになる。よって、偸盗をした段階で、その持ち主の苦しみが伝わってくることになる。そして、これは、逆に自分の執着しているものを奪われるという形で苦しまなければならないのである。よって、他に対してものを施し、盗まないということは、これは、だれの利益でもなく、自己の利益なのである。

同じように、邪淫がまさにそれである。これには、正確にいうと二つの意味合いがある。その第一は、性エネルギーを漏らすことにより、徳の消耗をし、疲弊するということである。そして第二は、これは仏教的に、一般的にいわれている邪淫だけども、これは、他人の妻、あるいは他人の夫を寝取るということなのである。これは、先程も述べたとおり、他人の妻、あるいは他人の夫というものは、その夫婦関係において必ず愛着し合い、あるいは独占し合おうという心の働きがある。そ

の、独占し合おうという心の働きに対して、強烈なダメージを与えるわけだから、当然、その苦しみというものは、その対象者に向かってくる。そして、その苦しみをしょうことにより、未来において苦しまなければならないというカルマを作るのである。

よって、正行為の原則というものは、殺生を離れ魂を慈しむ、偸盗を離れ物を施す、邪淫を離れ、そして本当に心からの友情を培うということになる。

❖言葉の統御をなせ

では、言葉についてはどうであろうか。まず、妄語がくる。この妄語というものは、ものを覆い隠したいと考える心の働きが増大される。この心の働きは、わたしたちのカルマの顕現化を遅くする。つまり、一種の、そこで袋、あるいは箱を作ったような形になる。ということは、その嘘が多ければ多いほどカルマの現象は遅れることになる。カルマの現象が遅れると、カルマの理法が理解できなくなり、悪業を多く積む。そして、それによって、結局その悪業が現象化するときは、取り返しのつかないようなカルマの清算となっている。これが妄語なのである。よって、真実を語るということは決していいことではない。このいいことではないとは何かというと、何かわたしたちにいいことが返ってくるということではなく、すべてのものの現象が、はっきりありのままに見えるということなのである。

では、綺語はどうであろうか。この綺語というものは、心の働き即言葉という、つまりコーザル即アストラルという、この流れを変えてしまう。つまり、心にもない言葉を大量に語ることにより、アストラルに心と関係のない、いらぬものがたくさん生じることになる。ということは、心で思ったことが現象化せず、屈折を生むわけである。ということは、この綺語は、わたしたちがものを達成していく上において最も大きな障害ということになる。

では、悪口はどうであろうか。これは、殺生と同じである。つまり、悪口を放つことにより、相手に苦しみを生起させる。そして、その苦しみのヴァイブレーションは、自分の心に返ってくるのである。

ということは、綺語を話さず、真実だけを語ると。そして、悪口を語らず、人に優しい言葉を語るということは、それだけでわたしたちに大きな恩恵があるのである。

仏典で、悪口により地獄に落ちたという例があるが、これはまさにそれである。つまり、これは殺生と同じ——形態は違うがね——カルマの返り方をするわけである。

では、両舌はどうであろうかと。この両舌においては、必ず嫉妬心というものが、心の背景にある。そして先程も述べた、その嫉妬心の背景には、また嫌悪という心の働きがある。ということは、どんどんどんどん自分の世界を小さくしていくということになる。そうだね。嫌悪は壁でしょ。ということは、この両舌の戒は、人と人とを仲たがいさせ、それと同時に自分の世界を小さくしていき、最終的には自閉症になるということになる。

ところが、人と人とを和合させる、この言葉の実践をなすならば、心が豊かになり、壁が取り払われ、多くのいろんな人と交わることができ、そして、いろいろなことを学び、魂が成長するということになる。

ということは、妄語、綺語、悪口、両舌というこの行為、この言葉の行為は、これはわたしたちを不幸に陥れるものであり、真実を語り、必要のない言葉を語らず、人に優しい言葉を語り、人と人とを和合させる言葉を語るということは、わたしたちの心の病を取り除き、わたしたちの心を広大にしていくということになる。そして、これを正語というのである。

❖教えを基に、検討する

では、八正道の原則である、正見解、正思惟とは何であろうかと。まず、この正見解とは、仏陀の教え、グルの教え、この教えをただひたすら学ぶということである。ここで、考えてはいけないということである。なぜならば、先程も述べたとおり、わたしたちがわたしたちと呼んでいる思考は、小さいときから両親によって植え付けられたもの、兄弟によって植え付けられたもの、あるいは社会的環境によって植え付けられたもの、例えばマンガ、雑誌、テレビ、アニメーション、映画等である。そして、これをわたしたちはわたしたちと考えている。ところが、今から二千五百年前登場した仏陀釈迦牟尼の教え、あるいはそれより以前にあったインド・ヨーガの真実の教え、あるいは二千五百年から現在に至るまでの多くの聖者方が修行して得た結果の教えといったものは、これは普遍的な教えなのである。それは、なぜかというと、「無常」、だれが見ても絶対にそうだとわかる基本的原理を背景として教えているからである。

よって、まず、この正見解というものは、自分の考えを捨て、ひたすら学ぶことから努力すると。そして、例えば、『マハーヤーナ』（※オウム真理教の教団機関誌）だったら、五回くらい必ず読み、そして熟読すると。これを熟読して、初めて正見解のベースができたということになる。

次はそれに基づき、自分自身の身の行ない、口の行ない、あるいは心の働きについてチェックを入れると。これが、正思惟なのである。つまり、正見解、正思惟というものは、仏典をもとに、あるいはグルの教えをもとに、自分自身を検討して

いくプロセスなのである。ということは、先程の正語、あるいは正行為、正生活といったようなもの、これが仏典の基本的な教えであり、そして、その背景というもの、バックボーンというものも、皆さんは理解できたわけだから、これから正見解に立つならば、それを実践しなければならないということが理解できるはずである。

❖正しいサマディへ

そして、その次の正記憶修習。この正記憶修習というのは、一度、二度、三度、四度、五度ではなく、例えば自分がなさなければならない瞑想を、十万回、あるいは百万回といったレベルで、何度も何度も記憶すると。この、なぜ何度も何度も記憶するかというと、これが一定の回数になると、わたしたちの表層意識から潜在意識に入り、そして潜在意識から超潜在意識へとデータが流れていくからである。そして、この正記憶修習をなして、はじめてわたしたちが深い意識へ到達したとき、その正記憶修習をなしたものが、乗物となり、いいですか、乗物となり、わたしたちをいろいろな神秘の世界へと案内するわけである。ということは、その前に、正記憶修習のなされないような禅の瞑想というものは、わたしたちに利益を与えないということになる。あるいは、単に勤行だけにいそしんで、つまり読経だけをしている場合は、これはその後の寂止、正観の正サマディというものがないから、これも正確に観察できないということになる。つまり、詞章、あるいはマントラの修行というものがあって、はじめてその次の寂止、正観のサマディに入ることができるわけである。

そして、このマントラ修行、詞章の修行だけではなく、日々の生活において、心、言葉、行為の統御をする。特に、言葉と行為の統御をすることが大切なのである。

これが、八つの聖なる実践、八正道と呼ばれるもののすべてである。

❖四無量心——広大で深遠な心を

では、次に四無量心、これはなぜ実践しなければならないかということになる。例えば、「ホー、湖面に映る虚像のような様々な幻影に引きずられ、輪廻の大海を浮沈する生き物たち。彼らすべてが絶対自由、絶対幸福なるマハーヤーナにて安住することができるよう、四無量心込めて大乗の発願をいたします」と。このマントラを十万回唱えると。すると、何かの現象があるとき、このマントラが浮いてくると。そして、例えば、自分の妻、子供、あるいは夫、あるいは父母、あるいは友人といったものを見たとき、なんて哀れなんだろうと、いう思いが生じてくると。まず、これが心の生起、これが慈悲の

悲なのである。そして、その哀れみを、強く強く持つ、強く強く持つだけではなく、この人を本当に幸せにするためには、どうしたらいいんだろうかと考えなきゃなんない。すると、おのずと結果は一つということになる。それは、真理を実践させるしかないなと。真理を実践していただくしかないなと。この人は、真理を実践してこそ、はじめて今の苦しみから脱却することができるんだと。こう考える思い、これが悲なのである。

では、慈愛とは何であろうかと。この慈愛とは、例えば愛着する対象、あるいは好感を持つ対象に対して、その好感を持つ対象が、もっともっと幸福になってほしいと、本当の意味で幸福になってほしいと思う心の働きである。ということは、これも一つしかない。それは、絶対的自由・幸福・歓喜を相手に与えること、無常を超越した歓喜を相手に与えることなのである。たしかに、無常から常に至るときに、相当多くの苦しみを対象に与えることになるかもしれない。しかし、それは、ちょうど病を治すとき、手術が必要なように、あるいは注射が必要なように——多くのわたしたちの友というものは病んでいる。よって、その病を治すとき、そこに苦しみが生じたとしても、それは、逆に喜びとして、つまり、その人の心の成熟の喜びとして、見守るべきなのである。

そして、この慈愛、そして悲の実践、これはわたしたちの心を大きくしてくれる。そして、視野を拡大してくれることになる。

ところが、この慈愛、悲しみといったようなもの、悲といったようなものは、どちらかというと、対象が自分よりもレベルの下の者に向けられる心の働きなのである。自分より優れた者、あるいは自分と同等の者に対しては、どのようにしたらいいか。それは、称賛の瞑想、そして称賛の実践こそ、わたしたちの心を広大にしてくれるのである。つまり、もし、対象を称賛することができるなら、自分より優れている者を称賛することができるなら、心は自然とその人の良さを学ぼうとする。そうだね。ところが、対象に対して闘争本能を持ったり、嫉妬心を持ったりすると、その人の欠点を一生懸命見付けようとし、そして、それと同時に心はどんどんどんどん屈折してくる。そうだね。よって、第三番目の実践、この称賛というのは、自分と同等、あるいは自分よりも優れた者に対して行なうべき、真理の実践者の実践過程なのである。

そして、第四のパターン、これは、先程も述べた、この現実、この現象、今というものに対して頓着しないということなのである。この今というものは、だれも、どうすることもできないのである。つまり、それはどういうことかというと、この今というものは、過去世から、あるいは今生の過去において培ったわたしたちの善業と悪業との集積が今なのである。

✣在家修行でサマディに至る方法

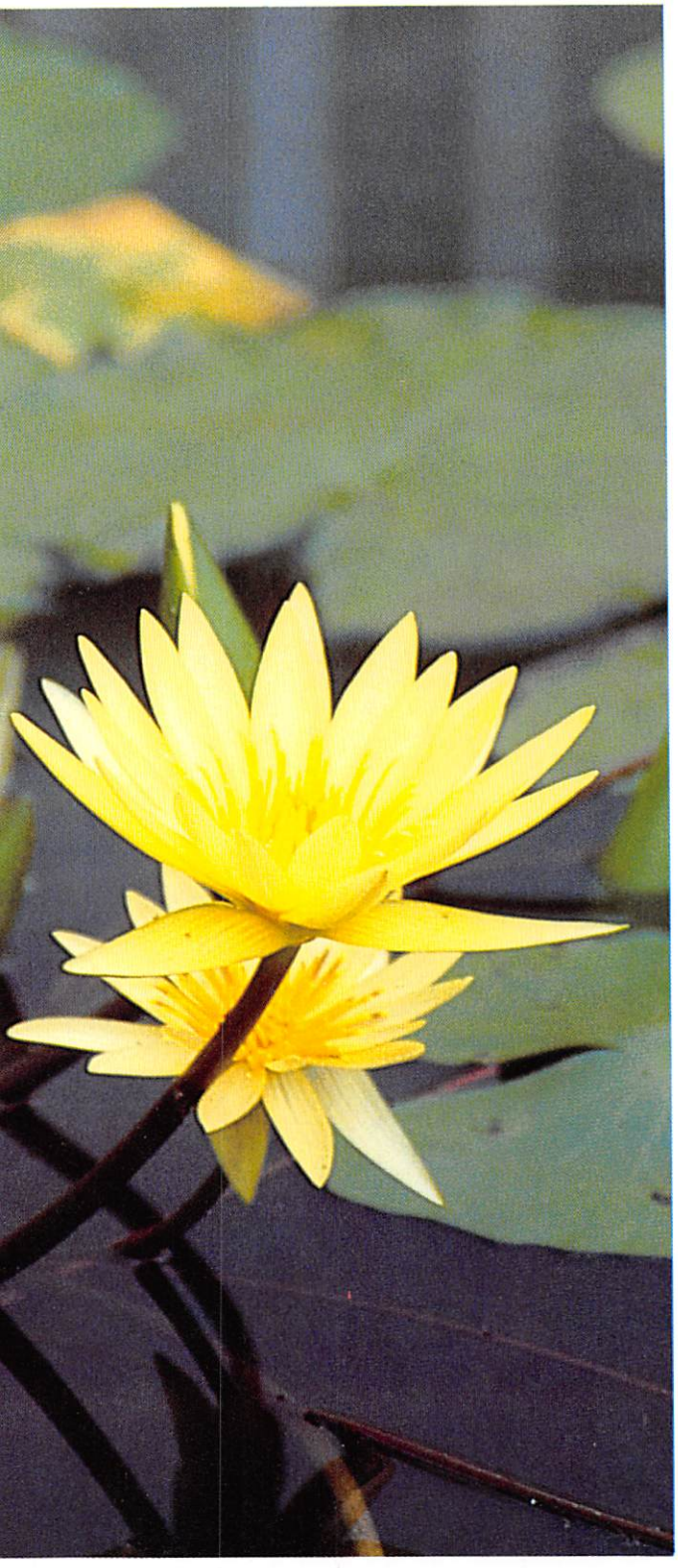
そして、今から二千五百年前、原始仏教において、出家が称賛されたのはそこにある。つまり、出家というものは今の苦しみから逃れることができる。そして、ひたすら善法を増大させることができる。善業を増大させることができる。初めのうちは、逃れていてもカルマの返りにより、少しずつ少しずつ苦しみが現象化する。しかし、それがある段階になると、善業しか積んでないから、あるいは善法しか実践してないから、その苦しみがなくなったとき、その魂の五蘊、つまり肉体、感覚、イメージ、意志、意識というものは、善の集積、功徳の集積になるのである。そして、その段階でサマディに入り、そして高い世界をすべて認識し、この人間界がいかに低い世界であるかを認識し、この人間界に対する愛着を捨て、ニルヴァーナ、あるいはマハー・ニルヴァーナへと入っていくのである。

これが、実践的八正道、そして四無量心のすべてである。

ということは、この八正道、あるいは四無量心というものは、六つの極限と何ら変わらないことになる。そうだね。これを六つの極限に当てはめるならばどうなるかというと、まず、三つの布施、財施・法施・安心施という三つの布施によって、功徳を積む。そうだね。次に、持戒を守ることによって、言葉、心、行為の統御をする。そうだね。そして、三番目の忍辱、ね、耐え忍ぶ修行によって、無頓着の心を培っていく。そうだね。四番目の精進の実践によって、今の善業よりもっともっと大きな善業を形成し、そして悪業を止滅する。そうだね。そして五番目の瞑想のステージ、サマディのステージによって、その培ってきたわたしたちの五蘊をじっくり観察し、そしてわたしたちの悪業の部分、あるいは善業の部分をチェックし、そして悪業の部分はまたひたすら落とすと。そうだね。そして、最後、智慧、六神通に到達すると。そうだね。

ということは、八正道、あるいは六つの極限、これは全く同じなのである。これが、わたしの悟り得た八正道であり、わたしの悟り得た六つの極限であり、わたしの悟り得た四無量心である。

（一九九一年一月三日　於・富士山総本部道場）



最高のチャンスがここにある

——あとがきに代えて——

我々の住むこの世界の裏には、ヨーガや仏教でいうところのアストラル（色界）、コーザル（無色界）といった異なった世界が確実に存在している——。

唐突にこう断言されて、果たしてどの程度の人が首を縦に振ることができるだろうか。おそらくほとんどが〝自己の経験〟あるいは経験と思い込んでいる〝世間の価値観〟に照らし合わせて、「そんなのは妄想家のつくった夢物語だ」と真っ向から否定するに違いない。

しかし、もう一度だけよく考えてもらいたい。もしかしたらそれは「我々が体験していないだけ」ということではなかろうか？

実際のところ、ヨーガや仏教のこうした世界観は、いわば聖者と呼ばれる方々がサマディによって体験されたものであり、それをまとめたにすぎない。そして、それはその時代その時代の聖者あるいは解脱者、つまりサマディの体現者の〝経験〟によって確認されながら伝えられ、教え広められてきたものでもある。

さらに、それは決して特別な方々だけが経験するといった類のものではない。そもそもヨーガや仏教における修行、これは出家でも在家でもそうだが、最終的には我々を正しいサマディに導き、もろもろの世界を実際に体験させてくれる。そして、真実を知った我々を最高の叡智に導いてくれるものなのである。

何があなたを幸せにし、何があなたを不幸にするか？　突き詰めるところ、これはサマディによって得られる真実の世界の経験なしには語れない。幸いなことに、今我々の目の前に正しいサマディに至る方法が示されている。このチャンスを逃すことなく、ぜひあなたも最高の叡智を手に入れてもらいたいものである。

AUM Editorial Staff

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。
あなたのご意見をぜひ下記の宛先までお送りください。

〒154　東京都世田谷区世田谷2—8—17
オウム出版『ザ・サマディ』読者係

◆各支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2十4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
布施精舎　03（3476）5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.#2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

新しい〝あなた〟との出会い

古くから伝わる仏典やヨーガ教典によれば、
聖者と呼ばれる人々は、この世のすべてを知り尽くし、
心は常に安定し、望めばかなわぬことがないという、
いわゆる〝神〟のような存在であったという。
しかし、彼らとて最初からスーパーマンであったわけではない。
〝長く厳しい修行の後、これらの力を得た……〟
と教典は語っている。
わたしたちは、いまだ磨かれていない
ダイヤモンドの原石にたとえることができる。
この原石は、一見汚れていて光沢もないが、
洗い、削り、丹念に磨き上げることによって、
光り輝くダイヤモンドにすることができるのである。
この、洗い、削り、丹念に磨き上げる作業……、
これが修行なのである。
すべてを知り尽くした最終解脱者、麻原彰晃尊師が、
数多くの技法の中から、忙しい現代人に最も適した修行法を厳選し、
あなたの内側に秘められた素晴らしい力を、
早く、しかも確実・安全に引き出してくれる。

あなたにも必ず訪れる素晴らしい瞑想体験

体験談——黄金色の光の世界で

クッジュッタラー（三十七歳・フィットネス・インストラクター）

今年の一月に参加した集中修行での体験です。わたしの意識は黄金色の光の世界へと飛んでいきました。

ちょうど麻原尊師がエンパワーメント（エネルギー移入）してくださったときだと思いますが、おなかのマニプーラ・チャクラが熱くなって、すごい勢いでエネルギーが上がり、「あっ、抜ける」と思った次の瞬間、案の定、わたしの意識は別の世界に存在していたのでした。正確にいうなら、瞑想している意識と別世界の意識が同時に存在していたといっていいと思います。

そこは黄金色の光の世界でした。街のようなものもあるのですが、木も家もビルもすべて光でできた、というよりは光の集合体のようなもので、反対側が透けて見えました。ただ、木や家といっても、形状もそんなにはっきりしていません。ただ、テロップではありませんが、見れば認識できるという具合でした。

この世界の「魂」もやはり光からできていて、それが光でできた街の中を行ったり来たりしています。その中の一つがわたしで、球体の光だったわたしは、ふにゃふにゃと形を変えながら飛んでいました。

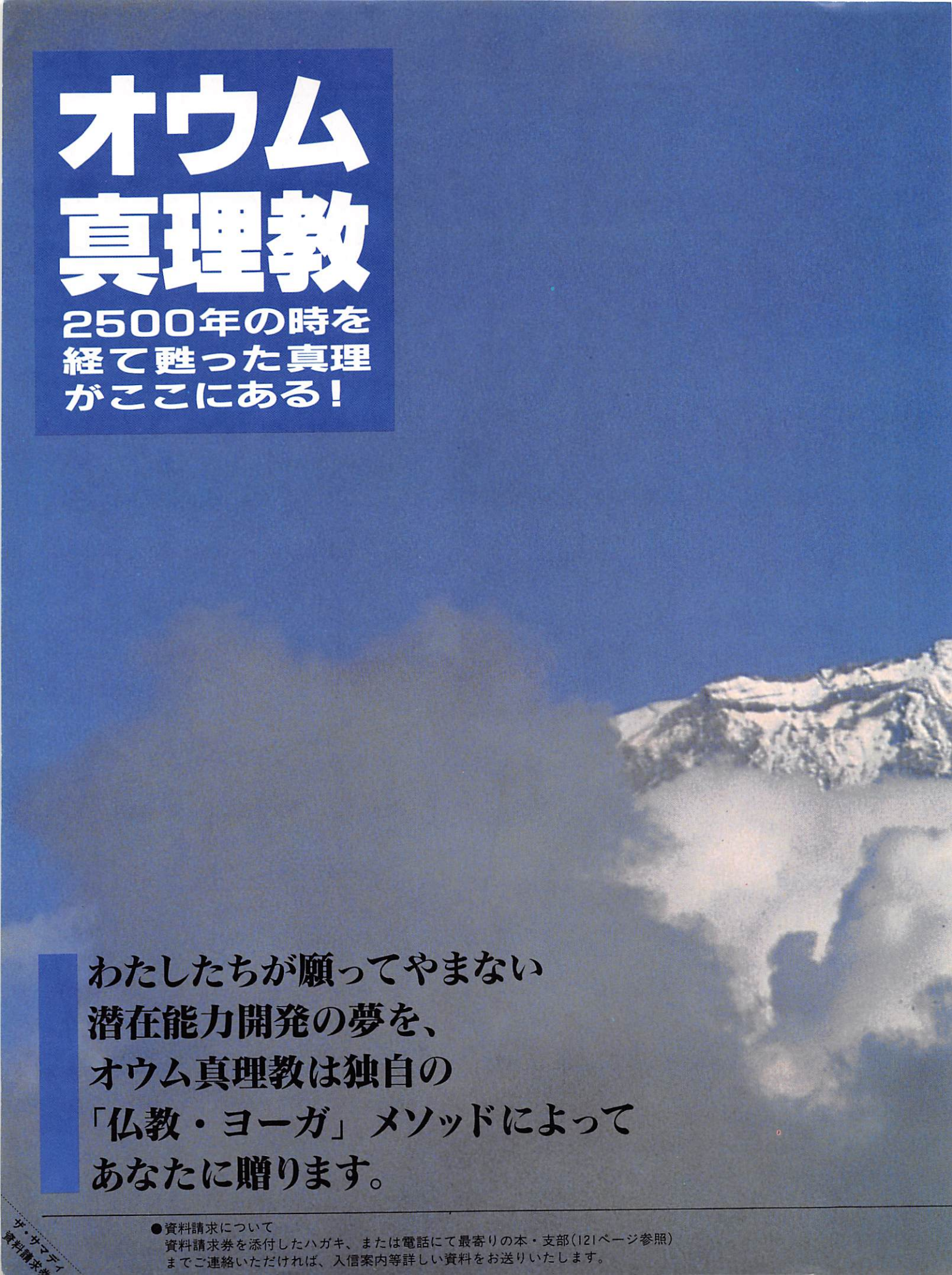
大変不思議な世界ですが、このときの心の状態はゆったりしていて、広大な、安らいだ気持ちに満ちあふれていました。楽しい、悲しいといった感情は一切ありません。心の波のない状態で、それが広がっているという感じでした。

（１９９０年１月ラージャ・ヨーガを在家で成就）

※成就者に与えられるホーリ・ネームです。

オウム真理教

2500年の時を経て甦った真理がここにある！



わたしたちが願ってやまない
潜在能力開発の夢を、
オウム真理教は独自の
「仏教・ヨーガ」メソッドによって
あなたに贈ります。

●資料請求について
資料請求券を添付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部(121ページ参照)までご連絡いただければ、入信案内等詳しい資料をお送りいたします。

ザ・サマディ
資料請求券

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

月刊『えんじょい・はぴねす』

Enjoy Happiness

楽しいはずの人生なのに、
空しさを感じるのはなぜ？
生活だけでなく、
〝心〟も豊かになりたいから……
すべての苦しみと悲しみに
別れを告げたいから……

だから今日から
〝えんじょい・はぴねす〟

◇Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」マイトレーヤ正悟師

◇One Point Yoga
「ワンポイント・ヨーガ」
キサーゴータミー正悟師

◇ENGLISH IN DHARMA
「イングリッシュ・イン・ダルマ」ウッタマー師

◇Healthy Cooking
「健康を食べよう！」

◇Health and Truth
「エンジョイ・ヘルス」

◇The Song of The Month
「真理と愛のハーモニー」

◇Monthly Highlights
「ズーム・アップ・オウム真理教」

◇EH Members' Square
「読者の広場」

——主な内容——

◇Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて——えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◇Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」麻原彰晃尊師

◇JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
——釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◇Love and Truth
一息つきたいあなたを優しく包む真理エッセイ
「よりよい人生を送るために」
ヤソーダラー正大師

◇あなたもわたしも創造主
飛行船、ロボット、ホバークラフト……、つくる喜びを忘れた我々に科学者気分を味わせてくれる誌上製作コーナー

「宗教には興味があるけど、
でも信徒になるのはちょっと……」

そんなあなたに贈る最高のプレゼント！

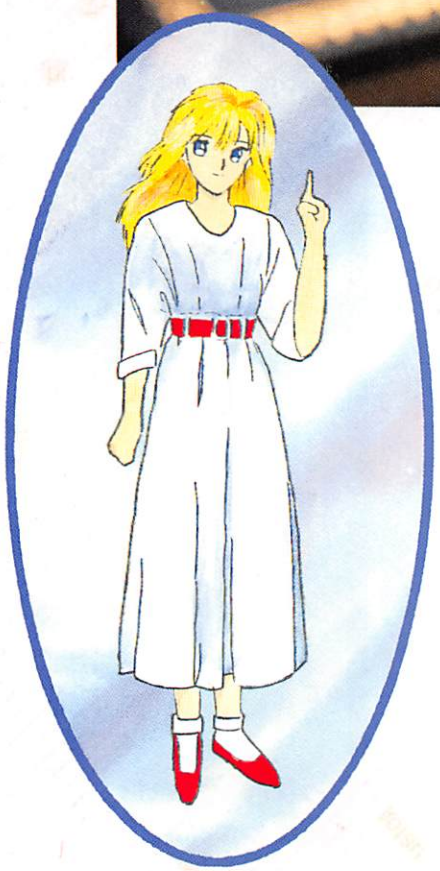
『えんじょい・はぴねす』を定期購読していただきますと、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できる権利を持っています。気軽な気持ちでオウムをのぞいてみませんか？

— 苦悩を超えて —

えんじょい・はぴねす

EH会員7大特典

1. オウム真理教主催のイベント、説法会等へ自由に参加できます。
2. 国内および海外の本支部道場をいつでも利用できます。
3. 幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼントいたします。
4. 成就者との対面および電話による悩み相談が受けられます。
5. 各種イニシエーションを受ける資格が得られます。
6. 聴くだけで心が癒えるアストラル音楽テープなど、オウム真理教の販売物を信徒同様の安価で購入できます
7. 日本シャンバラ化計画基金（永代帰依祈願を除く）への参加資格が与えられます。



〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？
※入会金は一切無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申し込むと、料金の払い込みが確認された時点でEH会員となります。なお、定期購読の申し込みは6ヵ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教の本・支部道場までお問い合わせください。
（121ページ参照）

それでもキミはまだ疑うのか？

28人の決定的瞬間が証明する現代の神秘！

麻原彰晃の「ズバリ！浮揚」

SUPERNATURAL POWER

監修 麻原彰晃　オールカラーA4変形判 128ページ

定価1200円（本体1165円）

絶賛発売中！

AUM MOOK 第一弾

超越神力

人の魂に宿る不思議な力——
我々はそれを

と呼んでいる。

ついに登場！
瞑想家待望の書

PART 1
天耳通・他心通
神々の声、遠くの声を聞く「天耳通」、相手の心を知る「他心通」を特集した待望の超越神力シリーズ第1弾！麻原彰晃尊師の"力"がいま明らかになる。

麻原彰晃 著
B6判
定価980円

PART 2
前生を知れ！死生智の秘密
無始の過去から輪廻転生を繰り返す我々の魂。サマディによって得られる人智を超えた力、「宿命通」が教えてくれる真実とは？　麻原彰晃尊師の興味深い前生体験も満載したファン必見の一冊！

麻原彰晃 著
B6判
定価980円

すべてが思いのままになる!!

超能力　秘密の開発法

全国有名書店で人気上位ランキング爆走中

ただ一人の最終解脱者、麻原彰晃尊師が贈る究極の秘儀伝授

人が修行によって"人間"を超えようとするとき、
必ず人智を超えた"力"が身につく。
超能力のつかない修行などニセモノだ！

麻原彰晃 著　　B6判　　定価980円

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版　本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03(3439)6043 振替 東京2-109325
　　営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03(5370)1598

（価格はすべて税込）

THE SAMADHI

麻原彰晃の

ザ・サマディ

定価1200円（本体1165円）
1991年11月10日 初版発行

●監　修　麻原彰晃
●発行人　松本知子　石井久子
●発行所　株式会社 オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
電話03(3439)6043
振替　東京2-109325

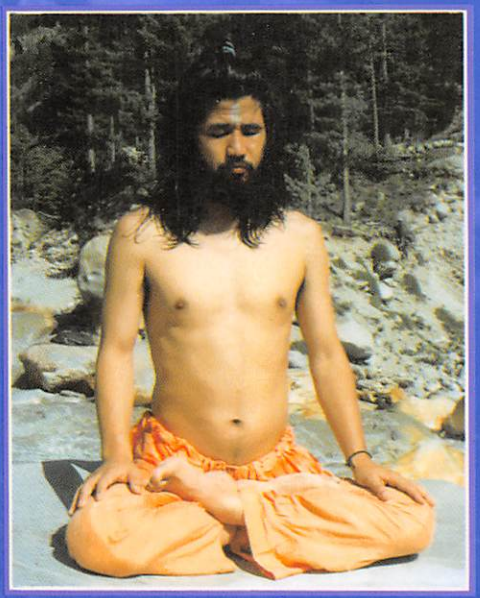
© AUM Editorial Staff 1991
ISBN4-900497-59-2 C0014 P1200E

落丁本・乱丁本がありましたらお取り替えいたします。

SHOKO ASAHARA

麻原彰晃のザ・サマディ

THE SAMADHI



ISBN4-900497-59-2 C0014 P1200E 定価1200円(本体1165円)